研　究　紀　要

第　19　号

青森県埋蔵文化財調査センターにおける石材標本作製
杉野森　淳　子（青森県埋蔵文化財調査センター）　1～20

石器の変化から見た縄文時代中期末の北東北・北海道について
齋　藤　　岳（青森県埋蔵文化財調査センター）　21～40

縄文時代後期初頭土偶の論考
成　田　滋　彦（青森県埋蔵文化財調査センター）　41～52

考古資料に関する記憶の継承について
木　村　淳　一（青森市教育委員会）　53～58

弘前市相馬地区出土の経石について
今　野　沙貴子（弘前市公園緑地課弘前城整備活用推進室）　59～68

２０１４.３

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県埋蔵文化財調査センターにおける石材標本作製

杉野森　淳 子（青森県埋蔵文化財調査センター）

1　はじめに

青森県埋蔵文化財調査センターでは、発掘調査報告書における出土石器の石材の名称（以下、石質）については、地学分野の専門家を調査員に委嘱し、鑑定を依頼している。

石質鑑定は非破壊を前提とし、実体顕微鏡などでの表面観察により行っている。使用する石質名称は昭和50年に、高校学校「地学」教科書に記載されている程度を基に作成された石器等石材分類による。精度の高い鑑定には石材の風化のない新鮮な断面観察が最も効果的であるが、石器製作後の経年による風化した表面の観察では、正確さを欠くこともある。また各調査員の専門としている地域や各自の精通した岩石分野に偏りもあるため、同一資料でも調査員間で一致した見解を得ないこともあった。考古学の立場からは産地が推定可能となる鑑定精度を求められるようになり、電子顕微鏡観察による産地同定も必要になってきた。

このため、石質鑑定について統一性を図るための方法が検討されてきた。

平成17年度に担当調査員を中心として石質鑑定に用いる主要石材の鉱物学上の名称について協議し、石材分類表をとりまとめた。ここでは精度の高い鑑定には岩石学・鉱物学的調査を踏まえた出土石器での石材標本を用いて行うことが最も有効であることから、石材標本の作製について提言された。

さらに、県内の遺跡で一般的に出土する石器であっても、産出する地域によってその様相・性質に特徴が観られるものもあり、石材によっては産出地を特定できる場合もある。石器標本と原石標本を基に石質鑑定を行うことでより正確な鑑定となる。産出地の同定は、当時の石材の流通経路を知り得る手がかりともなる。このため原石の産出地の特定と原石の標本も加える必要もある。

加えて、石材標本は発掘担当者にも一定の岩石学的知見をもってもらえる利点もある。

これらのことから、当センターでは石材標本を作製することとし、平成18年度から取り組んでいる。

2　作製過程

石材標本は、①石器標本、②プレパラート、③顕微鏡写真のセットで作製した。合わせて石材標本参考資料として原石の収集と調査も行った。

標本用資料は、風化の度合い（加工後の経年変化）が同等のものが望ましいことから、報告済の縄文時代の石器を対象とした。県内を地質学の観点から６地区に地域分けし、各地区において縄文時代各時期の代表的な遺跡の中から、石器の出土量の多い遺跡を選定した。報告書掲載資料の中から欠損品を中心に、石器のすべての石材を網羅するように当センター職員で一次選別した（図１、表１）。時期別では、早期は該当する遺跡が少ないため１遺跡のみとなった。後・晩期については、平成21年度時点で、適する資料を揃えることができなかった。

一次選別資料の石材再鑑定・標本資料の確定・岩石学的調査は、地学分野調査員である柴正敏氏（弘前大学理工学部教授）に協力いただいた。再鑑定した651点の中から、石材標本ならびに岩石学・鉱物学的調査対象として261点を選定した（表２）。このうち209点を切断し、研磨薄片（プレパラート）を作成して偏光顕微鏡による鑑定を行った。合わせて変成岩と確認された資料のうち42点はＥＰＭＡ分析による構成鉱物調査も行った。資料の岩石学的調査およびプレパラート、顕微鏡写真の作成は、柴調査員とともに弘前大学大学院理工学研究科院生　諸星哲也氏により行われた。

遺跡周辺の石材採集可能場所（海岸、河川流域、岩石露頭箇所など）の確認と各種石材の収集は、下北・八戸・三戸地域で行った。

3　結果

これらの調査成果は、諸星哲也氏の平成22年度弘前大学大学院理工学研究科修士論文「青森県内の縄文時代遺跡から出土した石器石材の岩石学的・鉱物学的研究－それら岩石の形成条件及び産地推定について－」（2011年２月）にまとめられている。

ここでは、柴氏・諸星氏による岩石学的調査の見解を要約するまでに留め、詳細な報告は別途次号で行う。

遺跡毎でみると、報告書に記載された表面観察と断面観察との鑑定結果は概ね７割程度で一致している。ただし沢ノ黒遺跡では、石器の表面の風化が著しいことから一致する割合が４割と低い。

石材の中では、安山岩－流紋岩、玄武岩－頁岩、流紋岩－頁岩、流紋岩－玄武岩等は風化や変質作用が進行すると両者の識別が特に困難となる傾向が見出された。石器の種類では、磨製石斧の結果が注目される。これまで緑色細粒凝灰岩（＝細粒緑色凝灰岩）や緑色凝灰岩・粘板岩と認識されていたものの多くは緑色岩や青色片岩および角閃岩であることがわかり、これらは構成鉱物から北海道神居古潭変成帯を産地とするものであることがわかった。また、顕微鏡観察や構成鉱物分析によって南部北上帯産のホルンフェルス、北部北上帯産の緑色片岩なども特定された。新たに青森県外を産地とする石材を識別できたことは、石材の流通を考える上での良好な分析結果である。

4　石材標本の活用

県内で出土する石器に使用される石材分類表は平成17年度の協議を基に作成され、今回の調査を踏まえて改定した（表４）。平成18年以降追加された石材（緑色岩・緑レン石角閃岩）や、前回の協議で削除された石材（火山礫凝灰岩）が石器に使用されていることが今回の岩石学的調査でわかった。使用する岩石名は高校教科書向け程度を基準とし、基本は「岩石名」を使用するが、種類によっては「述語－岩石名」を使用している。また分析結果により、鉱物名を付することで産地が特定されるものについては詳細な名称も用いる場合もある。

標本は遺跡毎での選定のため分類表の石材を全て網羅していない。今回揃えることができなかった縄文時代後期・晩期の資料とともに特殊な石材については今後、標本に適する資料が揃った段階で補充することも必要である。

石材標本を作製したことにより、多くの石器石材は報告書に示された肉眼鑑定とほぼ同等の岩石と同定でき、肉眼鑑定による識別の信頼性が確かめられた。このような肉眼鑑定の信頼性が確認できた反面、一部の石材で表面観察と断面観察では異なるものも認められる。今後の石質鑑定では、今回の調査によって得られたデータを指標として、鑑定者の石材への共通認識を確かにしながら、精度の高いものにしていく方針である。さらにより石材の流通を探るため、石材採取場所の踏査と石材分布図の作成を検討していきたい。

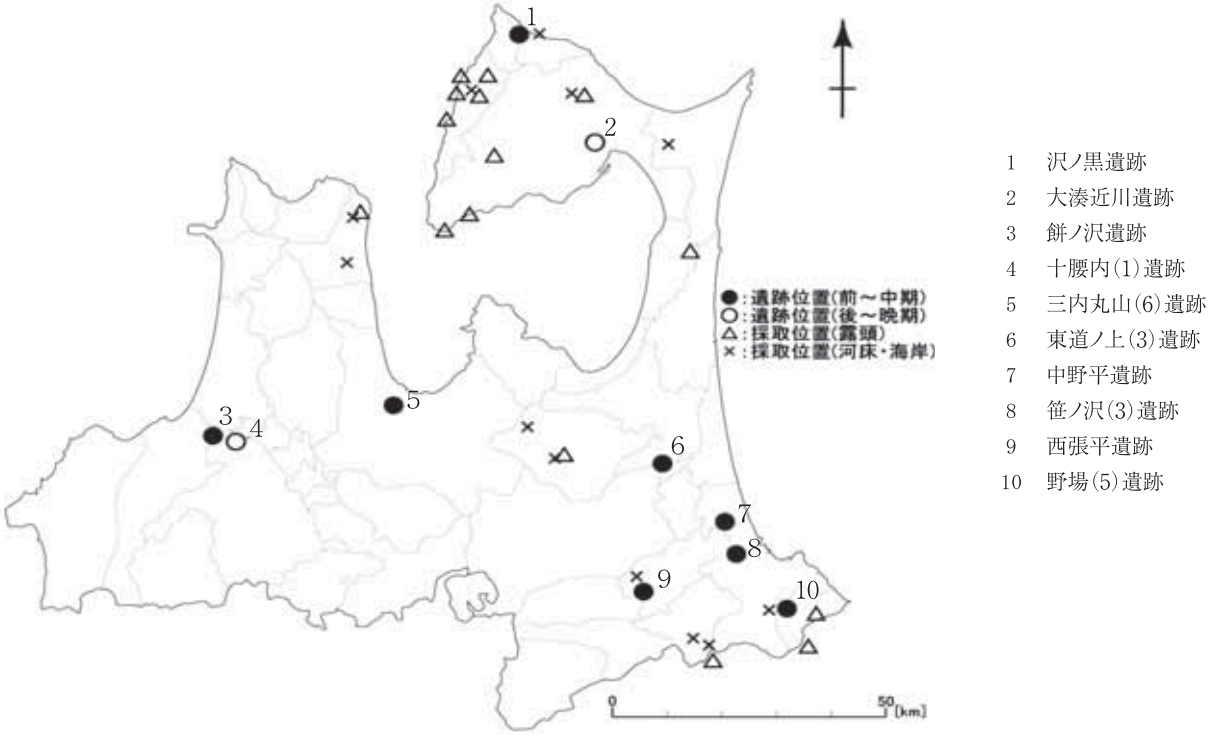
5　おわりに

今回は、紙面の都合上、石材標本の製作過程の紹介であったが、岩石学的調査結果（産地の記載・データ等）は、次回報告する予定である。

石材標本を作製するにあたり、多大なるご協力を頂きました当センター調査員である柴正敏氏（弘前大学理工学部教授）と諸星哲也氏（同大学大学院院生）に感謝申し上げます。

表1　各地域と遺跡の区分

時代 / 地域	縄文時代				
	早期	前期	中期	後期	晩期
下北地域		沢ノ黒遺跡		大湊近川遺跡	
津軽地域		餅ノ沢遺跡			十腰内(1)遺跡
青森地域			三内丸山(6)遺跡		
上北地域		東道ノ上(3)遺跡			
八戸地域	中野平遺跡	笹ノ沢(3)遺跡			
		西張平遺跡			
三戸地域			野場(5)遺跡		



1　沢ノ黒遺跡
2　大湊近川遺跡
3　餅ノ沢遺跡
4　十腰内(1)遺跡
5　三内丸山(6)遺跡
6　東道ノ上(3)遺跡
7　中野平遺跡
8　笹ノ沢(3)遺跡
9　西張平遺跡
10　野場(5)遺跡

図1　標本資料遺跡位置図

表2　石材標本および再鑑定数

遺跡名	集番号	再鑑定総数	岩石学調査対象	薄片観察（断面観察）	EPMA分析
沢ノ黒	435	79	35	25	9
大湊近川	104	37	20	14	3
餅ノ沢	278	77	20	16	3
十腰内(1)	261、304	39	21	14	1
三内丸山(6)	279、327	77	29	22	5
東道ノ上(3)	424	78	23	20	4
中野平	134	60	29	25	7
笹ノ沢(3)	305、318、372	85	37	32	3
西張平	436	68	23	20	3
野場(5)	150	51	24	21	4
		651	261	209	42

表３　石材調査結果

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
1	沢ノ黒	435	14－ 2				敲磨器	流紋岩	流紋岩		
2	沢ノ黒	435	46－50	○			石製品?	片岩	(珪質)泥岩		
3	沢ノ黒	435	48－67				両面加工石器	凝灰岩	凝灰岩		
4	沢ノ黒	435	51－90				石製品?	片岩	(珪質)泥岩		
5	沢ノ黒	435	52－101				磨製石斧?	片岩	緑色岩		
6	沢ノ黒	435	56－133				削器	凝灰岩	凝灰岩		
7	沢ノ黒	435	56－137				使用痕剥片	珪質頁岩	珪質頁岩		
8	沢ノ黒	435	56－138				使用痕剥片	珪質頁岩	珪質頁岩		
9	沢ノ黒	435	69－ 3				石核	凝灰岩	凝灰岩		
10	沢ノ黒	435	112－39	○			石鏃	玉髄	玉髄		
11	沢ノ黒	435	112－44	○			石鏃	安山岩	珪質シルト岩		
12	沢ノ黒	435	113－60				石槍	玉髄	玉髄		
13	沢ノ黒	435	113－69	○			石槍	チャート	チャート		
14	沢ノ黒	435	114－73				石槍	頁岩	頁岩		
15	沢ノ黒	435	114－80				石槍	頁岩	頁岩		
16	沢ノ黒	435	119－131				石篦	片岩	珪質頁岩		
17	沢ノ黒	435	122－159				両面加工石器	安山岩	流紋岩質凝灰岩		石槍未製品
18	沢ノ黒	435	125－168	○			石核	頁岩	頁岩		
19	沢ノ黒	435	127－175				石核	チャート	チャート		
20	沢ノ黒	435	128－178				石核	凝灰岩	流紋岩質凝灰岩		
21	沢ノ黒	435	128－179				使用痕剥片	凝灰岩	流紋岩質凝灰岩		
22	沢ノ黒	435	128－180	○			両面加工石器	珪質頁岩	珪質頁岩		
23	沢ノ黒	435	129－ 1				磨製石斧	片岩	緑色岩		
24	沢ノ黒	435	129－ 2				磨製石斧	片岩	緑色岩		
25	沢ノ黒	435	129－ 3				磨製石斧	片岩	緑色岩		
26	沢ノ黒	435	129－ 4				磨製石斧	片岩	緑色岩		
27	沢ノ黒	435	130－ 5				磨製石斧	片岩	緑色岩		
28	沢ノ黒	435	130－ 8	○	○	○	磨製石斧	粘板岩	角閃岩	緑色岩	産地：北海道の可能性高い
29	沢ノ黒	435	130－10	○	○	○	磨製石斧	粘板岩	青色片岩	Jd-青色片岩	産地：神居古潭変成帯神居古潭峡谷
30	沢ノ黒	435	130－13	○	○	○	磨製石斧	砂岩	角閃岩	緑色岩	産地：北海道の可能性高い
31	沢ノ黒	435	130－15	○	○		磨製石斧	花崗閃緑岩	花崗閃緑岩	OpxHbl-デイサイト	
32	沢ノ黒	435	130－16				磨製石斧	片岩	緑色岩		
33	沢ノ黒	435	130－17	○	○	○	磨製石斧	片岩	角閃岩	緑色岩	産地：北海道の可能性高い
34	沢ノ黒	435	130－18				磨製石斧	片岩	緑色岩		
35	沢ノ黒	435	131－20				磨製石斧	砂岩	緑色岩		
36	沢ノ黒	435	131－21	○	○	○	磨製石斧	砂岩	角閃岩	緑色岩	産地：北海道の可能性高い。擦切痕あり。再加工あるいは未製品
37	沢ノ黒	435	131－22				磨製石斧未製品	片岩	緑色岩		
38	沢ノ黒	435	131－24	○	○		打製石斧	泥岩	凝灰岩	Cpx-安山岩	
39	沢ノ黒	435	131－25				打製石斧	砂岩	凝灰岩		
40	沢ノ黒	435	132－29				半円状扁平打製石器	閃緑岩	閃緑岩		
41	沢ノ黒	435	133－33	○	○		半円状扁平打製石器	ひん岩	ひん岩	CpxOpx-安山岩	
42	沢ノ黒	435	133－35				半円状扁平打製石器	閃緑岩	閃緑岩		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
43	沢ノ黒	435	133－37				半円状扁平打製石器	安山岩	安山岩		
44	沢ノ黒	435	134－39	○	○		半円状扁平打製石器	安山岩	安山岩～デイサイト	CpxOpx-安山岩	
45	沢ノ黒	435	134－40				半円状扁平打製石器	閃緑岩	花崗閃緑岩		
46	沢ノ黒	435	134－41				半円状扁平打製石器	閃緑岩	花崗閃緑岩		
47	沢ノ黒	435	134－42	○	○		半円状扁平打製石器	花崗閃緑岩	花崗閃緑岩～ 花崗閃緑班岩	石英閃緑斑岩	
48	沢ノ黒	435	135－45				半円状扁平打製石器	デイサイト	デイサイト		
49	沢ノ黒	435	135－47	○	○		半円状扁平打製石器	デイサイト	デイサイト	CpxOpx-安山岩	
50	沢ノ黒	435	135－53	○	○		その他の礫	泥岩	流紋岩質凝灰岩	OpxHbl-デイサイト	
51	沢ノ黒	435	136－64				敲石	安山岩	安山岩		
52	沢ノ黒	435	136－66	○	○		敲磨器	玄武岩	玄武岩	CpxOpx-流紋岩	
53	沢ノ黒	435	136－68	○			敲磨器	石英	石英		
54	沢ノ黒	435	137－74	○	○		敲磨器	閃緑岩	閃緑岩	Hbl-閃緑斑岩	
55	沢ノ黒	435	138－78	○	○		敲磨器	ひん岩	閃緑岩～はんれい岩	BtHbl-花崗閃緑岩	
56	沢ノ黒	435	138－81	○	○		敲磨器	安山岩	安山岩	CpxOpx-安山岩	
57	沢ノ黒	435	140－91				擦切具	はんれい岩	はんれい岩 (閃緑岩の可能性あり)		
58	沢ノ黒	435	140－94	○	○		擦切具	はんれい岩	はんれい岩	Hbl-粗粒玄武岩	
59	沢ノ黒	435	140－100	○	○		石錘?	泥岩	デイサイト質凝灰岩	Cpx-デイサイト	
60	沢ノ黒	435	140－101	○			その他の礫	赤鉄鉱	鉄石英		
61	沢ノ黒	435	141－ 1				抉状耳飾	片岩	緑色岩		
62	沢ノ黒	435	141－ 2				抉状耳飾	片岩	緑色岩		
63	沢ノ黒	435	141－ 5				雨垂石	泥岩	凝灰岩		
64	沢ノ黒	435	142－ 8	○	○		青竜刀形石器	砂岩	粗粒玄武岩	Cpx-粗粒玄武岩	
65	沢ノ黒	435	163－ 7				半円状扁平打製石器	砂岩	凝灰岩		
66	沢ノ黒	435	164－ 9				半円状扁平打製石器	砂岩	凝灰岩		
67	沢ノ黒	435	164－10				半円状扁平打製石器	砂岩	凝灰岩		
68	沢ノ黒	435	165－17	○	○		半円状扁平打製石器	砂岩	溶結凝灰岩	CpxOpx-安山岩	
69	沢ノ黒	435	167－42	○			磨石	泥岩	泥岩		
70	沢ノ黒	435	170－67	○			敲磨器	硬質頁岩	硬質頁岩		
71	沢ノ黒	435	170－69				敲磨器	砂岩	粗粒玄武岩		
72	沢ノ黒	435	172－79	○	○		加工痕のある礫	流紋岩	流紋岩	CpxOpx-デイサイト	
73	沢ノ黒	435	172－85	○	○	○	擦切痕をもつ礫	粘板岩	粘板岩	緑色岩	産地：神居古潭変成帯額平川流域
74	沢ノ黒	435	172－86	○	○	○	擦切痕をもつ礫	砂岩	緑色凝灰岩	緑色岩	産地：神居古潭変成帯額平川流域
75	沢ノ黒	435	172－87	○	○	○	擦切痕をもつ礫	砂岩	細粒緑色凝灰岩	緑色岩	
76	沢ノ黒	435	172－90	○	○	○	擦切痕をもつ礫	硬質頁岩	緑色岩	緑色岩	
77	沢ノ黒	435	178－ 6				半円状扁平打製石器	泥岩	凝灰岩		
78	沢ノ黒	435	179－11				磨石	粘板岩	粘板岩		
79	沢ノ黒	435	181－32				擦切痕をもつ礫	粘板岩	粘板岩		
1	大湊近川	104	63－10				不定形石器	頁岩	凝灰岩		
2	大湊近川	104	67－30	○			磨敲凹石類	チャート	チャート		
3	大湊近川	104	67－39				磨敲凹石類	チャート	チャート		
4	大湊近川	104	120－ 1	○			不定形石器	鉄石英	鉄石英		
5	大湊近川	104	141－ 3	○			不定形石器	頁岩	頁岩		
6	大湊近川	104	298－ 2				石槍	珪質頁岩	珪質凝灰岩		
7	大湊近川	104	298－ 6				石鏃	頁岩	凝灰岩		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
8	大湊近川	104	300－ 37	○	○		石篦	珪質頁岩	珪質凝灰岩	Opx-流紋岩	
9	大湊近川	104	302－ 60	○			不定形石器	珪質頁岩	珪質頁岩		
10	大湊近川	104	302－ 64				不定形石器	流紋岩	流紋岩		
11	大湊近川	104	304－ 75				不定形石器	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
12	大湊近川	104	304－ 82				不定形石器	珪質頁岩	珪質頁岩		
13	大湊近川	104	304－ 88				不定形石器	珪質頁岩	珪質頁岩		
14	大湊近川	104	305－ 96				不定形石器	玉髄	玉髄		
15	大湊近川	104	306－ 97				不定形石器	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩		
16	大湊近川	104	306－ 99	○			不定形石器	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
17	大湊近川	104	306－103				不定形石器	頁岩	凝灰岩		
18	大湊近川	104	306－106	○			不定形石器	玉髄	玉髄		
19	大湊近川	104	307－109				磨製石斧	閃緑岩	閃緑岩		
20	大湊近川	104	307－110	○	○		磨製石斧	閃緑岩	花崗閃緑岩	Am-石英閃緑斑岩	
21	大湊近川	104	307－111				磨製石斧	閃緑岩	花崗閃緑岩		
22	大湊近川	104	307－186	○	○		磨製石斧	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	デイサイト	産地：県内
23	大湊近川	104	307－112				磨製石斧	閃緑岩	閃緑岩		
24	大湊近川	104	307－113	○	○	○	磨製石斧	砂岩	はんれい岩 (変はんれい岩)	Cpx-緑色岩	
25	大湊近川	104	307－114	○	○		磨製石斧	粘板岩	凝灰質粘板岩	緑色凝灰岩	産地：県内
26	大湊近川	104	307－115	○	○	○	磨製石斧	輝緑凝灰岩	軟玉岩	アクチノ閃石岩 (ネフライト)	産地：北海道の可能性あり
27	大湊近川	104	307－116	○	○	○	磨製石斧	輝緑凝灰岩	緑色岩	緑色岩	
28	大湊近川	104	308－133				磨敲凹石類	安山岩	安山岩		
29	大湊近川	104	308－139	○	○		磨敲凹石類	安山岩	安山岩	CpxOpx-安山岩	
30	大湊近川	104	309－151				磨敲凹石類	閃緑岩	閃緑岩		
31	大湊近川	104	309－152	○	○		磨敲凹石類	閃緑岩	閃緑岩	Hbl-石英閃緑斑岩	
32	大湊近川	104	309－159				磨敲凹石類	閃緑岩	閃緑岩		
33	大湊近川	104	310－161	○	○		磨敲凹石類	流紋岩	流紋岩	デイサイト	
34	大湊近川	104	311－175	○	○		石皿台石砥石類	砂岩	砂岩	CpxOpx- 石英質アレナイト	アレナイトは砂岩の一種。薄片観察で細分可能。
35	大湊近川	104	311－176	○	○		石皿台石砥石類	凝灰岩	凝灰岩	流紋岩	
36	大湊近川	104	312－181	○	○		擦切具	粘板岩	粘板岩	Bt-粘板岩	
37	大湊近川	104	312－184b	○	○		石棒	石英安山岩	デイサイト	ひん岩	
1	餅ノ沢	278	195－66				石核	サヌカイト?	玄武岩		
2	餅ノ沢	278	195－67	○	○		剥片	サヌカイト	玄武岩	OxHbl-玄武岩	産地：県内
3	餅ノ沢	278	195－68				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
4	餅ノ沢	278	196－71				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
5	餅ノ沢	278	196－73				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
6	餅ノ沢	278	196－74				磨製石斧	輝緑岩	緑色岩		
7	餅ノ沢	278	196－80				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
8	餅ノ沢	278	196－81				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
9	餅ノ沢	278	196－83	○	○	○	磨製石斧	粘板岩	粘板岩	CpxLws-青色片岩	産地：神居古潭変成帯神居古潭峡谷
10	餅ノ沢	278	196－84				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
11	餅ノ沢	278	196－85	○	○	○	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩	緑色岩	産地：神居古潭変成帯額平川流域
12	餅ノ沢	278	196－86				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
13	餅ノ沢	278	196－87				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
14	餅ノ沢	278	196－89				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
15	餅ノ沢	278	196－90				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
16	餅ノ沢	278	196－91				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
17	餅ノ沢	278	196－92	○	○	○	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色片岩	CpxLws-青色片岩	産地：神居古潭変成帯神居古潭峡谷
18	餅ノ沢	278	196－93				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
19	餅ノ沢	278	198－111				凹み石	閃緑岩	花崗岩		
20	餅ノ沢	278	199－127				凹み石	安山岩	安山岩		
21	餅ノ沢	278	200－141	○	○		凹み石	安山岩	安山岩	CpxOpx-安山岩	
22	餅ノ沢	278	201－ 4	○			石鏃	玉髄	玉髄		
23	餅ノ沢	278	201－27	○			石鏃	メノウ	メノウ		
24	餅ノ沢	278	202－53				石鏃	チャート	玉髄		
25	餅ノ沢	278	202－65	○			石鏃	珪質頁岩	珪質頁岩		
26	餅ノ沢	278	206－140	○	○		磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	細粒緑色凝灰岩	細粒緑色凝灰岩	
27	餅ノ沢	278	206－142				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
28	餅ノ沢	278	206－145				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
29	餅ノ沢	278	206－146				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
30	餅ノ沢	278	206－149				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
31	餅ノ沢	278	206－150				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
32	餅ノ沢	278	206－152				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
33	餅ノ沢	278	206－154				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
34	餅ノ沢	278	206－155				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
35	餅ノ沢	278	206－156				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
36	餅ノ沢	278	207－159				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
37	餅ノ沢	278	207－160				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
38	餅ノ沢	278	207－161				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
39	餅ノ沢	278	207－163				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
40	餅ノ沢	278	207－164				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
41	餅ノ沢	278	207－166				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
42	餅ノ沢	278	207－167				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
43	餅ノ沢	278	207－168				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
44	餅ノ沢	278	207－169				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
45	餅ノ沢	278	207－170				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
46	餅ノ沢	278	207－171				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
47	餅ノ沢	278	207－173				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
48	餅ノ沢	278	207－174				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
49	餅ノ沢	278	207－176				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	(玄武岩質)緑色岩		
50	餅ノ沢	278	207－177				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
51	餅ノ沢	278	207－178				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
52	餅ノ沢	278	209－186				石皿	閃緑岩	安山岩		
53	餅ノ沢	278	211－206	○	○		石皿	流紋岩	流紋岩	Opx-流紋岩質凝灰岩	
54	餅ノ沢	278	218－239	○	○		磨り石	閃緑岩	花崗岩	BtHbl-花崗閃緑岩	
55	餅ノ沢	278	218－240				磨り石	閃緑岩	花崗閃緑岩		
56	餅ノ沢	278	218－246	○	○		叩き石	チャート	チャート	チャート	産地：県内
57	餅ノ沢	278	218－247	○	○		叩き石	珪質頁岩	凝灰岩(珪質頁岩)	泥岩	
58	餅ノ沢	278	218－249				叩き石	チャート	玉髄		
59	餅ノ沢	278	219－260	○	○		凹み石	流紋岩	凝灰岩	CpxOpx-安山岩	
60	餅ノ沢	278	220－274	○	○		凹み石	閃緑岩	花崗閃緑岩	BtHbl-花崗閃緑岩	

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
61	餅ノ沢	278	231－391				凹み石	閃緑岩	花崗岩		
62	餅ノ沢	278	232－394	○	○		凹み石	チャート	珪質凝灰岩	Cpx-流紋岩	産地：県内
63	餅ノ沢	278	244－ 91	○			石篦	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
64	餅ノ沢	278	246－109				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
65	餅ノ沢	278	246－110				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色片岩		
66	餅ノ沢	278	246－111				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
67	餅ノ沢	278	246－112				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
68	餅ノ沢	278	246－114				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
69	餅ノ沢	278	246－115				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
70	餅ノ沢	278	246－116				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
71	餅ノ沢	278	246－117				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
72	餅ノ沢	278	246－125				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
73	餅ノ沢	278	247－127	○	○		磨製石斧	頁岩	頁岩	泥岩	
74	餅ノ沢	278	247－130				磨り石	閃緑岩	花崗岩		
75	餅ノ沢	278	247－131				石冠	閃緑岩	閃緑岩		
76	餅ノ沢	278	247－132	○	○		石冠	閃緑岩	閃緑岩	HblBt-花崗閃緑岩	
77	餅ノ沢	278	259－285	○	○		凹み石	凝灰岩	デイサイト	CpxOpx-安山岩	
1	十腰内(1)	261	51－32	○			石鏃	緑色細粒凝灰岩	凝灰質頁岩		
2	十腰内(1)	261	52－51	○			石錐	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
3	十腰内(1)	261	52－52				石錐	玉髄	玉髄		
4	十腰内(1)	261	54－73	○			石錐	鉄石英	鉄石英		
5	十腰内(1)	261	56－96	○			不定形石器	玉髄	玉髄		
6	十腰内(1)	261	57－109				不定形石器	珪質頁岩	珪質頁岩		
7	十腰内(1)	261	57－110	○			不定形石器	珪質頁岩	珪質頁岩		
8	十腰内(1)	261	58－112				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	細粒緑色凝灰岩		
9	十腰内(1)	261	58－116				敲石	閃緑岩	花崗岩		
10	十腰内(1)	261	58－117	○	○		磨･敲石	凝灰岩	安山岩	HblOpxCpx-安山岩	
11	十腰内(1)	261	58－118				磨･敲石	閃緑岩	花崗閃緑岩		
12	十腰内(1)	261	58－119	○	○		敲石	閃緑岩	花崗閃緑岩	HblBt-花崗閃緑岩	
13	十腰内(1)	261	58－120	○			敲石	頁岩	頁岩		
14	十腰内(1)	261	60－126	○	○		凹石	安山岩	デイサイト	OpxCpx-安山岩	
15	十腰内(1)	261	60－127	○	○		凹石	安山岩	安山岩	OpxCpx-安山岩	
16	十腰内(1)	261	60－129	○	○		凹石	閃緑岩	花崗岩	HblBt-花崗閃緑岩	
17	十腰内(1)	261	63－148*	○	○		凹石	凝灰岩	凝灰岩	CpxOpx-安山岩	
18	十腰内(1)	261	65－161				凹石	凝灰岩	凝灰岩		
19	十腰内(1)	261	65－162				凹石	凝灰岩	安山岩		
20	十腰内(1)	261	67－173	○	○		砥石	細粒凝灰岩	細粒凝灰岩	長石質ワッケ	ワッケは砂岩の一種。薄片観察で細分可能。
21	十腰内(1)	261	67－175	○	○		砥石	砂岩	砂岩	Bt- 石英質アレナイト	アレナイトは砂岩の一種。薄片観察で細分可能。
22	十腰内(1)	304	53－ 1	○			石鏃	メノウ	メノウ		
23	十腰内(1)	304	53－16				石鏃	石英	玉髄		
24	十腰内(1)	304	63－148*	○	○	○	磨製石斧	緑色凝灰岩	緑色岩	緑色岩	
25	十腰内(1)	304	63－149				磨製石斧	輝緑岩	粗粒玄武岩		
26	十腰内(1)	304	63－152				磨製石斧	凝灰質細粒砂岩	凝灰岩		
27	十腰内(1)	304	63－153				磨製石斧	輝緑凝灰岩	粗粒玄武岩		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
28	十腰内(1)	304	63－156	○	○		磨製石斧	輝緑岩	粗粒玄武岩	CpxHbl-石英閃緑斑岩	
29	十腰内(1)	304	63－157	○	○		磨製石斧	輝緑凝灰岩	粗粒玄武岩(古期)	粗粒玄武岩	産地：県内
30	十腰内(1)	304	63－158				磨製石斧	輝緑凝灰岩	粗粒玄武岩		
31	十腰内(1)	304	63－159	○	○		磨製石斧	輝緑凝灰岩	粗粒玄武岩(古期)	BtCpxOpxHbl-閃緑岩	産地：県内
32	十腰内(1)	304	64－165				敲石	花崗岩	花崗岩		
33	十腰内(1)	304	65－170				敲石	花崗岩	花崗岩		
34	十腰内(1)	304	66－172	○	○		磨・敲石	ひん岩	ひん岩	CpxOpx-安山岩	
35	十腰内(1)	304	69－199				凹石	凝灰質砂岩	凝灰岩		
36	十腰内(1)	304	73－217				凹石	凝灰質砂岩	凝灰岩		
37	十腰内(1)	304	79－253				凹石	流紋岩	花崗岩		
38	十腰内(1)	304	86－278				石皿	砂質凝灰岩	砂質凝灰岩		
39	十腰内(1)	304	87－285	○	○		用途不明	流紋岩	流紋岩	Opx-デイサイト	
1	三内丸山(6)	279	118－37	○			石鏃	赤チャート	カルセドニー赤(メノウ)		
2	三内丸山(6)	327	46－ 5				石斧	閃緑岩	閃緑岩		
3	三内丸山(6)	327	46－ 6				敲磨器	流紋岩	流紋岩		
4	三内丸山(6)	327	46－10				敲磨器	流紋岩	流紋岩		
5	三内丸山(6)	327	46－18				敲磨器	安山岩	安山岩		
6	三内丸山(6)	327	47－11				敲磨器	安山岩	安山岩		
7	三内丸山(6)	327	48－ 4	○	○		敲磨器	流紋岩	流紋岩	流紋岩	産地：県内
8	三内丸山(6)	327	48－ 9	○	○		敲磨器	緑色凝灰岩	ひん岩	CpxBtHbl-石英閃緑斑岩	
9	三内丸山(6)	327	48－12	○	○		敲磨器	安山岩	安山岩	OpxCpxHbl-安山岩	
10	三内丸山(6)	327	49－ 5				敲磨器	凝灰岩	安山岩		
11	三内丸山(6)	327	49－ 9	○	○		敲磨器	凝灰岩	凝灰岩	デイサイト質凝灰岩	産地：県内
12	三内丸山(6)	327	49－11				半円状扁平打製石器	砂岩	凝灰岩		
13	三内丸山(6)	327	50－ 9	○	○		石皿・台皿	石英斑岩	石英斑岩	HblCpxBt-デイサイト	
14	三内丸山(6)	327	50－12	○	○		石皿・台皿	粗粒砂岩	粗粒凝灰岩	HblCpxOl-粗粒玄武岩	
15	三内丸山(6)	327	51－ 3				石皿・台皿	泥岩	凝灰岩		
16	三内丸山(6)	327	51－ 4	○	○		石皿・台皿	細粒砂岩	砂岩	デイサイト質凝灰岩	
17	三内丸山(6)	327	51－ 5	○	○		石皿・台皿	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	デイサイト質凝灰岩	
18	三内丸山(6)	327	51－ 6				石皿・台皿	泥岩	凝灰岩		
19	三内丸山(6)	327	51－ 7				石皿・台皿	石英安山岩	デイサイト		
20	三内丸山(6)	327	51－10	○	○		石皿・台皿	石英安山岩	デイサイト	OlOpxCpx-安山岩	
21	三内丸山(6)	327	51－11				石皿・台皿	石英安山岩	デイサイト		
22	三内丸山(6)	327	78－ 3				石鏃	チャート	カルセドニー(玉髄)		
23	三内丸山(6)	327	80－ 4				不定形石器	頁岩	頁岩		
24	三内丸山(6)	327	82－ 2	○	○	○	石斧	輝緑凝灰岩	片岩	CpxLws-青色片岩	産地：神居古潭変成帯神居古潭峡谷
25	三内丸山(6)	327	82－ 3				石斧	閃緑岩	閃緑岩		
26	三内丸山(6)	327	82－ 4	○	○		石斧	はんれい岩	はんれい岩	OpxCpxHbl-はんれい岩	
27	三内丸山(6)	327	82－ 5	○	○		石斧	閃緑岩	閃緑岩	OpxCpxHbl-閃緑斑岩	
28	三内丸山(6)	327	84－ 4	○	○		敲磨器	泥岩	溶結凝灰岩	デイサイト質凝灰岩	
29	三内丸山(6)	327	87－ 4				石皿・台皿	泥岩	凝灰岩		
30	三内丸山(6)	327	87－ 6				石皿・台皿	泥岩	凝灰岩		
31	三内丸山(6)	327	87－ 7				石皿・台皿	泥岩	凝灰岩		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
32	三内丸山(6)	327	87－ 9				石皿・台皿	泥岩	凝灰岩		
33	三内丸山(6)	327	87－10				石皿・台皿	凝灰岩	凝灰岩		
34	三内丸山(6)	327	87－11				石皿・台皿	泥岩	凝灰岩		
35	三内丸山(6)	327	96－ 6	○	○	○	石斧	緑色細粒凝灰岩	細粒緑色凝灰岩	緑色岩	溝状擦痕有り
36	三内丸山(6)	327	106－16	○			不定形石器	頁岩	頁岩		
37	三内丸山(6)	327	107－ 1				石斧	緑色細粒凝灰岩	細粒緑色凝灰岩		
38	三内丸山(6)	327	116－ 5				北海道式石冠	輝緑岩	粗粒玄武岩(古期)		
39	三内丸山(6)	327	116－ 8	○			敲磨器	玉髄	メノウ		
40	三内丸山(6)	327	117－ 1				石皿・台皿	ひん岩	ひん岩		
41	三内丸山(6)	327	130－10				石斧	輝緑岩	粗粒玄武岩(古期)		
42	三内丸山(6)	327	169－ 8				石斧	緑色細粒凝灰岩	細粒緑色凝灰岩		
43	三内丸山(6)	327	169－ 9	○	○	○	石斧	千枚岩	千枚岩	Lws-青色片岩	産地：神居古潭変成帯神居古潭峡谷
44	三内丸山(6)	327	170－ 4	○	○		敲磨器	細粒砂岩	細粒砂岩	OpxHblCpx-安山岩	
45	三内丸山(6)	327	170－ 9	○			敲磨器	玉髄	玉髄		
46	三内丸山(6)	327	170－11				敲磨器	頁岩	頁岩		
47	三内丸山(6)	327	170－12	○	○		敲磨器	輝緑岩	粗粒玄武岩(古期)	CpxHbl-粗粒玄武岩	
48	三内丸山(6)	327	171－ 8				敲磨器	泥岩	凝灰岩		
49	三内丸山(6)	327	171－10				北海道式石冠	砂岩	砂岩		
50	三内丸山(6)	327	172－ 5				石皿・台皿	細粒凝灰岩	細粒凝灰岩		
51	三内丸山(6)	327	172－ 6				砥石	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩		
52	三内丸山(6)	327	172－ 7				砥石	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩		
53	三内丸山(6)	327	172－ 8				石皿・台皿	泥岩	凝灰岩		
54	三内丸山(6)	327	172－11				石皿・台皿	泥岩	凝灰岩		
55	三内丸山(6)	327	207－ 7	○			不定形石器	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
56	三内丸山(6)	327	207－11				不定形石器	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
57	三内丸山(6)	327	209－23				不定形石器	チャート	カルセドニー(玉髄)		
58	三内丸山(6)	327	211－10	○			不定形石器	珪質頁岩	珪質頁岩		
59	三内丸山(6)	327	211－12				不定形石器	珪質頁岩	珪質頁岩		
60	三内丸山(6)	327	212－ 2				石斧	輝緑岩	粗粒玄武岩		
61	三内丸山(6)	327	212－ 3				石斧	角閃緑ひん岩	ひん岩		
62	三内丸山(6)	327	212－ 6				石斧	閃緑ひん岩	閃緑ひん岩		
63	三内丸山(6)	327	213－ 9	○	○	○	石斧	輝緑凝灰岩	青色片岩	LwsArg-青色片岩	産地：神居古潭変成帯神居古潭峡谷
64	三内丸山(6)	327	213－11				石斧	玄武岩	粗粒凝灰岩		
65	三内丸山(6)	327	213－20	○	○	○	石斧	粘板岩	粘板岩	LwsCpx-青色片岩	産地：神居古潭変成帯神居古潭峡谷
66	三内丸山(6)	327	214－ 4				石斧	閃緑ひん岩	閃緑ひん岩		
67	三内丸山(6)	327	214－ 6	○	○		石斧	閃緑ひん岩	閃緑ひん岩	CpxHbl-閃緑斑岩	
68	三内丸山(6)	327	214－13				敲磨器	ひん岩	ひん岩		
69	三内丸山(6)	327	214－14				敲磨器	ひん岩	ひん岩		
70	三内丸山(6)	327	216－11				敲磨器	チャート	チャート		
71	三内丸山(6)	327	216－14	○			敲磨器	チャート	チャート		
72	三内丸山(6)	327	218－13				敲磨器	泥岩	凝灰岩		
73	三内丸山(6)	327	221－16	○	○		石皿・台皿	細粒凝灰岩	細粒凝灰岩	流紋岩質凝灰岩	産地：県内
74	三内丸山(6)	327	222－ 4				石皿・台皿	細粒凝灰岩	細粒凝灰岩		
75	三内丸山(6)	327	222－11				石皿・台皿	砂岩	凝灰岩		
76	三内丸山(6)	327	223－ 9	○	○		加工礫	頁岩	頁岩	流紋岩質凝灰岩	産地：県内
77	三内丸山(6)	327	223－12				加工礫	頁岩	流紋岩		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
1	東道ノ上(3)	424	12－71				UF	カルセドニー	カルセドニー		
2	東道ノ上(3)	424	18－46				半円状扁平打製石器	泥岩	凝灰岩		
3	東道ノ上(3)	424	31－27				半円状扁平打製石器	輝緑岩	緑色岩		
4	東道ノ上(3)	424	50－61				石鏃	凝灰質頁岩	凝灰質頁岩		
5	東道ノ上(3)	424	51－78				磨製石斧	緑色片岩	緑色岩		
6	東道ノ上(3)	424	51－83				敲石	凝灰質泥岩	デイサイト		
7	東道ノ上(3)	424	52－91	○	○		半円状扁平打製石器	千枚岩	片岩	Bt- 砂質ホルンフェルス	
8	東道ノ上(3)	424	59－64				凹石	凝灰質泥岩	凝灰岩		
9	東道ノ上(3)	424	86－27				スクレイパー	玄武岩	デイサイト		
10	東道ノ上(3)	424	91－ 7	○			スクレイパー	カルセドニー	カルセドニー(玉髄)		
11	東道ノ上(3)	424	113－32	○			石鏃	メノウ	メノウ		
12	東道ノ上(3)	424	113－39	○			石鏃	凝灰質頁岩	凝灰質頁岩		
13	東道ノ上(3)	424	116－11				石篦	ホルンフェルス	珪質頁岩		
14	東道ノ上(3)	424	117－ 3				石核	ホルンフェルス	デイサイト		
15	東道ノ上(3)	424	118－14				RF	珪質頁岩	珪質頁岩		
16	東道ノ上(3)	424	119－ 4				UF	ホルンフェルス	デイサイト		
17	東道ノ上(3)	424	119－ 5	○	○		UF	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	
18	東道ノ上(3)	424	119－ 9	○	○		磨製石斧	凝灰岩	凝灰岩	CpxOlOpx-安山岩	未成品
19	東道ノ上(3)	424	119－11				磨製石斧	泥岩	凝灰岩		
20	東道ノ上(3)	424	119－13	○	○	○	磨製石斧	ホルンフェルス	緑色岩	緑色岩	擦切痕あり
21	東道ノ上(3)	424	119－15	○	○	○	磨製石斧	ホルンフェルス	ホルンフェルス	緑色岩	擦切痕あり
22	東道ノ上(3)	424	119－16				磨製石斧	ホルンフェルス	緑色岩		
23	東道ノ上(3)	424	120－ 5	○	○		半円状扁平打製石器	ひん岩	ひん岩	CpxOpx-安山岩	
24	東道ノ上(3)	424	120－ 9				半円状扁平打製石器	凝灰質砂岩	凝灰岩		
25	東道ノ上(3)	424	120－10				半円状扁平打製石器	粘板岩	凝灰岩		
26	東道ノ上(3)	424	120－13	○	○		半円状扁平打製石器	安山岩	安山岩	OlOpxCpx-安山岩	
27	東道ノ上(3)	424	121－ 7				磨石	デイサイト	安山岩		
28	東道ノ上(3)	424	121－ 8				磨石	安山岩	粗粒玄武岩		
29	東道ノ上(3)	424	121－10				敲石	流紋岩	凝灰岩		
30	東道ノ上(3)	424	121－13				敲石	斑岩	安山岩		
31	東道ノ上(3)	424	120－15	○	○		半円状扁平打製石器	安山岩	チャート	チャート	
32	東道ノ上(3)	424	120－16	○	○		半円状扁平打製石器	凝灰岩	流紋岩	デイサイト	
33	東道ノ上(3)	424	121－20				凹石	凝灰岩	安山岩		
34	東道ノ上(3)	424	122－ 2	○	○		砥石	砂岩	砂岩	長石質ワッケ	ワッケは砂岩の一種。薄片観察で細分可能。
35	東道ノ上(3)	424	122－ 8	○	○		石剣	粘板岩	珪質粘板岩	緑色凝灰岩	
36	東道ノ上(3)	424	122－ 9				石剣	粘板岩	粘板岩		
37	東道ノ上(3)	424	122－12	○	○		有孔石	細粒凝灰岩	細粒凝灰岩	泥岩	
38	東道ノ上(3)	424	181－ 1				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
39	東道ノ上(3)	424	181－ 2				磨製石斧	斑岩	閃緑岩		
40	東道ノ上(3)	424	181－ 3				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
41	東道ノ上(3)	424	181－ 4	○	○	○	磨製石斧	青色片岩	青色片岩	Lws-青色片岩	産地：神居古潭変成帯神居古潭峡谷
42	東道ノ上(3)	424	181－ 7	○	○		半円状扁平打製石器	閃緑岩	閃緑岩	CpxHbl- 石英閃緑斑岩	
43	東道ノ上(3)	424	181－11				磨石	玄武岩	粗粒玄武岩		
44	東道ノ上(3)	424	181－13				敲石	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
45	東道ノ上(3)	424	181－14				敲石	チャート	チャート		
46	東道ノ上(3)	424	181－16				砥石	凝灰質砂岩	凝灰岩		
47	東道ノ上(3)	424	181－21				スレート	粘板岩	粘板岩		
48	東道ノ上(3)	424	181－22				スレート	粘板岩	安山岩		
49	東道ノ上(3)	424	182－ 2				石剣	粘板岩	粘板岩		
50	東道ノ上(3)	424	183－ 8				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
51	東道ノ上(3)	424	183－ 9				磨製石斧	片岩	緑色岩		
52	東道ノ上(3)	424	183－10				磨製石斧	粗粒玄武岩	緑色岩		
53	東道ノ上(3)	424	183－11				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
54	東道ノ上(3)	424	183－12				磨製石斧	片岩	緑色岩		
55	東道ノ上(3)	424	183－13				半円状扁平打製石器	斑岩	粗粒玄武岩		
56	東道ノ上(3)	424	183－15				敲石	凝灰質泥岩	凝灰岩		
57	東道ノ上(3)	424	183－17				石皿	凝灰岩	安山岩		
58	東道ノ上(3)	424	183－18				石棒	閃緑岩	閃緑岩		
59	東道ノ上(3)	424	183－21				スレート	粘板岩	粘板岩		
60	東道ノ上(3)	424	183－22	○	○		スレート	粘板岩	粘板岩	Ms-粘板岩	
61	東道ノ上(3)	424	183－23				有孔石	頁岩	珪質頁岩		
62	東道ノ上(3)	424	183－25				石製品	凝灰質砂岩	凝灰岩		
63	東道ノ上(3)	424	185－ 1	○	○		磨製石斧	ひん岩	斑岩	CpxHbl-石英閃緑斑岩	
64	東道ノ上(3)	424	185－ 2	○	○	○	磨製石斧	泥岩	泥岩	緑色岩	
65	東道ノ上(3)	424	185－ 4	○	○		磨石	デイサイト	デイサイト	Bt-デイサイト	産地：県内
66	東道ノ上(3)	424	185－10				三角柱状磨石	砂岩	凝灰岩		
67	東道ノ上(3)	424	187－12				有孔石	頁岩	緑色岩		
68	東道ノ上(3)	424	188－10				石製品	緑色片岩	緑色岩		
69	東道ノ上(3)	424	191－10				磨製石斧	ひん岩	粗粒玄武岩		
70	東道ノ上(3)	424	191－12				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
71	東道ノ上(3)	424	191－13				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
72	東道ノ上(3)	424	191－14				磨製石斧	頁岩	粘板岩		
73	東道ノ上(3)	424	192－ 2	○	○		半円状扁平打製石器	粗質玄武岩	粗粒玄武岩	CpxOpx-安山岩	産地：県内
74	東道ノ上(3)	424	192－10				三角形磨石	凝灰質泥岩	凝灰岩		
75	東道ノ上(3)	424	194－11				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
76	東道ノ上(3)	424	195－ 1	○	○		磨石	粗質玄武岩	玄武岩	CpxOpxBt-デイサイト	産地：県内
77	東道ノ上(3)	424	195－ 8				石製品	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩		
78	東道ノ上(3)	424	196－17				打ち欠きのある石	チャート	チャート		
1	中野平	134	29－37				磨製石斧	緑色ホルンフェルス	ホルンフェルス		
2	中野平	134	30－60	○	○		擦･敲･凹石類	閃緑岩	閃緑岩(または花崗閃緑岩)	OpxCpx-閃緑岩	
3	中野平	134	37－22	○	○	○	擦･敲･凹石類	輝緑岩	緑色凝灰岩(古期)	玄武岩質緑色岩	産地：北部北上帯
4	中野平	134	49－23				磨製石斧	緑色ホルンフェルス	緑色岩		
5	中野平	134	49－24	○	○	○	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑簾石角閃岩	緑色岩	
6	中野平	134	49－25	○	○	○	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	結晶片岩	緑色岩	
7	中野平	134	57－ 5				不定形石器	緑色ホルンフェルス	ホルンフェルス		
8	中野平	134	115－49				不定形石器	珪質頁岩	珪質頁岩		
9	中野平	134	115－52	○			不定形石器	珪質頁岩	珪質頁岩		
10	中野平	134	117－67	○			不定形石器	玉髄	玉髄		
11	中野平	134	123－124				不定形石器	緑色ホルンフェルス	凝灰岩(緑色岩)		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
12	中野平	134	127－ 1	○	○	○	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑簾石角閃岩	緑色岩	産地：神居古潭変成帯額平川流域
13	中野平	134	127－ 2	○	○	○	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑簾石角閃岩	緑色岩	
14	中野平	134	127－ 3				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
15	中野平	134	127－ 4				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
16	中野平	134	127－ 5				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
17	中野平	134	127－ 6	○	○	○	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩	緑色岩	
18	中野平	134	127－ 7				磨製石斧	緑色凝灰岩	緑色岩		
19	中野平	134	127－ 8				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
20	中野平	134	127－ 9	○	○		磨製石斧	礫岩	火山礫凝灰岩	粗粒玄武岩	
21	中野平	134	128－11				磨製石斧	緑色ホルンフェルス	緑色岩		
22	中野平	134	128－12				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
23	中野平	134	128－13				磨製石斧	ホルンフェルス	ホルンフェルス		
24	中野平	134	128－14				磨製石斧	ホルンフェルス	ホルンフェルス		
25	中野平	134	129－ 5				石錘	安山岩	デイサイト		
26	中野平	134	129－ 7				石錘	凝灰岩	凝灰岩		
27	中野平	134	129－ 9				石錘	頁岩	頁岩		
28	中野平	134	129－18	○	○		石錘	輝緑岩	粗粒玄武岩	CpxHbl-閃緑斑岩	
29	中野平	134	129－21				石錘	礫岩	礫岩		
30	中野平	134	129－26	○	○		石錘	頁岩	泥岩	泥岩	
31	中野平	134	129－28	○	○		石錘	安山岩	デイサイト	デイサイト	
32	中野平	134	130－36	○	○		擦･敲･凹石類	頁岩	頁岩	BtMs-粘板岩	
33	中野平	134	130－43	○	○		擦･敲･凹石類	砂岩	砂岩	長石質アレナイト	アレナイトは砂岩の一種。薄片観察で細分可能。
34	中野平	134	130－44	○	○		擦･敲･凹石類	安山岩	安山岩	OpxCpx-安山岩	
35	中野平	134	132－94	○	○		擦･敲･凹石類	安山岩	安山岩質凝灰岩	CpxBt-デイサイト	
36	中野平	134	132－96				擦･敲･凹石類	凝灰岩	凝灰岩		
37	中野平	134	133－104	○	○		擦･敲･凹石類	流紋岩	流紋岩	流紋岩質凝灰岩	
38	中野平	134	136－162				石鏃	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
39	中野平	134	137－173	○			石鏃	鉄石英	鉄石英		
40	中野平	134	137－182				石鏃	玉髄	玉髄		
41	中野平	134	149－277	○			不定形石器	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
42	中野平	134	157－346				不定形石器	緑色ホルンフェルス	凝灰岩(緑色岩)		
43	中野平	134	158－24				磨製石斧	緑色ホルンフェルス	緑色岩		
44	中野平	134	158－25				磨製石斧	緑色ホルンフェルス	緑色岩		
45	中野平	134	158－26				磨製石斧	粘板岩	緑色岩		
46	中野平	134	158－27				磨製石斧	ホルンフェルス	ホルンフェルス		
47	中野平	134	158－28	○	○		磨製石斧	ホルンフェルス	粘板岩	Ms-粘板岩	
48	中野平	134	158－30	○	○	○	磨製石斧	緑色ホルンフェルス	ホルンフェルス	角閃岩	産地：神居古潭変成帯
49	中野平	134	159－124	○	○		石錘	チャート	チャート	チャート	
50	中野平	134	159－139				石錘	粘板岩	粘板岩		
51	中野平	134	159－142				石錘	粘板岩	粘板岩		
52	中野平	134	160－160	○	○		擦･敲･凹石類	閃緑岩	閃緑岩	CpxOpxHbl-閃緑斑岩	
53	中野平	134	160－161	○	○		擦･敲･凹石類	閃緑岩	花崗閃緑岩	CpxBtHbl-花崗閃緑岩	
54	中野平	134	160－162	○	○		擦･敲･凹石類	花崗岩	花崗岩	CpxHblBt-花崗岩	
55	中野平	134	160－163				擦･敲･凹石類	安山岩	安山岩～デイサイト		
56	中野平	134	161－179	○	○		擦･敲･凹石類	凝灰岩	凝灰岩	流紋岩質凝灰岩	

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
57	中野平	134	161－180	○	○		擦･敲･凹石類	緑色細粒凝灰岩	細粒緑色凝灰岩	BtMs- ホルンフェルス	
58	中野平	134	162－202				擦･敲･凹石類	輝緑岩	花崗閃緑岩		
59	中野平	134	163－208	○	○		擦･敲･凹石類	礫岩	礫岩	OpCpxBt- デイサイト質凝灰岩	
60	中野平	134	167－ 1				不定形石器	ホルンフェルス	ホルンフェルス		
1	笹ノ沢(3)	305	15－ 7				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
2	笹ノ沢(3)	305	15－ 8				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
3	笹ノ沢(3)	305	15－ 9				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
4	笹ノ沢(3)	305	15－10				磨製石斧	輝緑凝灰岩	緑色岩(または礫岩)		
5	笹ノ沢(3)	305	15－11				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
6	笹ノ沢(3)	305	51－ 8				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
7	笹ノ沢(3)	305	57－ 5				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	粘板岩		
8	笹ノ沢(3)	305	62－ 5				石鏃	玉髄	玉髄		
9	笹ノ沢(3)	305	72－ 5	○	○	○	スクレイパー	千枚岩質緑色凝灰岩	千枚岩質緑色凝灰岩	Crd-ホルンフェルス	
10	笹ノ沢(3)	305	112－12	○	○		磨製石斧	閃緑岩	閃緑岩	CpxHbl- 石英閃緑斑岩	
11	笹ノ沢(3)	305	123－ 4	○	○		石鏃	細粒凝灰岩	細粒凝灰岩	HblBt-細粒凝灰岩	
12	笹ノ沢(3)	305	134－ 2	○			石鏃	玉髄	玉髄		
13	笹ノ沢(3)	305	160－ 2	○	○	○	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩	緑色岩	
14	笹ノ沢(3)	305	160－ 3				磨製石斧	輝緑凝灰岩	ひん岩(古期)		
15	笹ノ沢(3)	305	173－15	○	○		スクレイパー	緑色細粒凝灰岩	細粒緑色凝灰岩	泥岩	
16	笹ノ沢(3)	305	180－25				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
17	笹ノ沢(3)	318	38－ 3				石鏃	玉髄	玉髄		
18	笹ノ沢(3)	318	38－ 4				石鏃	玉髄	玉髄		
19	笹ノ沢(3)	318	38－ 8				石鏃	緑色細粒凝灰岩	細粒緑色凝灰岩		
20	笹ノ沢(3)	318	41－49				磨石	流紋岩(古期)	花崗岩		
21	笹ノ沢(3)	372	134－983				磨製石斧	石英ひん岩	ひん岩		
22	笹ノ沢(3)	372	134－989				敲石	玄武岩	粗粒玄武岩(古期)		
23	笹ノ沢(3)	372	151－1172	○	○		半円状扁平打製石器	ひん岩	凝灰岩	CpxHbl-安山岩	
24	笹ノ沢(3)	372	153－1207	○	○		半円状扁平打製石器	粘板岩	粘板岩	BtMs-粘板岩	
25	笹ノ沢(3)	372	170－1395	○	○		紡錘状石製品	珪質砂岩	珪質砂岩(ホルンフェルス化)	珪岩	
26	笹ノ沢(3)	372	195－1709	○	○		半円状扁平打製石器	安山岩質角礫岩	火山礫凝灰岩	火山礫凝灰岩	
27	笹ノ沢(3)	372	197－1736	○	○		磨製石斧	石英斑岩	斑岩	CpxOpxHbl- 石英閃緑斑岩	
28	笹ノ沢(3)	372	197－1747	○	○		磨石	珪岩	珪岩	頁岩	
29	笹ノ沢(3)	372	207－1884	○	○		台石･石皿	石英斑岩	石英斑岩	デイサイト	
30	笹ノ沢(3)	372	229－2142	○			石鏃	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
31	笹ノ沢(3)	372	230－2156				石鏃	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
32	笹ノ沢(3)	372	230－2168				石鏃	凝灰質珪質頁岩	凝灰質珪質頁岩		
33	笹ノ沢(3)	372	236－2356	○	○		楔形石器	玉髄	頁岩	珪質頁岩	
34	笹ノ沢(3)	372	238－2376				スクレイパー	チャート	チャート		
35	笹ノ沢(3)	372	238－2377	○			スクレイパー	チャート	チャート		
36	笹ノ沢(3)	372	238－2383				スクレイパー	頁岩	頁岩		
37	笹ノ沢(3)	372	238－2384				スクレイパー	頁岩	頁岩		
38	笹ノ沢(3)	372	238－2390	○			RF	凝灰質珪質頁岩	凝灰質珪質頁岩		
39	笹ノ沢(3)	372	239－2394				UF	珪質頁岩	珪質頁岩		
40	笹ノ沢(3)	372	239－2395	○			UF	珪質頁岩	珪質頁岩		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
41	笹ノ沢(3)	372	240－2409				磨製石斧	凝灰岩	凝灰岩		
42	笹ノ沢(3)	372	240－2410				磨製石斧	凝灰岩	凝灰岩		
43	笹ノ沢(3)	372	241－2419				半円状扁平打製石器	片麻岩	ひん岩(古期)		
44	笹ノ沢(3)	372	241－2421	○	○		半円状扁平打製石器	片麻岩	花崗岩(黒雲母含む)	CpxBtHbl-石英モンゾニ岩	石英モンゾニ岩は花崗岩の一種。薄片観察で同定可能。
45	笹ノ沢(3)	372	241－2423	○	○		半円状扁平打製石器	斑岩	斑岩(古期)	Cpx-安山岩	
46	笹ノ沢(3)	372	242－2426				半円状扁平打製石器	安山岩	粗粒玄武岩(古期)		
47	笹ノ沢(3)	372	242－2427	○	○		半円状扁平打製石器	安山岩	安山岩	OpxCpx-安山岩	
48	笹ノ沢(3)	372	242－2428	○	○		半円状扁平打製石器	輝緑岩	粗粒玄武岩(古期)	EpAm-変はんれい岩	
49	笹ノ沢(3)	372	242－2430	○	○		半円状扁平打製石器	ひん岩	ひん岩(古期)	OpxCpxHbl-斑岩	
50	笹ノ沢(3)	372	242－2431	○	○		半円状扁平打製石器	砂岩	砂岩	砂質ホルンフェルス	
51	笹ノ沢(3)	372	242－2432				半円状扁平打製石器	斑岩	安山岩		
52	笹ノ沢(3)	372	242－2433	○	○		半円状扁平打製石器	流紋岩	安山岩～デイサイト	CpxOlOpx-玄武岩	
53	笹ノ沢(3)	372	242－2434				半円状扁平打製石器	流紋岩	デイサイト		
54	笹ノ沢(3)	372	242－2435				半円状扁平打製石器	泥岩	凝灰岩(古期)		
55	笹ノ沢(3)	372	243－2440				半円状扁平打製石器	輝緑岩	安山岩(古期)		
56	笹ノ沢(3)	372	243－2445	○	○	○	半円状扁平打製石器	ホルンフェルス	ホルンフェルス	CrdAdl-ホルンフェルス（=紅柱石ホルンフェルス)	産地：南部北上帯。薄片観察で同定可能。
57	笹ノ沢(3)	372	244－2447	○	○		半円状扁平打製石器	凝灰岩	凝灰岩(古期)	HblCpx-玄武岩	
58	笹ノ沢(3)	372	243－2448				半円状扁平打製石器	凝灰質砂岩	ひん岩(古期)		
59	笹ノ沢(3)	372	245－2460				半円状扁平打製石器	砂岩	粗粒玄武岩(古期)		
60	笹ノ沢(3)	372	245－2462				半円状扁平打製石器	凝灰質砂岩	凝灰岩		
61	笹ノ沢(3)	372	246－2468				半円状扁平打製石器	輝緑凝灰岩	粗粒玄武岩(古期)		
62	笹ノ沢(3)	372	246－2469				半円状扁平打製石器	凝灰岩	安山岩(古期)		
63	笹ノ沢(3)	372	246－2470	○	○		半円状扁平打製石器	花崗砂岩	花崗砂岩	砂質ホルンフェルス	
64	笹ノ沢(3)	372	247－2475				半円状扁平打製石器	流紋岩	流紋岩		
65	笹ノ沢(3)	372	247－2479				半円状扁平打製石器	ホルンフェルス	安山岩(古期)		
66	笹ノ沢(3)	372	247－2482				半円状扁平打製石器	石英はん岩	デイサイト		
67	笹ノ沢(3)	372	248－2484	○	○		半円状扁平打製石器	流紋岩質凝灰岩	流紋岩質凝灰岩(デイサイト質凝灰岩)	OpxCpx-粗粒玄武岩	
68	笹ノ沢(3)	372	248－2485				半円状扁平打製石器	チャート	チャート		
69	笹ノ沢(3)	372	248－2486	○	○		半円状扁平打製石器	流紋岩	流紋岩	OlOpxCpx-安山岩	
70	笹ノ沢(3)	372	248－2487	○	○		半円状扁平打製石器	安山岩(古期)	安山岩(古期)	デイサイト	
71	笹ノ沢(3)	372	248－2488	○	○		半円状扁平打製石器	花崗岩	花崗岩	CpxHblBt-花崗閃緑岩	
72	笹ノ沢(3)	372	248－2493	○	○		半円状扁平打製石器	火山礫凝灰岩	火山礫凝灰岩(古期)	火山礫凝灰岩	
73	笹ノ沢(3)	372	249－2495				半円状扁平打製石器	凝灰質砂岩	安山岩(古期)		
74	笹ノ沢(3)	372	249－2497	○	○		半円状扁平打製石器	花崗砂岩	石英砂岩	砂質ホルンフェルス	
75	笹ノ沢(3)	372	249－2502				半円状扁平打製石器	流紋岩質凝灰岩	デイサイト		
76	笹ノ沢(3)	372	250－2508				磨石	安山岩質凝灰岩	デイサイト		
77	笹ノ沢(3)	372	251－2513				磨石	流紋岩	デイサイト		
78	笹ノ沢(3)	372	251－2521	○	○		磨石	ひん岩	ひん岩	デイサイト	
79	笹ノ沢(3)	372	252－2524				磨石	凝灰岩	凝灰岩		
80	笹ノ沢(3)	372	252－2526	○	○		敲石	石英安山岩	デイサイト	OpxCpxHbl-安山岩	
81	笹ノ沢(3)	372	253－2542				磨石	石英安山岩	デイサイト		
82	笹ノ沢(3)	372	254－2544				磨石	流紋岩	流紋岩		
83	笹ノ沢(3)	372	254－2548	○	○		打ち欠きのある石	砂岩	粗粒玄武岩～玄武岩	OlCpx-玄武岩	
84	笹ノ沢(3)	372	254－2549				台石・石皿	硬質粗粒砂岩	ひん岩		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
85	笹ノ沢(3)	372	254−2550				石棒	安山岩	安山岩		
1	西張平	436	1−10				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
2	西張平	436	3− 6				敲磨器類	細粒玄武岩	粗粒玄武岩		
3	西張平	436	22−15				石鏃	玉髄質頁岩	玉髄質頁岩		
4	西張平	436	22−27	○			石鏃	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
5	西張平	436	25− 5	○	○	○	磨製石斧	はんれい岩	塩基性凝灰岩	LwsCpx-青色片岩	産地：神居古潭変成帯神居古潭峡谷
6	西張平	436	25− 9	○	○		敲磨器類	チャート	チャート	チャート	
7	西張平	436	25−10				敲磨器類	チャート	チャート		
8	西張平	436	36−11				敲磨器類	砂岩	凝灰質砂岩		
9	西張平	436	37− 4	○	○		敲磨器類	凝灰質砂岩	凝灰質砂岩	石質ワッケ	ワッケは砂岩の一種。薄片観察で細分可能。
10	西張平	436	49−15				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
11	西張平	436	49−16	○			敲磨器類	石英	石英(チャート)		
12	西張平	436	49−17	○	○	○	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	角閃岩	角閃岩	産地：神居古潭変成帯
13	西張平	436	49−20				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色岩		
14	西張平	436	49−23				敲磨器類	凝灰岩	デイサイト		
15	西張平	436	72− 3				石匙	珪質頁岩	珪質頁岩		
16	西張平	436	73− 3				敲磨器類	凝灰岩	デイサイト		
17	西張平	436	83− 4				敲磨器類	凝灰岩	安山岩		
18	西張平	436	92− 2				敲磨器類	凝灰岩	粗粒玄武岩		
19	西張平	436	94− 5				不定形石器	凝灰岩	安山岩		
20	西張平	436	103− 7				敲磨器類	緑色凝灰岩	緑色岩		
21	西張平	436	114− 2				磨製石斧	緑色凝灰岩	緑色岩		
22	西張平	436	114− 3				磨製石斧	緑色凝灰岩	緑色岩		
23	西張平	436	114− 5				磨製石斧	緑色凝灰岩	緑色岩		
24	西張平	436	118− 9				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	ひん岩		
25	西張平	436	119−13				敲磨器類	粗粒砂岩	粗粒砂岩		
26	西張平	436	123− 8				磨製石斧	ホルンフェルス	緑色岩		
27	西張平	436	127− 9				敲磨器類	流紋岩	流紋岩		
28	西張平	436	130− 3				敲磨器類	凝灰岩	粗粒玄武岩(古期)		
29	西張平	436	140− 9	○	○	○	磨製石斧	緑色凝灰岩	緑色岩	緑色岩	
30	西張平	436	142− 6				敲磨器類	珪質頁岩	珪質頁岩		
31	西張平	436	146−11	○	○		敲磨器類	閃緑岩	花崗閃緑岩	Hbl-閃緑斑岩	
32	西張平	436	146−13				敲磨器類	凝灰岩	デイサイト		
33	西張平	436	146−15	○	○		敲磨器類	閃緑岩	閃緑岩	HblOpx-石英閃緑斑岩	
34	西張平	436	178−17				不定形石器	頁岩	珪質頁岩		
35	西張平	436	179− 4				砥石	凝灰岩	デイサイト		
36	西張平	436	179− 6	○	○		敲磨器類	流紋岩	流紋岩	安山岩	
37	西張平	436	179− 7	○	○		敲磨器類	粗粒砂岩	粗粒砂岩	砂質ホルンフェルス	産地：北部北上帯
38	西張平	436	180− 1	○	○		敲磨器類	砂岩	砂岩	緑色凝灰岩	
39	西張平	436	180− 2	○	○		敲磨器類	粗粒玄武岩	粗粒玄武岩	OpxOlCpx-玄武岩	
40	西張平	436	180− 4				敲磨器類	デイサイト	デイサイト		
41	西張平	436	180− 7	○	○		敲磨器類	頁岩	粘板岩	EpAmMs-ホルンフェルス	
42	西張平	436	189− 3	○			石鏃	珪質頁岩	珪質頁岩		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
43	西張平	436	189－10				石錐	珪質頁岩	珪質頁岩		
44	西張平	436	189－13				敲磨器類	安山岩	安山岩		
45	西張平	436	189－15	○	○		敲磨器類	粗粒玄武岩	粗粒玄武岩(古期)	緑色凝灰岩	
46	西張平	436	189－16				敲磨器類	凝灰岩	粗粒玄武岩		
47	西張平	436	201－ 2				敲磨器類	石英安山岩	デイサイト		
48	西張平	436	201－ 3	○	○		敲磨器類	石英安山岩	デイサイト	OpxCpx-安山岩	
49	西張平	436	201－ 4	○	○		敲磨器類	安山岩	安山岩	CpxOpx-安山岩	
50	西張平	436	201－ 5				敲磨器類	泥岩	デイサイト		
51	西張平	436	201－ 6	○	○		敲磨器類	ひん岩	ひん岩	玄武岩	
52	西張平	436	206－11	○	○		石製品	アルコーズ砂岩	アルコーズ砂岩	砂質ホルンフェルス	
53	西張平	436	212－ 3				凝灰岩質石製品	凝灰岩	珪藻土?		
54	西張平	436	212－ 4				凝灰岩質石製品	凝灰岩	珪藻土		
55	西張平	436	212－ 7				凝灰岩質石製品	凝灰岩	珪藻土		
56	西張平	436	212－ 8				凝灰岩質石製品	凝灰岩	珪藻土		
57	西張平	436	212－10				凝灰岩質石製品	泥岩	細粒凝灰岩		
58	西張平	436	213－ 2				凝灰岩質石製品	凝灰岩	珪藻土		
59	西張平	436	213－ 5				凝灰岩質石製品	凝灰岩	珪藻土		
60	西張平	436	213－ 6				凝灰岩質石製品	凝灰岩	珪藻土		
61	西張平	436	213－ 7				凝灰岩質石製品	凝灰岩	珪藻土?		
62	西張平	436	213－ 8	○	○		凝灰岩質石製品	凝灰岩	凝灰岩	砂質凝灰岩	
63	西張平	436	213－10				凝灰岩質石製品	泥岩	細粒凝灰岩		
64	西張平	436	213－12	○	○		凝灰岩質石製品	安山岩	珪藻土	流紋岩質凝灰岩	
65	西張平	436	213－13				凝灰岩質石製品	泥岩	珪藻土		
66	西張平	436	213－15				凝灰岩質石製品	泥岩	珪藻土?		
67	西張平	436	213－16				凝灰岩質石製品	泥岩	珪藻土		
68	西張平	436	213－17	○	○		凝灰岩質石製品	細粒砂岩	細粒凝灰岩	砂質凝灰岩	
1	野場(5)	150	31－53	○			その他の石製品	砂質凝灰岩	砂質凝灰岩		
2	野場(5)	150	64－10	○	○	○	磨製石斧	緑色凝灰岩(古期)	角閃岩	玄武岩質緑色岩	産地：北海道の可能性あり
3	野場(5)	150	72－ 6				石棒	緑色片岩	はんれい岩(マイロナイト化)		
4	野場(5)	150	134－31	○	○		磨製石斧	粘板岩	粘板岩	Ms-粘板岩	
5	野場(5)	150	135－34				その他の石製品	粘板岩	粘板岩		
6	野場(5)	150	155－44				不定形石器	玉髄	玉髄		
7	野場(5)	150	156－59	○			不定形石器	玉髄	玉髄		
8	野場(5)	150	156－61				敲磨器類	流紋岩	流紋岩		
9	野場(5)	150	163－41	○	○	○	石皿・台石類	片岩	片岩	EpAm-緑色片岩	産地：島守層及び北部北上帯
10	野場(5)	150	215－ 1				敲磨器類	礫岩	礫岩		
11	野場(5)	150	281－48	○	○		不定形石器	緑色細粒凝灰岩	細粒緑色凝灰岩	頁岩	産地：県内
12	野場(5)	150	283－62				不定形石器	鉄石英	鉄石英		
13	野場(5)	150	283－66				不定形石器	珪質頁岩	珪質頁岩		
14	野場(5)	150	284－73	○	○		不定形石器	流紋岩	緑色岩	流紋岩	
15	野場(5)	150	285－79	○	○		不定形石器	鉄石英	鉄石英	チャート	産地：県内
16	野場(5)	150	285－81				不定形石器	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
17	野場(5)	150	286－87	○	○		不定形石器	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	
18	野場(5)	150	286－91	○			不定形石器	玉髄質珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩		
19	野場(5)	150	289－109				不定形石器	チャート	珪質頁岩		

	遺跡名	集	図版番号	調査	薄片	EPMA	器種	報告書石質	肉眼鑑定	薄片鑑定	備考
20	野場(5)	150	289－116				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	安山岩		
21	野場(5)	150	289－117				磨製石斧	安山岩	安山岩		
22	野場(5)	150	290－122				磨製石斧	緑色ホルンフェルス	緑色ホルンフェルス		
23	野場(5)	150	290－125				磨製石斧	ホルンフェルス	緑色岩		
24	野場(5)	150	290－127				磨製石斧	ホルンフェルス	緑色岩		
25	野場(5)	150	290－129				磨製石斧	ホルンフェルス	緑色岩		
26	野場(5)	150	291－130				磨製石斧	輝緑岩	粗粒玄武岩(古期)		
27	野場(5)	150	291－132				磨製石斧	閃緑岩	緑色岩		
28	野場(5)	150	291－138				磨製石斧	閃緑岩	花崗岩		
29	野場(5)	150	291－139	○	○	○	磨製石斧	緑色ホルンフェルス	緑色ホルンフェルス	EpAm-緑色片岩	産地：島守層及び北部北上帯
30	野場(5)	150	292－142				磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	緑色ホルンフェルス		
31	野場(5)	150	292－147				敲磨器類	凝灰岩	凝灰岩		
32	野場(5)	150	293－149	○	○		敲磨器類	粗粒玄武岩	粗粒玄武岩(古期)	砂質ホルンフェルス	
33	野場(5)	150	293－151	○	○		敲磨器類	花崗斑岩	花崗閃緑岩	Hbl-斑岩	
34	野場(5)	150	294－152				敲磨器類	閃緑岩	花崗閃緑岩		
35	野場(5)	150	294－153				敲磨器類	安山岩	安山岩		
36	野場(5)	150	294－154	○	○		敲磨器類	砂岩	砂岩	砂質ホルンフェルス	
37	野場(5)	150	295－158				敲磨器類	砂岩	砂岩		
38	野場(5)	150	295－159				敲磨器類	チャート	チャート		
39	野場(5)	150	296－160				敲磨器類	閃緑岩	花崗岩		
40	野場(5)	150	296－161	○	○		敲磨器類	閃緑岩	花崗閃緑岩	CpxHblBt-花崗閃緑岩	
41	野場(5)	150	296－162				敲磨器類	閃緑岩	花崗岩		
42	野場(5)	150	297－163	○	○		敲磨器類	チャート	チャート	チャート	
43	野場(5)	150	297－167	○	○		敲磨器類	流紋岩	流紋岩	デイサイト	
44	野場(5)	150	298－168	○	○		敲磨器類	安山岩	安山岩	安山岩	産地：県内
45	野場(5)	150	298－170	○	○		敲磨器類	閃緑岩	花崗岩	BtHbl-花崗閃緑岩	
46	野場(5)	150	298－171	○	○		敲磨器類	凝灰岩	凝灰岩	HblBt-閃緑斑岩	
47	野場(5)	150	299－175	○	○		敲磨器類	結晶片岩	結晶片岩	砂質ホルンフェルス	
48	野場(5)	150	301－186	○	○	○	敲磨器類	ホルンフェルス	閃緑岩(マイロナイト)	ChlMs-片岩	
49	野場(5)	150	304－198	○	○		敲磨器類	礫岩	礫岩	デイサイト質凝灰岩	
50	野場(5)	150	306－226				石皿・台石類	はんれい岩	はんれい岩		
51	野場(5)	150	306－227	○	○		石皿・台石類	はんれい岩	はんれい岩	OpxCpxHbl-石英閃緑斑岩	

凡例

鉱物記号	名称	鉱物記号	名称	鉱物記号	名称
Cpx	単斜輝石	Ep	緑簾石	Crd	菫青石（きんせいせき）
Opx	斜方輝石	Am	角閃石	Ol	カンラン石
Hbl	ホルンブレンド	A-am	アルカリ角閃石	Arg	霰石（あられいし）
Bt	黒雲母	A-px	アルカリ輝石	Pl	斜長石
Ms	白雲母	Lws	ローソン石	OxHbl	酸化ホルンブレンド
Cal	方解石	Jd	ヒスイ輝石		
Chl	緑泥石	Adl	紅柱石（こうちゅうせき）		

薄片鑑定による岩石名は岩石学的調査結果をそのまま掲載し、一部「鉱物記号－岩石」で表記している。報告書に掲載する際には「岩石名」を基本としている。ただし鉱物名を付けることで産地を特定される場合は除く。
例）笹ノ沢(３)遺跡 図243－2445 「紅柱石ホルンフェルス」

表４　石材分類表

大区分	小区分	岩石名	備考１	備考２	標本
火成岩	火山岩半深成岩	流紋岩			○
		デイサイト ［旧名＝石英安山岩］		H17年名称変更	○
		安山岩			○
		安山岩(古期)	■八戸付近の中生代以前の地層を産地とするものに限定		
		玄武岩			○
		黒曜石			
		軽石			
	半深成岩	斑岩			○
		斑岩(古期)	■八戸付近の中生代以前の地層を産地とするものに限定	H22年追加	
		ひん岩			
		ひん岩(古期)	■八戸付近の中生代以前の地層を産地とするものに限定	H22年追加	
		閃緑ひん岩		H22年追加	
		粗粒玄武岩［旧名＝輝緑岩］		H17年名称変更	○
		粗粒玄武岩(古期) ［旧名＝輝緑岩(古期)］	■八戸付近の中生代以前の地層を産地とするものに限定	H17年名称変更	
	深成岩	花崗岩			○
		花崗閃緑岩			○
		閃緑岩	■県内産地：階上岳､下北の海岸段丘に多い		○
		輝岩		H25年追加	
		はんれい岩			
		蛇紋岩	■産地県外		
堆積岩	砕屑岩	泥岩			○
		頁岩	硬質頁岩、黒色頁岩の使用は可		○
		粘板岩			○
		シルト岩			
		砂岩	粗粒・細粒等の砂粒子を表す述語、原岩を表す名称（凝灰質砂岩、花崗砂岩、硬砂岩等）は適時使用		○
		礫岩			
	火砕性堆積岩	凝灰岩	粗粒・細粒等の火山灰粒子を表す述語、凝灰岩の組成を表す述語（流紋岩質凝灰岩、デイサイト質凝灰岩等）は適時使用		○
		凝灰岩(古期)	■八戸付近の中生代以前の地層を産地とするものに限定	H22年追加	
		緑色凝灰岩 （＝グリーンタフ）	細粒緑色凝灰岩を含む。■県内産地：日本海沿岸		○
		緑色凝灰岩(古期) ［旧名＝輝緑凝灰岩］	■県内産地:新井田川・種差海岸。八戸付近の中生代以前の地層を産地とするものに限定	H17年名称変更	
		軽石凝灰岩	＝従来の軽石質凝灰岩	H17年名称統一	
		溶結凝灰岩			
		火山礫凝灰岩		H22年追加	○
	珪質堆積岩	チャート			○
		珪質頁岩	珪質頁岩の組成を表す述語（玉髄質珪質頁岩、凝灰岩質珪質頁岩）は適時使用		○
		珪質泥岩		H24年追加	
		珪藻土	■県内産地：十三湖今泉地区	H22年追加	
	炭酸塩岩	石灰岩			
	有機質堆積岩	石炭			
		アスファルト			

変成岩	広域変成岩	千枚岩			
		片岩			○
		青色片岩	■産地県外：北海道 神居古潭変成帯神居古潭峡谷		○
		緑色片岩	■産地：島守層及び北部北上帯		○
		黒色片岩	■産地県外：北海道 神居古潭変成帯		
		角閃岩	■産地県外：北海道 神居古潭変成帯		○
		緑簾石角閃岩	■産地県外：北海道 神居古潭変成帯	H22年追加	
	接触変成岩	片麻岩			
		ホルンフェルス			○
		（紅柱石ホルンフェルス）	■産地県外：岩手 南部北上帯。産地同定は薄片観察による。		○
		（砂質ホルンフェルス）	■産地：北部北上帯。産地同定は薄片観察による。		○
		大理石			
		珪岩			○
		緑色岩	■産地県外：北海道 神居古潭変成帯額平川流域	H19年追加	○
		（玄武岩質緑色岩）	■産地県外または県内：北海道、北部北上帯。産地同定は薄片観察による。		○
鉱物・その他		石英			
		水晶	■県内産地：階上町		
		カルセドニー			
		玉髄（＝灰色カルセドニー）			
		瑪瑙（＝赤色カルセドニー）			
		碧玉（＝緑色カルセドニー）			
		ヒスイ（＝硬玉）	■産地県外：新潟県糸魚川		
		ネフライト（＝軟玉）			○
		蛍石			
		琥珀	■産地県外：岩手県久慈		
		輝石			
		赤鉄鉱	■県内産地：今別町赤根沢		
		滑石			
		鉄石英			
		珪化木			

石器の変化から見た縄文時代中期末の北東北・北海道について

齋　藤　　岳（青森県埋蔵文化財調査センター）

1　はじめに

これまで、縄文時代中期末（以降、縄文時代を省略する）は大集落が途絶えるなど、変革期であると指摘されてきた（関東・中部地方では山本暉久2013等。滋賀県では小島孝修1999等）。近畿地方でも中期末に変革期を迎えるが、①土器の様相から、変化は岐阜県西部から滋賀県を経由して近畿地方各地に広がった②土器の在地化の様相から湖北地方まで人の移住があり、その影響で琵琶湖湖岸部と比叡山北部の集団がいち早くこの文化を取り入れたとする研究がある（泉・丸山1992）。人の移住とその範囲を推定した重要な研究である。北東北では土器や石器、集落構造、炉の変化（北の縄文研究会2013）、トチ利用の状況変化と顕在化（国木田2012）など、さまざま変化が指摘されてきた。岩手県南部の大木９～10式の下舘銅屋遺跡の報告者である松本建速は、三内丸山遺跡出土の土器胎土の成分分析を行った。その結果大木10式併行期の土器と円筒土器の胎土成分が同じであり、土器の「形態や製作技法が東北中南部のものに類似するので、その製作者が移住してきたと推定できる」（松本2004）と結論した。岡村道雄は中期後半から後期前葉における複式炉、斧形土製品、狩猟文土器、キノコ形土製品などの状況から南東北から北東北への人の移住を考えた（岡村2009）。

筆者は、大木10式併行期に青森県内の石器が形・大きさ・石材・加工方法など大きく変化するのはなぜかという問に対する答として、東北南部からの人の移住によるものと考えた（北の縄文研究会2013）。石器製作や住居作りが男性の作業とすれば、男性を含めた人の移動を考えないと説明できないと考えたためである。本稿では、さらにその根拠を具体的に明示し、詳細について述べていきたい。

2　調査方法

北海道中央部から福島県までの大木９・10式期及びほぼ同じ時期の遺跡（１図）の住居跡出土遺物等から、２図～８図の図版を作成し、出土品を検討する。地域間の土器型式の対照は１表によった。円筒土器と大木式を対比した年表（岩手県立博物館2005）で示されたように隣接地域の型式間には時間差があると考えられるが、この時期については明確化されたものがないので各型式を並列させた。

対象範囲が広域で、関係資料が膨大であることから、資料は筆者が選び取った限られたものになる。図版作成時点で筆者の解釈がはいるという方法的な弱さがあることを踏まえ、①各道県の中期末前後の発掘調査報告書を概観し、予察する。②地域の代表的な遺跡を選ぶ②筆者が資料を実見した遺跡（三内丸山遺跡・七飯本町１遺跡、田中遺跡、御所野遺跡、宮畑遺跡、愛宕原遺跡）などから複数遺跡を選ぶ③図版を作成しながら予察結果を修正する④抽出資料に恣意性を感じさせないものにすることに留意した。資料を抽出した住居跡については、他の時期の遺物の掲載（記載）のない住居跡や、混入があっても石器の帰属が確実なもの、検討内容に支障が無いものを選定した。図版では、土器は代表的なものを掲載し、石器等も石鏃・石錐・石篦・磨石・石皿など変化の現れるものを中心に掲載した。そして、全体として大木10式の石器等の内容と地域性が説明できるものを選んだ。必要な関連図表は他の時期であっても参考資料として図の下部に置いた。本稿は、図版の集成から特徴を抽出するとい

１図　対象遺跡

	南東北	青森	道南	道央
中期後葉	大木８b	榎林		
中期後葉	大木９	最花	大安在B	
			ノダップⅡ	
中期末	大木10	大木10併行	煉瓦台	北筒式(トコロ６類)
後期初頭			天祐寺	

１表　中期末前後の本稿でふれる土器型式の対応関係

青森県と南東北は、青森県埋蔵文化財調査センター1992の年表から、北海道とは(公財)北海道埋蔵文化財センター『北斗市館野６遺跡(1)』（2013）のⅢ群b類の順序と大船遺跡調査の所見に従って対比

う構成になっていないため、図の構成意図と筆者の資料理解を次項以降、図と対照しながら書いていく。最後に、表形式で特徴を整理し、まとめを行うこととしたい。補うべき点は機会をみて、今後、記述していくこととしたい。なお、図版は報告書のコピーから作成したため、剥片石器においても原図縮尺は３分の２のものと２分の１のものがある。そのため縮尺率は同一報告書では統一されているものの全体としては不統一である。引用した図の出典は８図下に置いた。その他の発掘調査報告書については、引用・参考文献で略したので奈良文化財研究所のデータベース等を参照されたい。

３　抽出遺跡と出土品について

（１）三内丸山遺跡と出土品

三内丸山遺跡は、筆者が計14年間仕事をし、うち11年間は石器整理の主担者であった。その間に、中期末の大木10式併行期に石器が大きく変化することを感じた。そのため三内丸山遺跡を出発点として記述する。石器を記述する前に、他の要素を説明する。三内丸山遺跡では中期末になってから集落が北西に偏ることは指摘されてきた（岡田2002ほか）。この時期には遺跡北側斜面の第６鉄塔地区や斜面中段に形成された平坦部にも住居が形成される（第683号住居跡）など、これまでと異なる場所にも住居が構築される。三内丸山遺跡は長大な墓域と道路、掘立柱建物跡群や大型住居など大きな施設（社会資本）が中期後葉まで蓄積・維持されてきた。居住域の変化は、これまで維持されてきた施設と位置的にも距離をおく。六ヶ所村富ノ沢（２）遺跡でも中期末には、それまでの中心地区であったＡ地区に住居跡は見られなくなり、約100m北側のC地区に15棟以上、約100m東側のＢ地区に９棟の竪穴住居跡が発掘されている（六ヶ所村史編纂委員会1997）。また、六ヶ所村弥栄平（１）遺跡のように、大木10式併行期から集落がはじまる例がある。

竪穴住居跡の掘り込みも浅く、筆者が調査した三内丸山遺跡第１次調査の第572号住居跡や第５次調査の第599号住居跡は炉と床面を検出して住居跡を確認することとなった。遺跡にもよると思われるが､傾向として青森県域の中期末には竪穴住居跡の掘り込みが浅いものが増えてくると感じている。これは東日本全体の現象のようで、北海道中央部でも「縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡は、今までの調査例をみると掘方が浅い傾向がある」（森1988）とされ、東京都調布市でも「中期末になると住居の検出レベルが相対的に高くなる傾向は、意識した報告がされているかは別として、調査者の間で意外と知られている現象である」（黒尾1993）と記述されている。

また、中期末には青森県内の炉の形が変化し、東北南部の複式炉の系譜をひく石囲炉が出現する。以上から、竪穴住居の構築や建物・集落の維持管理など男性がかかわる領域で大きな変化が起こっているといえる。

もう一つの男性の関わる領域として、石器の製作と維持管理がある（切削用の石器や磨石・石皿には女性も関係するが、先に述べたように女性がかかわる土器製作の特徴を分析した松本建速により女性の移住は指摘されている）。

石鏃の形態は土器文化圏と密接に関連する（工藤1977）とされており、筆者は三内丸山遺跡の石鏃形態の変遷を追った事がある（齋藤2007）。前期中葉では二等辺三角形の無茎鏃が主体で、前期末に柳葉形のものが多い（前期末に柳葉形の石鏃が多い事は十和田市明戸遺跡でも確認されている（岩田2010）が、前期中葉の無茎鏃が細長い点が異なる。）。中期前葉以降は有茎Ｙ基鏃が多くなり断面形の

厚みが増す。中期中葉には加工の粗さが目立つようになる。中期後葉は前後の時期と混じる資料が多く不明な点があるが、基本的には中期中葉の系統を引く。中期末の大木10式併行期になると、２図左上の第683号住居跡出土品のように伝統的な形である有茎石鏃を含め、小形の石器が目につくようになる。同住居跡下段の従来どおりの大きさの石鏃は茎の有無を問わず厚みがあるが、小形の石鏃は断面も薄く、押圧剥離の丁寧な加工がなされる（注１）。

石錐は第４号住居跡出土品のように、つまみのついた棒状のものが中心となる。石篦は第11号住居跡のように撥形のものが目立つ。石材は第11・683号住居跡のもののように玉髄質珪質頁岩の石鏃等が一定数出土するようになる。玉髄質珪質頁岩は小形の礫から両極打法で剥片を生産したものが多く、剥片生産技法における変化も伴う。特筆すべき出土例として、小三内地区の第８号住居跡の出土品がある。住居跡の炉は壁際に近い石囲炉で、前庭部をもち、南東北に由来する複式炉の系譜をひく。青森県内の大木10式併行期に多い形である。出土土器は大木10式併行期と最花式土器、そして北海道系の煉瓦台式土器である。出土石器のうち、茎が長く左右非対称な石槍は北海道によくみられる形であり、青竜刀形石器は函館市戸井・南茅部地区が製作地であることから北海道系の石器も含む。図の下部に参考として遺跡南部の第５・10・11次調査区の中期中葉（円筒上層ｅ式）第637号住居跡等の住居跡出土の石鏃・石錐・北海道式石冠を置く。石鏃は中期末のものに比べて明らかに大きい。石錐は錐先部分のみ作り出したもので定形化していない。北海道式石冠は一部搬入品と考えられる資料を除くと青森県域では中期中葉に突然、出現する。楕円礫の側面を機能面とするものが多く、楕円礫の半割面を機能面とする前期以来の典型例とは異なる。しかし森町石倉１遺跡（第８図）や木古内町札苅６遺跡、奥尻島の砥石遺跡など北海道南部にも分布することから北海道式石冠の中で捉えたい(注２)。また、中期後葉段階で消滅するとみられ、定着しないことからも起源は青森県域外と考えられる。そして第５・10・11次調査区からは円筒土器文化に特有とされる半円状扁平打製石器が出土していない。三内丸山遺跡の他の住居跡でも中期中葉では半円状扁平打製石器の確実な共伴例はない（注３)。そのため、青森県域では大木10式併行期には、半円状扁平打製石器と北海道式石冠は出土例がない。

２図下には前期中葉の第６鉄塔調査区の第Ⅴａ層と中期の第Ⅲ層の石錐をあわせて置く。第Ⅴａ層の石錐は、素材の形に近い。第Ⅲ層の石錐には、中期末のものが混じる可能性があるが、１図左下の例においても中央部に膨らみを持ち、第４号住居跡出土品のように錐先が棒状で細長いものとは異なっている。

（２）青森県内遺跡出土例

２図右上の六ヶ所村富ノ沢（１）遺跡は最花式期のものであるが、青竜刀形石器を模したような石器が出土している。玉髄質珪質頁岩は六ヶ所村の在地石材でもあり石鏃に使用されている。富ノ沢（２）遺跡では第88－４号住居跡の磨石は楕円礫の片面・もしくは両面を磨面としている。また、粘板岩製の磨製石斧が出土している。詳細は別稿で述べるが、青森県域では、この時期には「粘板岩」と記載される磨製石斧が多い。しかし、粘板岩には磨製石斧に求められる硬さや耐久性が不足しており、北海道旭川・深川市の神居古潭峡谷付近の青色片岩の可能性が高い。剥離部分の一部が磨ききれずに残る点は８図上の深川市音江２遺跡の（青色）片岩製磨製石斧に類似する。第58号遺構のように小形無茎凹基鏃も出土するが、錐先部分のみ加工した石錐や有茎石鏃も混じる。石篦は三内丸山遺跡と同様に撥形のものが多い（第110号遺構)。右下の第５号遺構では脚付きの石皿が出土しているが、

八戸市田代遺跡等、中期末には青森県内各地で出土する。

３図左は八戸市松ヶ崎遺跡（統合前の西長根遺跡分を含む）の出土品である。第11号住居跡や西長根遺跡第10号住居跡では榎林式や大木８ｂ式が出土しているが、石鏃は三内丸山遺跡の円筒上層e式期のものと類似している。石錐への転用例が見られるのは、石鏃の断面形の厚みがあるためであり、三内丸山遺跡でも散見される。一方、榎林式から最花式にかけての第34号住居跡では石鏃・石錐に三内丸山遺跡の大木10式併行期のものに類似する形態のものも含まれる。第11号住居跡で東北南部に分布する斧状土製品が出土しているうえに大木８ｂ式そのものがこの遺跡からは出土している。太平洋岸で大木式の分布域に近い本遺跡では、三内丸山遺跡に比べて次段階の石器群への移行が早いように思われる。そして、秋田県の産出地から遠いにもかかわらずアスファルトの付着例が多い。この時期の他の太平洋岸の遺跡でも同様の傾向にある。また、三日月形に近い削器（異形石器）が出土している。

３図右上は、八戸市南部の田代遺跡の出土品である。青森県教育委員会調査の第26号住居跡では、小型凹基の石鏃、棒状の錐につまみのついた石錐、撥形の石篦、両極剥片やピエス・エスキーユ、小型土器など、この時期のあり方を示している。八戸市教育委員会調査のSI11ではキノコ形土製品や３脚付き石皿が出土した。石匙も出土しているが、早期末から前期初頭にみられる松原型石匙に類似している。また、石器・剥片集中ピットが住居跡内にあり珪岩や玉髄質珪質頁岩の両極剥片等が出土している。チャート（珪岩）は在地の石材であるが、玉髄質珪質頁岩は搬入品の可能性がある。これに玉髄や珪質頁岩が加わり、両極打法によって小形の原石からの剥片剥離・二次加工が行われ、石鏃など小型石器の素材となる。これらについては階上町道仏鹿糠遺跡など八戸市周辺では在地石材の利用として他の時期にもみられるものであるが、六ヶ所村や青森平野で増加するようになるのは中期末以降であることに注意したい。また、擦切技法の痕跡の残る粘板岩製の磨製石斧については、青色片岩か緑色岩製の可能性がある。SI11にみられるような竪穴住居跡内の剥片の貯蔵ピットは青森県内では縄文時代中期中葉から後期前葉にかけて多く、中期末に多い（斉藤2007）。図示していないが、本遺跡では、赤色顔料が入った土器底部、赤彩土器などが見つかっている。３図右下は、八戸市の南に隣接する階上町の野場（５）遺跡の出土品である。大木９式に相当する第11号住居跡では赤色顔料で着色された土器が出土している。赤色顔料や漆付きの土器は、アスファルトと同様に中期後葉から末にかけて散見される。大木10式の122号住居跡では、３脚付き石皿・土製耳飾り・石鹸形の磨石（上條2007）、玉髄質珪質頁岩のピエス・エスキーユが出土している。

（２）秋田・岩手・宮城・福島の石器

南から北へと４図以降図示する。ここで注意されるのは、福島県宮畑遺跡を始めとする東北南部の出土品では大木９式段階には小形無茎凹基鏃と錐先が細長く棒状となる石錐が出土していることである。

また、中期末には「石刃」が山形県内で製作され、宮城県に搬出されることが知られている（会田2000）。福島県内の資料についても、４図上の宮畑遺跡のSI70の縦長剥片には、頭部調整の痕跡が認められる。宮畑遺跡SI50、福島市愛宕原遺跡第19号住居跡出土の削器には素材剥片の頭部調整が残る。飯野町和台遺跡の竪穴住居跡出土の剥片石器については、背面構成が整っていないものを含むが、頭部調整を行いソフトハンマーで連続的に剥離した石刃や石刃状の縦長剥片（角張2003ａ）が出土して

いる（第193号住居跡など）。第21号住居跡の石核は打面調整があり、長さ２㎝弱である。図をみると旧石器時代の細石刃核の可能性を感じるが、報告書ではふれられていないので、住居に伴うものと判断されているようである。他の石器と石材の風化状況が同じ物であれば、石材消費地で小形の石刃製作が行われていることを示す物となる。また朱顔料容器と思われる土器や３脚付き石皿が出土している。第193号住居跡では、北東北では後期初頭から前葉に製作が盛んになる狩猟文土器が時期的に先行して出土している。

仙台市下ノ内遺跡のSI6住居跡では大木10式の石器・土製品が多数出土した。円盤状土製品を図示したが、ミニチュア土器とともに、この時期には東北から北海道南部まで広域で多く出土する。石器は碧玉や玉髄、流紋岩や珪化木など在地の石材で小形の石器が製作されている。碧玉は緑色の硬質の石材である。中期末に青森県内で比率が増える玉髄質珪質頁岩とは硬さと明るい色であるという点で類似を感じる。また頭部調整のある縦長剥片を素材にした石匙・掻器・削器などが出土している。福島県和台遺跡、宮畑遺跡等出土の縦長剥片等と共通する。

５図左上に宮城県大衡村上深沢遺跡第１号住居跡の資料を置く。大木９式期のものであるが、石鏃・石錐・円盤状土製品・有縁石皿など、次期の道具とほぼ変わらない。

５図左下の山形県寒河江市高瀬山遺跡（HO）のSX241は、大木10式期の住居跡の可能性のある遺構であるが、出土石器の詳細な技術形態学的な検討がなされている。石鏃と石鏃未製品、石刃の接合資料が得られている。高瀬山遺跡は前期の遺跡でもあり、参考としてあげたSK3648土坑等で前期末の大木６式の石器が得られている。小形の無茎凹基鏃、錐先の長い石錐、頭部調整が施された可能性のある縦長剥片が出土している。また大木４式を主体とした山形県押出遺跡でも、同様の石錐は出土している。無茎凹基鏃のうち小形のものは、中期末葉のものと似ている。

以上から中期後葉以降に青森県東南部の八戸市周辺に、中期末には青森県全域に現れる小形の無茎凹基鏃、錐先の長い石錐は、東北地方南部では、前期段階で使用されていることがわかる。起源を東北南部に見いだすことができる。一方、撥形の石篦の良好な出土例がない。

５図右上に岩手県一戸町の御所野遺跡の大木９式、田中遺跡の大木10式の資料を置く。ミニチュア土器やキノコ形土製品、土製耳飾りなど階上町野場（５）遺跡のものに近い。右下の岩手町秋浦Ⅰ遺跡のRA31（２）住居跡は大木８ａから大木９式にかけての遺物が出土している。すでに大木10式にみられるような小形無茎凹基鏃が出土している。大木９式の宮城県上深沢遺跡第１号住居跡と同様、斧状土製品が出土している。６図左上に秋田県鹿角市天戸森遺跡の資料を置く。鹿角市は円筒土器文化圏であるが、大木９式併行（最花式）期の第59・６号住居跡の石鏃・石錐は大木式の形になっている。円筒上層ｅ式から大木９式併行（最花式）期の第62Ａ・Ｂ住居跡も石鏃形の磨石と脚付き石皿が出土している。６図左下の秋田市松木台Ⅲ遺跡の大木８ｂ式から大木９式期の石鏃・石錐も前期大木式以降の特徴を持つ。大木９式のSI86では、異形土器が出土しているが、この形の土器は、青森県内では、鰺ヶ沢町餅ノ沢遺跡や西目屋村大川添（３）遺跡など大木10式併行期のものが多く、三内丸山（６）遺跡のように後期前葉まで続く。狩猟文土器と同様、大木式文化圏で時期的に先行する。なお、秋田県松木台Ⅲ遺跡では、118点の黒曜石が分析されたが90%（106点）が、男鹿産であった。しかし、SI86は、12点の黒曜石製小形剥片のうち、青森県津軽地方の出来島産が８点、男鹿産が４点である。青森県域との交流を感じさせる。

（３）北海道の遺跡

６図右から８図は、北海道の資料である。６図左の秋田県の資料と一見して異なっているのは石鏃の形である。北海道南部から石狩低地帯にかけては円筒土器文化伝統の有茎石鏃が中期末以降も続いている。また、青森県では中期中葉以降に消滅へと向かう半円状扁平打製石器、中期中葉に現れ後葉以降に消滅へと向かう北海道式石冠が出土しているのが注目される。

６図右上は津軽海峡に面した北海道函館市浜町Ａ遺跡のHP－５住居跡の資料である。煉瓦台式の住居跡として報告されているが、上部からの弧状の刺突から大木10式併行土器を思わせる土器が出土している。類似した土器は六ヶ所村弥栄平（１）遺跡の第13Ａ号住居跡から出土している。他には後期初頭の天祐寺式土器が出土している。青竜刀形石器は函館市戸井地区から南茅部地区にかけてが製作地域であり、その未製品を含めて出土している。また、この地域は珪質頁岩の産地でもあり両面加工石器も出土している。刃部を形成し厚さの薄いナイフ状の石器は函館市南茅部の八木Ａ遺跡、戸井地区の戸井貝塚などに多く見られる。縁辺から求心的に剥片剥離を行った石核の延長上にあるような木葉形のもの（八木Ａ・Ｂ遺跡の「粗工両面調整品」）は青森県山田（２）遺跡を始め石材産地の各地の遺跡に見られる。両面加工石器から剥離した剥片は石鏃に、本体は石槍に加工が可能な形であり、山形県日向洞窟西地点で、詳細に分析されている（大場2007）。６図右下は北海道檜山地方の乙部町緑町２遺跡の出土品である。第２号住居跡は一部に中期後葉から末葉の土器片を含むが後期初頭が主体である。石鏃は有茎鏃で無茎鏃はみられない。石篦は撥形であり、青森県域の大木10式併行から後期前葉にかけての形に類似する。第３号住居跡は大木10式併行と煉瓦台式の土器が出土している。青森県域では中期末には石槍が減少しているように感じているが、北海道では中期末でも石槍が石器組成の中に入る。有茎石鏃と石槍の形は左右非対称であり、北海道の伝統を踏襲している。そして松原型石匙に類似した石匙がみられ、半円状扁平打製石器と北海道式石冠が出土している。石皿は有縁石皿であるが、脚付きは基本的には見られない（小樽市忍路土場遺跡のように後期以降に多い）。

７図左上は、函館市の北側に隣接する七飯町の七飯本町１遺跡の出土資料である。１・４・２号住居跡ともに中期末の煉瓦台式と後期初頭の天祐寺式土器が出土している。第１号住居跡では半円状扁平打製石器が出土している。第４号住居跡では、より新しい後期前葉の土器も出土しているが、半円状扁平打製石器と北海道式石冠が出土している。柱状の石棒も中期に多いものである。第２号住居跡は、より古い中期初頭の土器も出土しているが、半円状扁平打製石器に形状の類似した磨石が出土している。筆者は、半円状扁平打製石器については細長い磨面を維持するために再加工がおこなわれ、素材も厚みのない板状礫や剥離加工で薄くできる楕円礫が選ばれているのが特徴と考えている。青森市桜峯（１）遺跡では、磨面が剥離により再加工された例が観察されている（沼宮内1998）。北海道木古内町大平４遺跡では、再加工の剥片との接合例が得られている（８図）。磨面が幅広いものは成形加工では半円状扁平打製石器の系統上にあるが対象物や使用の細部にあたっては、異なる可能性がある。また、三日月形に近い削器（異形石器）が出土しているが、八戸市松ヶ崎遺跡や鹿角市天戸森遺跡でも出土しており、この形のものは、今回紹介した遺跡のなかでも、御所野遺跡・三内丸山遺跡（とくに南北の盛土）から出土しており中期後半に広く分布するようである。

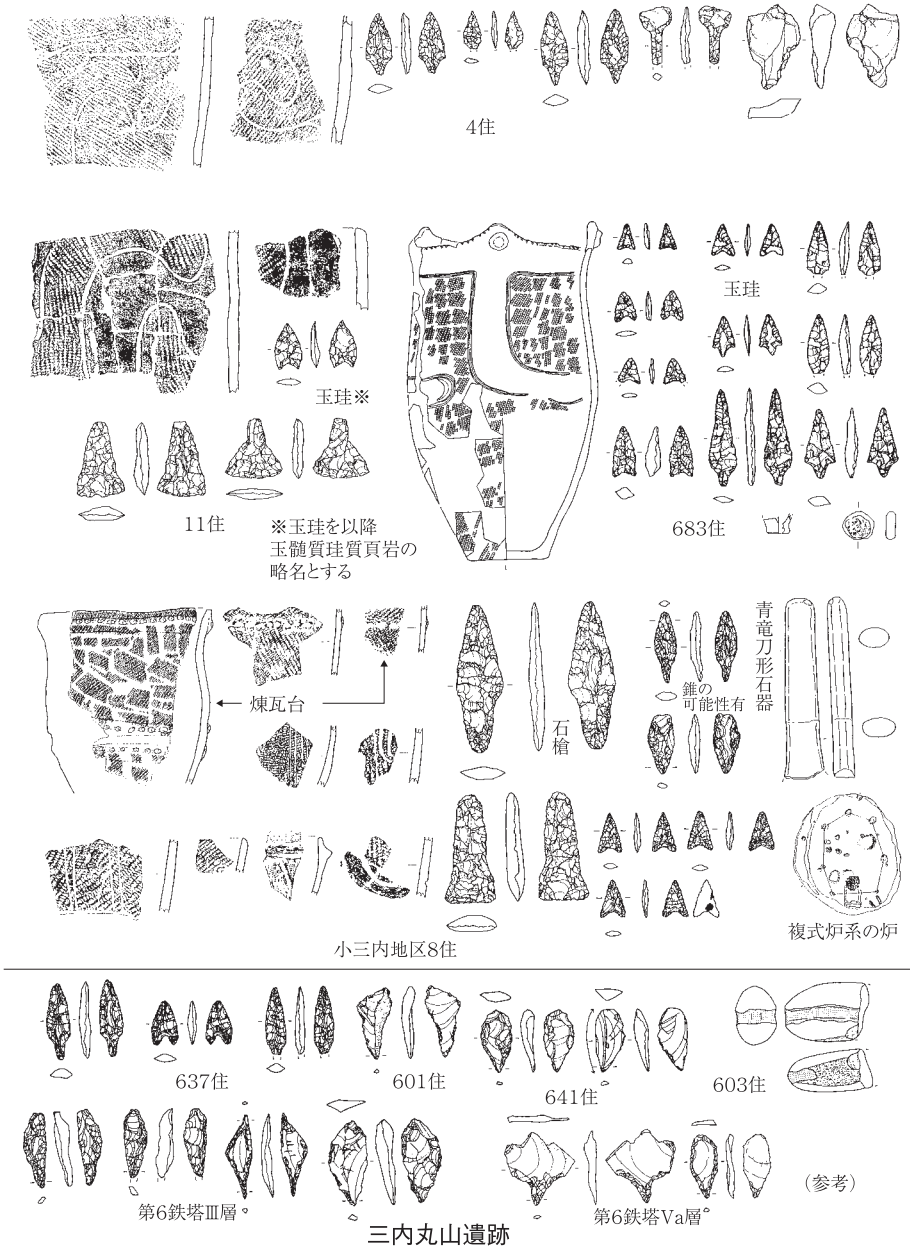
７図左下は、函館市南茅部地区の大船遺跡の資料である。Ｈ－56からは、大安在Ｂ式と最花式が出土している。半円状扁平打製石器が出土しているが、大船遺跡では、大安在Ｂ式及びノダップⅡ式の

遺構が多数出土しており、両者に確実に伴う。Ｈ－49はノダップⅡ式の竪穴住居跡であるが、青竜刀形石器の未製品が出土している。また、楕円礫の両端を打ち欠き、側面を機能面とする磨石が出土している。北海道式石冠に類似するものの溝を作り出さない磨石であり、両側縁に打ち欠きがある点では、半円状扁平打製石器に近い。石鏃は有茎で石槍は茎が長い。また、大船遺跡のように渡島半島では、有茎石鏃は、青森県域に多い茎の短いものと、石狩低地帯以北に多い茎の長いものと両方が存在する。

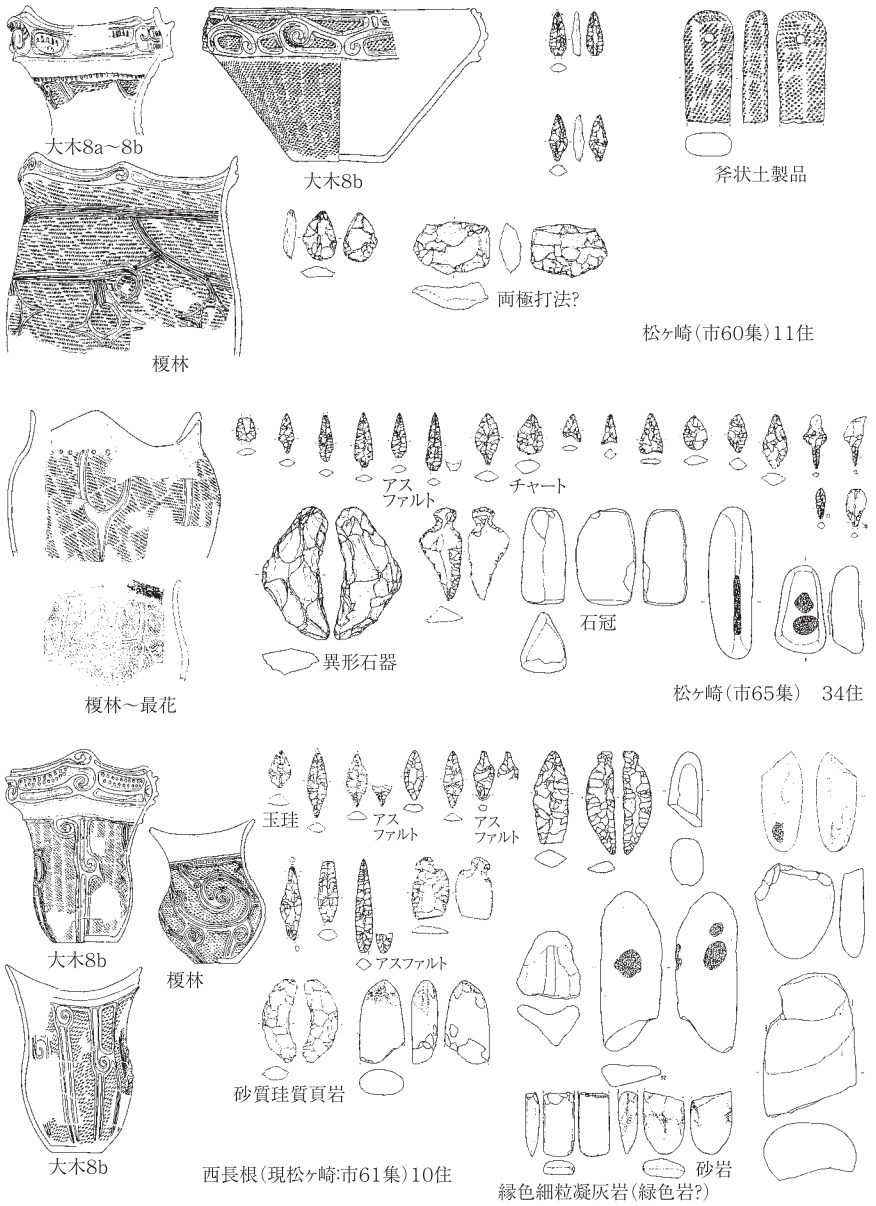
７図右上は、苫小牧市静川遺跡Ｂ地区の資料である。中期末の北筒式を主体とした住居跡の中に煉瓦台式の土器が混じる。剥片石器は黒曜石が主体であるが、30号住居跡で一部欠損するが長さ12.8㎝幅2.4㎝の頁岩製の「石刃状の剥片」が出土する。北海道の縄文時代の石刃状剥片については、礼文島の上泊３遺跡の報告書の中でまとめられている。石刃状剥片やそれを素材とした石匙等が円筒上層式から北筒式まで中期後半に道内各地に見られ、北筒式では古くから知られていたこと、縄文時代後期の礼文島船泊遺跡にも存在することが紹介されている（寺崎1985）。筆者がイメージする円筒式の縦長剥片の生産の典型例は北海道八雲町山崎４遺跡のFC－７出土の中期中葉（サイベ沢Ⅶ、見晴町式）の接合資料である（８図）。山崎４遺跡のものは頭部調整をせずにハードハンマーで稜を追うように連続的に剥離しており剥片も厚みがある。北筒式や東北南部の石刃と異なっている。

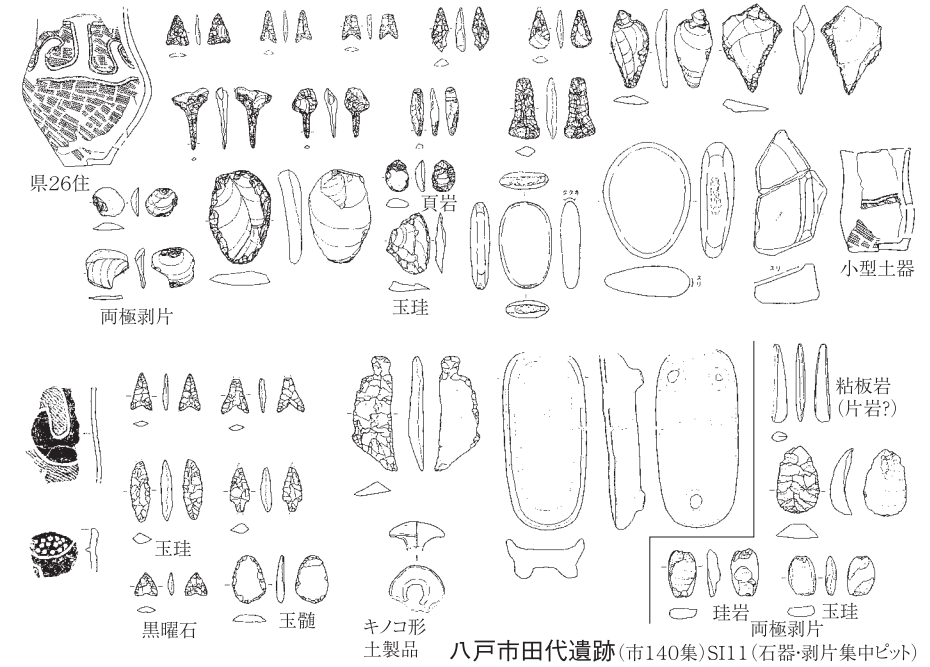
７図右下は、千歳市美々３遺跡の資料である。Ｈ－19は北筒式の住居跡であるが、緑色泥岩（筆者注；緑色岩か）製の磨製石斧未製品とその敲打整形用の多面体の敲石が出土している。緑色岩（緑色片岩）の産地である日高南部の平取町に近いためか、安全確実に製作できる擦切技法ではなく、早く製作できるが折損の危険性のある剥離と敲打により磨製石斧を製作している。その初期の敲打整形から平坦面を除く全面に敲打が及んだものまであるうえ、折損品がある。縁辺から敲打整形し、正面や裏面の平滑な部分はそのまま残して研磨するという工程が見える資料が得られている。北海道式石冠未製品の可能性のある石器と半円状扁平打製石器も出土している。北筒式のＨ－24の床面直上でも北海道式石冠が出土している。Ｈ－17では撥形の石篦が出土しているが石狩低地帯での出土例は少ない。また、石鏃及び石槍は静川遺跡Ｂ地区と同様に、茎が長く左右非対称である。

８図上に石狩川の神居古潭峡谷に近い深川市音江２遺跡の北筒式の住居跡の出土例と土坑・遺構外の磨製石斧（未製品）を掲載する。Ｈ－３からは砥石と台石が各１点出土し、図示されていないが片岩のフレイクが13点出土している。台石と砥石は片岩（筆者注；神居古潭峡谷周辺に産する青色片岩か）製の磨製石斧製作に関係するものと考えたい。遺構外の磨製石斧は、欠損品が未製品の形状に近い。また、剥離面が研磨しきれず残るのは、８図に示した三内丸山遺跡をはじめとする青森県内から出土する青色片岩の特徴と合致する。なお、三内丸山遺跡では時期ごとに振り分けた磨製石斧石材の変化の表がある（合地2007）。資料操作を加えたものであるが、深川市納内３遺跡で大規模な石斧製作が始まる中期から青色片岩製磨製石斧が増加し、中期末も一定量を占める。中期末の北筒式期についても深川市音江２遺跡や国見２遺跡など産地周辺で磨製石斧製作が継続することと調和する。８図に中期中葉の三内丸山遺跡第641号住居跡４脚付きのミニチュア土器を置いた。青森県内では脚付きの石皿が多くなるのは中期末以降からであるので、岩田（2012）の述べるように木製皿を模した可能性がある。


4住
玉珪※
11住
※玉珪を以降
玉髄質珪質頁岩の
略名とする
玉珪
683住
煉瓦台
石槍
錐の可能性有
青竜刀形石器
小三内地区8住
複式炉系の炉
637住
601住
641住
603住
第6鉄塔Ⅲ層°
第6鉄塔Va層°
(参考)
三内丸山遺跡
玉珪
珪岩
両極打法?
富ノ沢(1)88-1住
青竜刀形石器模倣品?
珪岩
粘板岩
(青色片岩?)
88-4住
Ⅳ-58号遺構
全て珪質頁岩
ホルンフェルス
関緑岩
Ⅳ-110号
ホルンフェルス
Ⅳ-117号
富ノ沢(2)
Ⅳ-5号
六ヶ所村 富ノ沢(1)・(2)遺跡

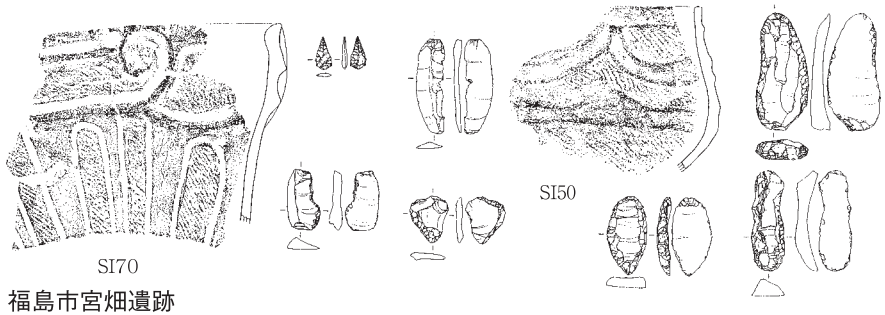
2図


大木8a～8b
大木8b
斧状土製品
榎林
両極打法?
松ヶ崎(市60集)11住
榎林～最花
アスファルト
チャート
石冠
異形石器
松ヶ崎(市65集) 34住
大木8b
榎林
玉珪
アスファルト
アスファルト
アスファルト
砂質珪質頁岩
大木8b
西長根(現松ヶ崎:市61集)10住
砂岩
緑色細粒凝灰岩(緑色岩?)
八戸市松ヶ崎遺跡

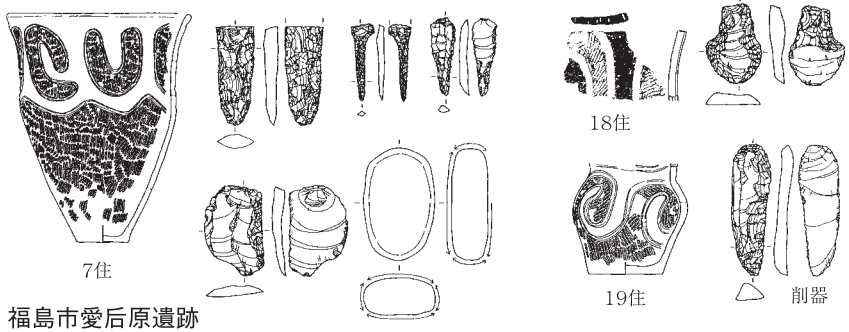

県26住
頁岩
小型土器
両極剥片
玉珪
粘板岩
(片岩?)
玉珪
黒曜石
玉髄
キノコ形
土製品
珪岩
玉珪
両極剥片
八戸市田代遺跡(市140集)SI11(石器・剥片集中ピット)

15住 最花
10住 大木9
玉珪
赤色顔料塗付
11住 大木9
有縁石皿破片
122住 大木10
玉珪
ピエス・エスキーユ
磨石
耳飾
三脚付石皿
階上町野場(5)遺跡

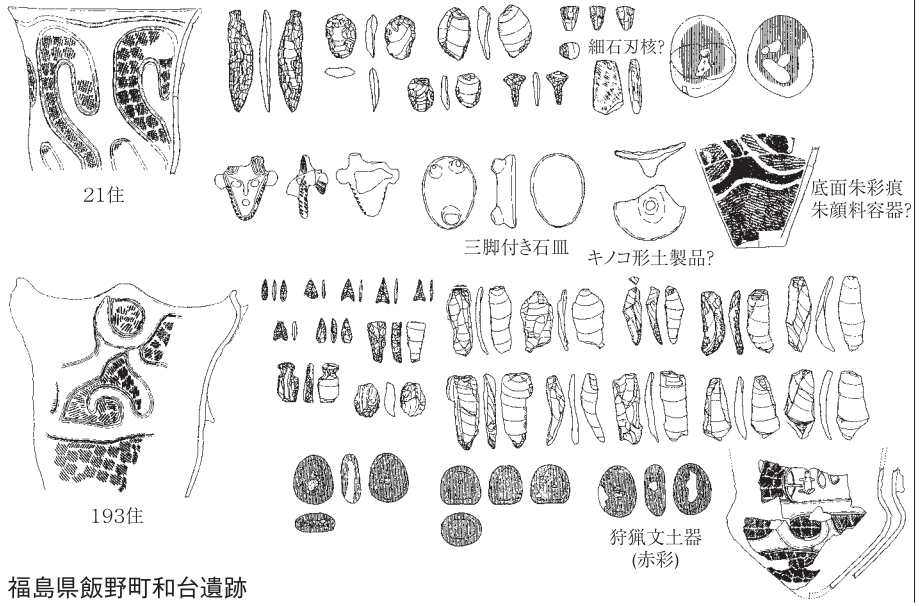
3図



福島市宮畑遺跡



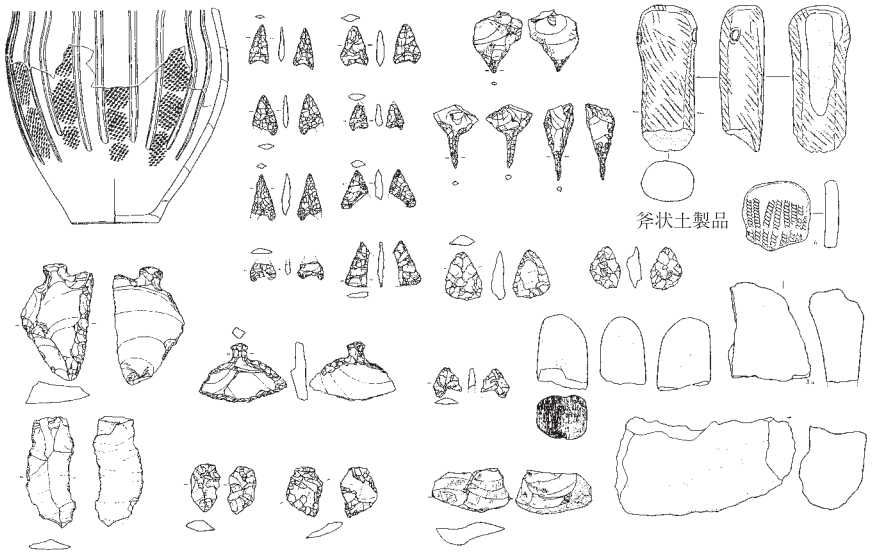
福島市愛后原遺跡



福島県飯野町和台遺跡

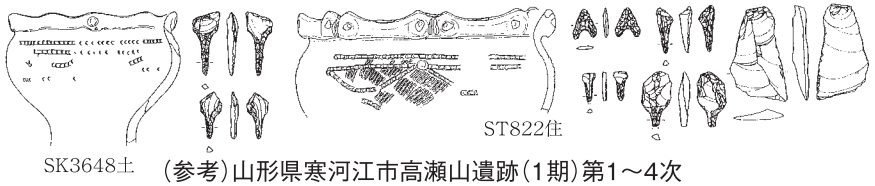
仙台市下ノ内遺跡　SI6

4図



宮城県大衡村上深沢遺跡　1住

山形県寒河江市高瀬山遺跡HO3期　SX241

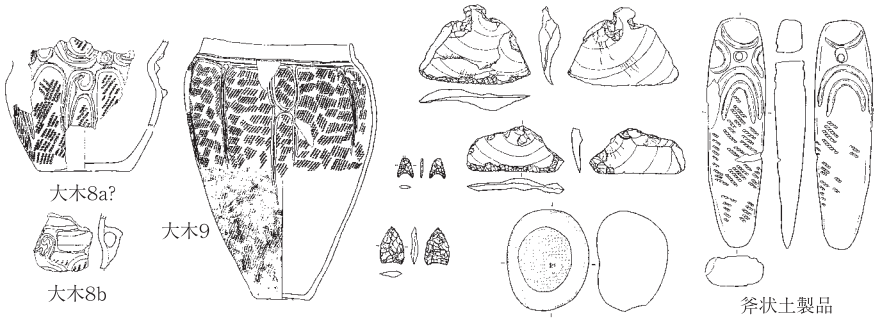


（参考）山形県寒河江市高瀬山遺跡（1期）第1～4次

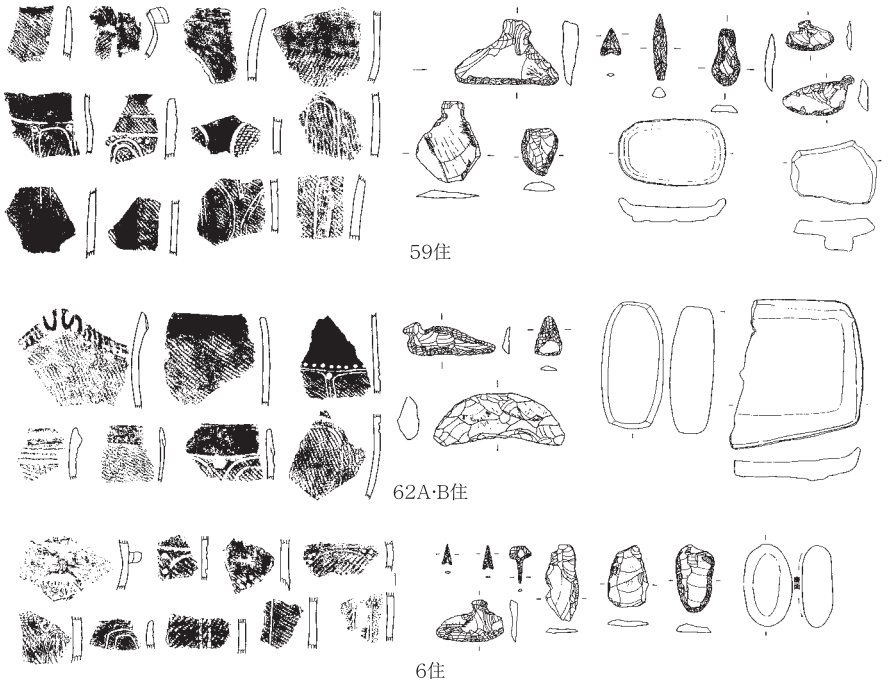
（参考）山形県高畠町押出遺跡（大木4式主体）

岩手県一戸町　御所野遺跡（DF22住）

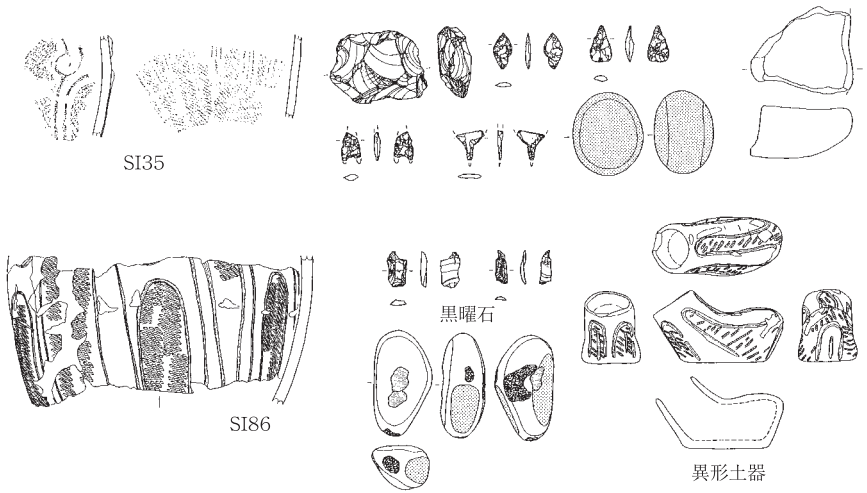
岩手県一戸町田中遺跡



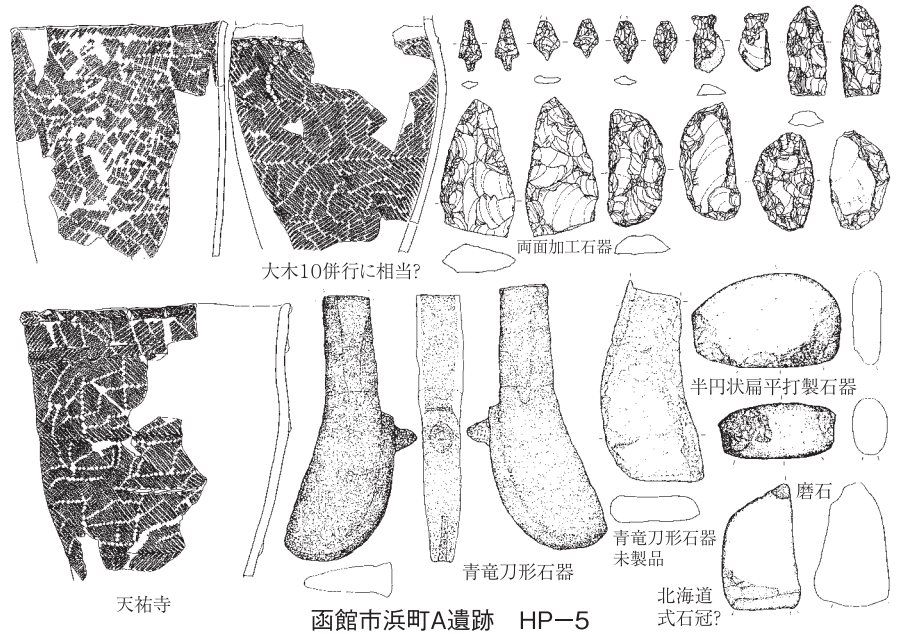
岩手県岩手町秋浦I遺跡　RA31（2）住



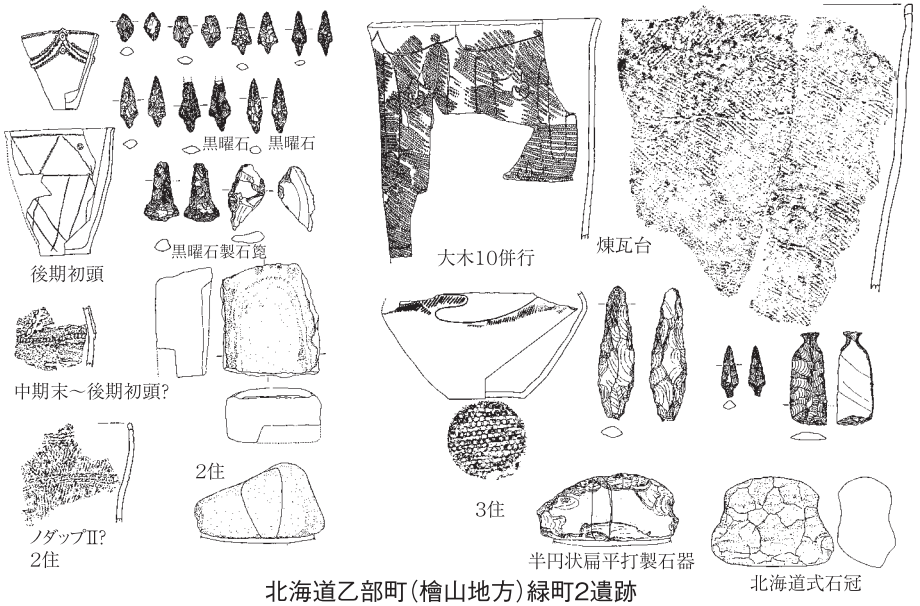
秋田県鹿角市天戸森遺跡



秋田県秋田市松木台Ⅲ遺跡



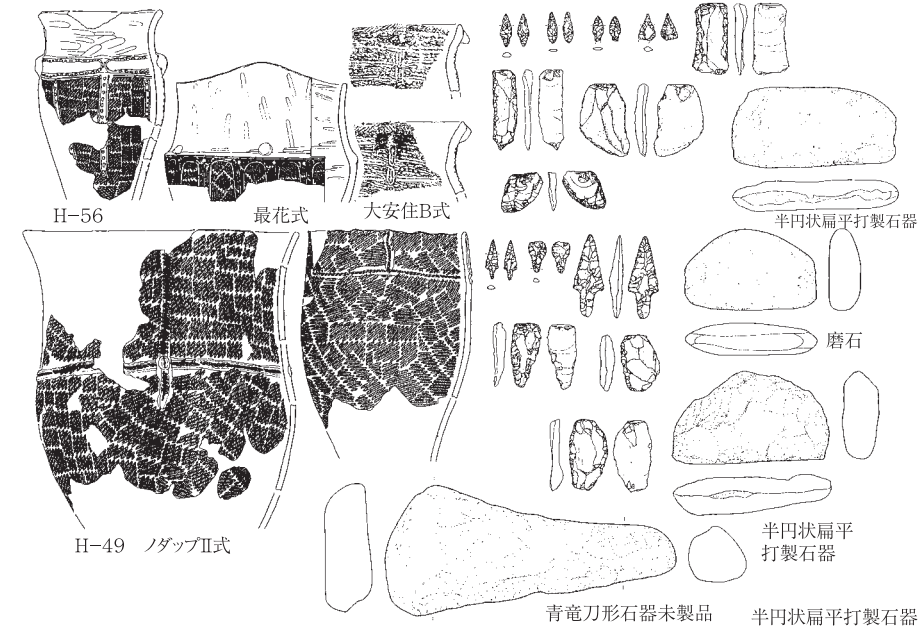
函館市浜町A遺跡　HP−5

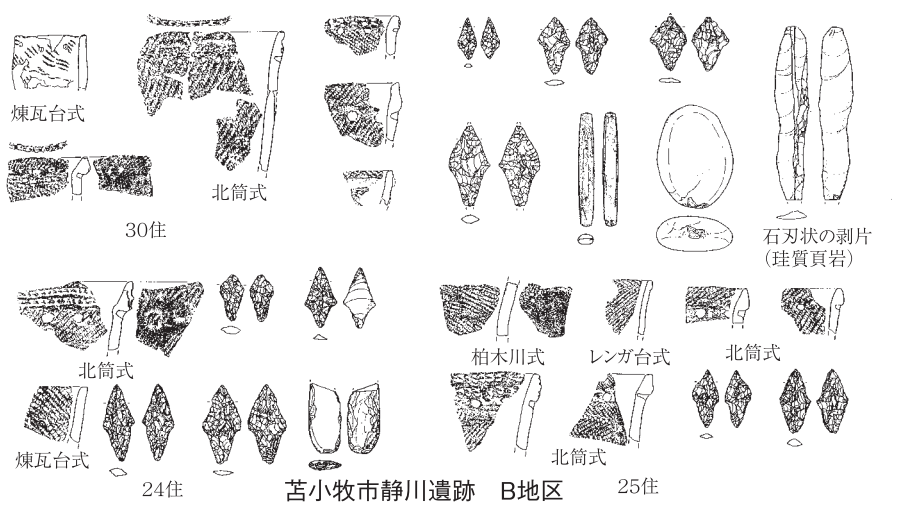


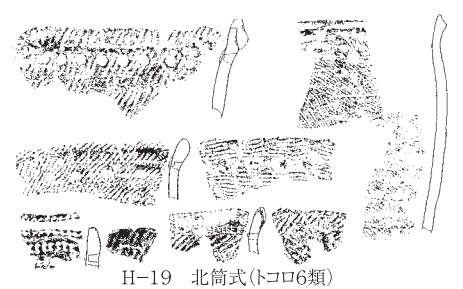
北海道乙部町(檜山地方)緑町2遺跡

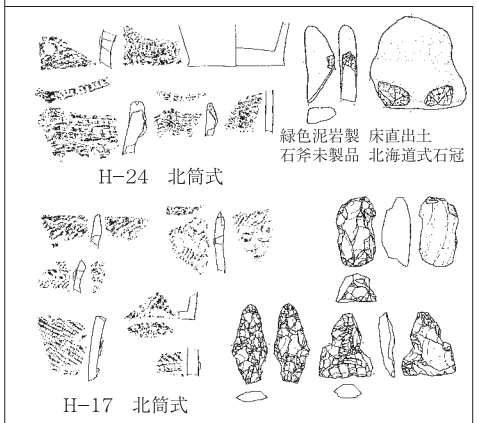
6図

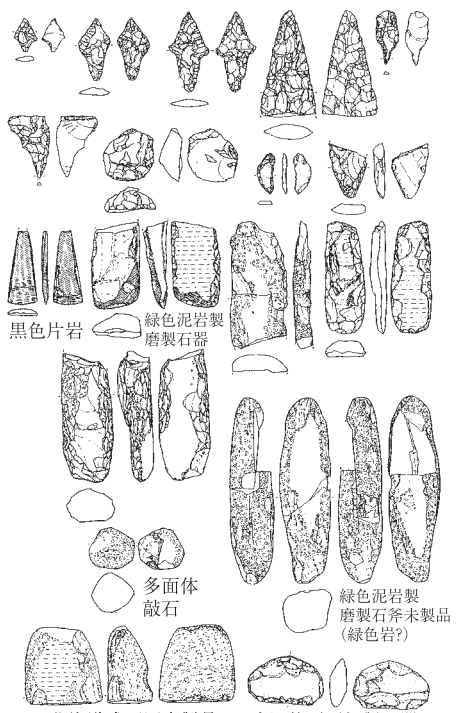
煉瓦台式
1住
天祐寺式
後期前葉
煉瓦台式
4住
天祐寺式
後期
前葉
北海道式石冠
半円状扁平打製石器
天祐寺式
煉瓦台式
ノダップII式
2住
後期前葉
「磨石」
北海道　七飯町（渡島地方）七飯本町1遺跡


H−56
最花式
大安住B式
半円状扁平打製石器
磨石
H−49　ノダップII式
半円状扁平
打製石器
青竜刀形石器未製品
半円状扁平打製石器
函館市大船遺跡

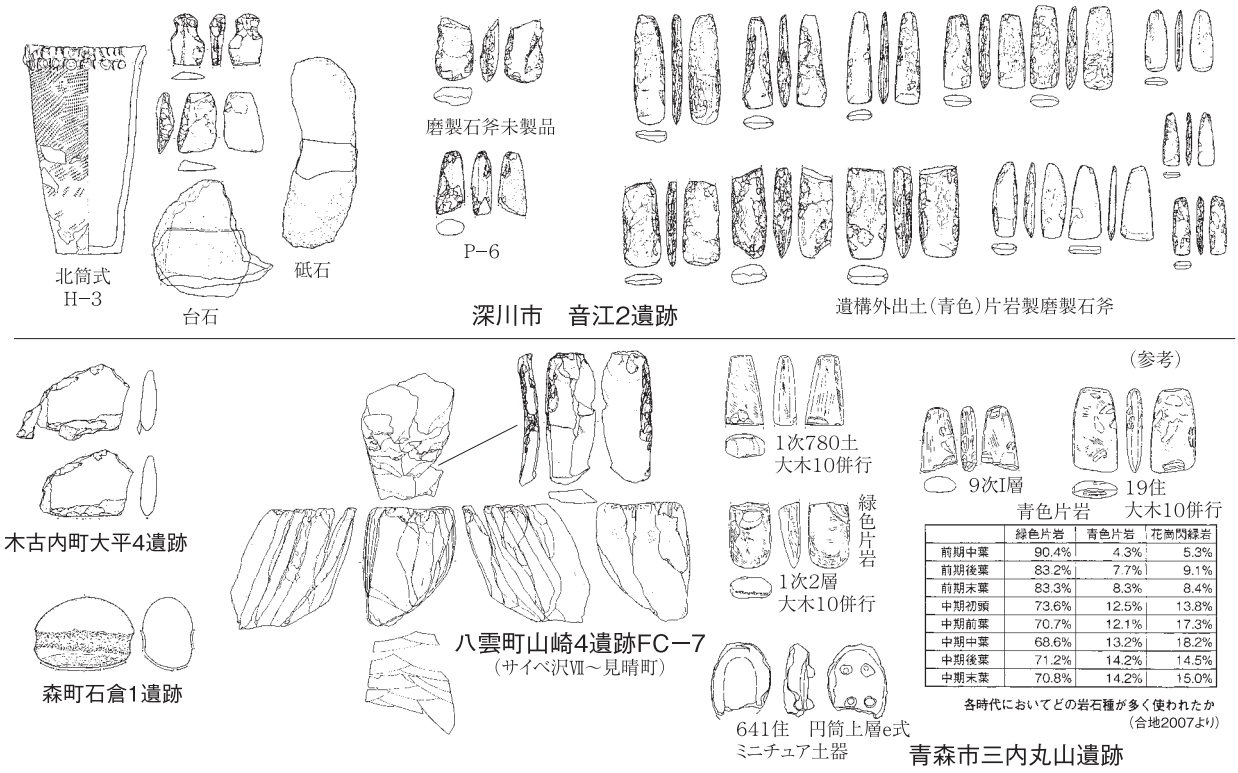

煉瓦台式
北筒式
30住
石刃状の剥片
（珪質頁岩）
北筒式
柏木川式
レンガ台式
北筒式
煉瓦台式
24住
苫小牧市静川遺跡　B地区
北筒式
25住


H−19　北筒式（トコロ6類）


緑色泥岩製
石斧未製品
床直出土
北海道式石冠
H−24　北筒式
H−17　北筒式


黒色片岩
緑色泥岩製
磨製石器
多面体
敲石
緑色泥岩製
磨製石斧未製品
（緑色岩?）
北海道式石冠未製品?
半円状扁平打製石器
千歳市美々3遺跡

7図



	緑色片岩	青色片岩	花崗閃緑岩
前期中葉	90.4%	4.3%	5.3%
前期後葉	83.2%	7.7%	9.1%
前期末葉	83.3%	8.3%	8.4%
中期初頭	73.6%	12.5%	13.8%
中期前葉	70.7%	12.1%	17.3%
中期中葉	68.6%	13.2%	18.2%
中期後葉	71.2%	14.2%	14.5%
中期末葉	70.8%	14.2%	15.0%

各時代においてどの岩石種が多く使われたか
(合地2007より)

8図

図の出典
2図左　三内丸山遺跡
4・11住　青森県教育委員会　1998　『三内丸山遺跡Ⅹ』
683住　青森県教育委員会　2006　『三内丸山遺跡29』
小三内地区8住　青森市教育委員会　1994　『小三内遺跡発掘調査報告書』
637・601・641住　青森県教育委員会　2005　『三内丸山遺跡26』
603住　青森県教育委員会　1998　『三内丸山遺跡ⅩⅠ』
第6鉄塔Ⅲ・Ⅴa層　青森県教育委員会　1997　『三内丸山遺跡Ⅷ』
2図右　富ノ沢（1）遺跡　青森県教育委員会　1991　『富ノ沢（1）・（2）遺跡』
富ノ沢（2）遺跡　88-4住　青森県教育委員会　1991　『富ノ沢（1）・（2）遺跡』
110・117・5号遺構　青森県教育委員会　1991　『富ノ沢(2)遺跡Ⅳ』
3図左　松ヶ崎遺跡　11住　八戸市教育委員会　1994　『八戸市内遺跡発掘調査報告書6』
34住　八戸市教育委員会　八戸市教育委員会　1996　『八戸市内遺跡発掘調査報告書8』
西長根地点10住　1995『八戸市内遺跡発掘調査報告書7』
3図右　田代遺跡　26住青森県教育委員会　2006　『田代遺跡』
八戸市教育委員会　2013　SI11　『八戸市内遺跡発掘調査報告書30』
野場（5）遺跡　青森県教育委員会　1993　『野場（5）遺跡』
4図左　宮畑遺跡　福島市教育委員会2006『宮畑遺跡3（岡島）』
愛宕原遺跡　福島市教育委員会1989『愛宕原遺跡』
和台遺跡　飯野町教育委員会　2003　『和台遺跡』
4図右　下ノ内遺跡　仙台市教育委員会　1990　『下ノ内遺跡』
5図左　上深沢遺跡　宮城県教育委員会　1978　『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』
高瀬山遺跡3期　山形県埋蔵文化財センター　2012　『高瀬山遺跡（HO）3期発掘調査報告書』
1期　山形県埋蔵文化財センター　2004　『高瀬山遺跡（1期）第1〜4次発掘調査報告書』
押出遺跡　山形県教育委員会1990『押出遺跡発掘調査報告書』
6図左
天戸森遺跡　鹿角市教育委員会1984
松木台Ⅲ遺跡　秋田県教育委員会2001
5図右　御所野遺跡　一戸町教育委員会2004『御所野遺跡Ⅱ』
田中遺跡　一戸町教育委員会2003『田中遺跡』
秋浦Ⅰ遺跡（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001　『秋浦Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
6図右
浜町A遺跡　戸井町教育委員会　1990
緑町2遺跡　乙部町教育委員会　1989　『緑町2遺跡』
7図左　七飯本町1遺跡　七飯町教育委員会　1986　『七飯本町1・2遺跡』
大船遺跡　南茅部町教育委員会1998『大船C遺跡』
7図右
静川遺跡 苫小牧市教育委員会2002『苫小牧東部工業地帯の遺跡Ⅷ』
美々3遺跡　財団法人　北海道埋蔵文化財センター　1991『美沢川流域の遺跡群XIV』
8図　音江2遺跡　財団法人　北海道埋蔵文化財センター　1988『深川市音江2遺跡』
大平4遺跡　北海道埋蔵文化財センター　2011『木古内町　大平遺跡・大平4遺跡』
石倉1遺跡　財団法人　北海道埋蔵文化財センター　2007『森町石倉1遺跡』
山崎4遺跡　北海道埋蔵文化財センター　2001　『八雲町山崎4遺跡』
三内丸山遺跡
1次調査　青森県教育委員会　1996　『三内丸山遺跡Ⅴ』
641住　青森県教育委員会　2005　『三内丸山遺跡26』
9次調査　青森県教育委員会　2002　『三内丸山遺跡ⅩX』
19住　青森県教育委員会　1998　『三内丸山遺跡Ⅹ』

地域	遺跡・地点	時期	主体となる土器型式	小形凹基鏃	有茎茎長石鏃・槍	錐先棒状石錐	撥形石篦	青竜刀形石器	青色片岩磨製石斧	緑色岩磨製石斧	三日月形異形石器	脚付き石皿	頭部調整石刃	半円状扁平打製石器	北海道式石冠	両極打法の顕在化	中期後葉から継続	後期初頭への継続
青森県青森市	三内丸山６鉄塔ＶＣ層	前期中葉	円筒下層b						○									
青森県青森市	三内丸山5・10・11次	中期中葉	円筒上層e						○		○				◎	○		
北海道深川市	音江２	中期末	北筒		○				●								有	有
北海道千歳市	美々3	中期末	北筒		◎		◎少量		◎?・○	●			○	◎	◎		有	有
北海道苫小牧市	静川B地区	中期末	北筒		◎				○	○			◎	◎	◎		有	有
北海道函館南茅部	大船	中期後葉	大安在B		◎			●	○?	○				◎	◎			有
北海道渡島七飯町	七飯本町1	中期末	煉瓦台		◎			◎未製品?		○	◎			◎	◎			有
北海道桧山乙部町	緑町2	中期末	大木10併行		◎		◎							◎	◎			有
北海道函館戸井	浜町A	中期末	煉瓦台		◎			●	○?	○				◎	◎		有	有
青森県六ケ所村	富ノ沢(1)88-4住	中期末	大木10併行	◎				模倣品?		○						○		
青森県六ケ所村	富ノ沢(2)Ⅳ(C地区)	中期末	大木10併行	◎		◎	◎		◎	○		◎				○		
青森県青森市	三内丸山683住等	中期末	大木10併行	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○		○				○		
青森県八戸市	松ヶ崎11住他	中期後葉	榎林前後							○	◎					○		
青森県八戸市	松ヶ崎34住	中期後葉	～最花	◎		◎				○	◎					○		有
青森県八戸市	田代	中期末	大木10併行	◎		◎	◎			○		◎				◎		有
青森県三戸郡階上町	野場(5)	中期後・末	最花他	◎		◎	◎			○		◎				◎	有	
岩手県一戸町	御所野DF22住	中期末	大木９	◎		◎				○								
岩手県一戸町	田中	中期末	大木10	◎		◎	○	○		◎		◎				○		
岩手県岩手町	秋浦ＩRA31(2)住	中期末	大木９	◎		◎					○						有	有
秋田県鹿角市	天戸森	中期後葉	大木9併行	◎		◎					◎	◎						
秋田県秋田市	松木台Ⅲ	中期末	大木９	◎		◎												有
山形県寒河江市	高瀬山(HO)SX241	中期末	大木10	◎		○							●					
宮城県	上深沢	中期後葉	大木９	◎		◎						◎						有
宮城県仙台市	下ノ内	中期末	大木10	◎		◎						○	◎			◎	有	有
福島県福島市	宮畑(岡島)	中期末	大木10	◎		○						○	◎					
福島県福島市	愛宕原	中期末	大木10	◎		◎						○	◎				有	有
福島県飯野町	和台	中期末	大木10	◎		◎						○	◎・小形●?				有	有
山形県寒河江市	高瀬山(HO)SK3468等	前期末	大木６	◎		◎												
山形県高畠町	押出	前期中葉	大木４	◎		◎												

●製作遺跡　　◎出土(図示)　　○出土(図示せず)

2表　遺跡・時期ごとの石器の出土状況等

	小形凹基鏃	錐先棒状	撥形石篦	石鹸状磨石	有脚石皿	茎長石鏃・槍	両極打法の顕在	北海道式石冠	青竜刀形石器	半円状扁平打製石器	青色片岩石斧	緑色(片)岩石斧	集落継続の傾向
北海道北・東						◎					○	○	有
空知・日高						◎					●	●	有
石狩低地帯			△			◎		○	●	○	○	●	有
渡島半島			○			○		○	○	○		●(擦切技法)	有
青森県	○	◎	◎	○	○	△	○※		○		○	●(北部擦切)◎	全体的にみて弱い
岩手県	◎	○	△	○	○		○		○		○	○	有
秋田県	○	○		○	○								有
宮城県	○	○		○	○		○						有
山形県	○	○		○	○								有
福島県	○	○		○	○								有
前期大木式	○	○											

●製作遺跡　　◎多数出土　　○出土　　△少量出土　　※珪質頁岩産地を除く

3表　地域ごとの中期末の石器出土状況等

４　まとめ

三内丸山遺跡の大木10式併行期の石器群から出発し、北海道中央部から東北地方の石器群を俯瞰した。２表でまとめ、さらに３表で簡略化してまとめる。錐先が棒状に長い石錐と小形の無茎凹基鏃は東北南部の前期の大木式にはすでにあり、青森県域では八戸市周辺で最花式期にあらわれ、大木10式併行期には、青森県全域に広がる。撥形の石篦については青森県域や北海道に分布する。そして、量的に多いのは青森県域であり、この地で発生した可能性がある。両極打法については、仙台市下ノ内遺跡で碧玉等の地元の石材の剝離・加工等に多用されている。八戸市周辺でも各時期で在地石材の加工に使用され、八戸市田代遺跡などで盛んに使用されている。これは良質な珪質頁岩に恵まれていない東北地方太平洋沿岸部の特徴かもしれない（注５）。

青森県六ヶ所村は太平洋岸にあり、玉髄質珪質頁岩の産地である（斎藤2002）が、珪質頁岩の産地である下北地方に近いためか、在地石材であるにも関わらず、中期後葉までは、あまり利用されていなかった。しかし、中期末以降に盛んに使用されるようになる。珪質頁岩の産地を除き、両極打法が青森県域で多用される契機は八戸市周辺の影響と考えたい。

一方、北海道では中期末になっても円筒土器文化からの伝統が石器に残るといえる。有茎石鏃や石槍の出土と形態、北海道式石冠と半円状扁平打製石器が残存することにあらわれている。長年にわたる青色片岩・緑色岩の磨製石斧と中期後葉以降の青竜刀形石器の青森県域への供給は続くが、石器が変化しない。

集落等の継続性でみてみると、大木９から10式にかけては福島県宮畑遺跡、岩手県上米内・上野平・下舘銅屋遺跡のように継続する集落が多い。また仙台市下ノ内遺跡のように大木10式から後期初頭についても継続性のある遺跡がある。北海道では中期末から天祐寺式（余市式）への継続性は良い。大きく変化するのは両者の間にある青森県域である。

そして、これらの事象がなぜ起こるのかについて考えたい。隣接地域から文化要素が流入する場合、情報・物・人のいずれかの移動によると考えられる。大木10式併行期に南から青森県域に入ってきた要素については、情報・物のみの移動では、石器製作の根幹をなし剥片剝離技法や製品の形・大きさまで左右する石材の嗜好性の変化はおこらないと考えるのが妥当であろう。現在でも「技術移転」は容易なものではなく、技術者も共に移動する。異なる石材と、異なる形の石器が一時的なものとしてではなく、根付くためには移住者の定住が不可欠である。石鏃の形状や大きさの変化は矢柄の変化を伴う。石鏃を作り、弓矢を使う男性が入ってこないと、こうした変化は起こらないと考える。

北海道での状況を考えると、さらに明確になる。岩手県内でも青竜刀形石器や青色片岩・緑色岩製の磨製石斧は出土しており、北海道の渡島半島部の人も青森県域を介して大木式文化の石器の情報を知っていたはずである。三内丸山遺跡小三内地区第８号住居跡のように、北海道の渡島半島から男性が青森県域に来たと推定できそうな例もある。しかし、北海道南部では、基本的に有茎石鏃が出土する。北斗市茂別遺跡Ｈ－12（大木10併行～天祐寺式）出土品のように珪質頁岩製の小形無茎凹基鏃が出土する例もあるが少数である。物のみ移動した例が多いと考えるのが妥当であろう。大木式の石器を使った人は、北海道に渡ったとしても少数であったため、多数をしめる人の中に吸収されてしまったと考えて良いのではないだろうか。中期中～後葉においても同様だったため、円筒系の石器構成は変化せずに半円状扁平打製石器と北海道式石冠が中期末まで残存したと考えると整合性がある。

次に、人の移動の順序について推論する。青森県域の中期中葉では六ヶ所村富ノ沢（２）遺跡など太平洋岸で大木８ａ式などが出土し、後葉の大木８ｂ式は八戸市松ヶ崎遺跡から多数出土し、斧状土製品も出土する。八戸市松ヶ崎遺跡や階上町野場（５）遺跡で、最花式段階に小形無茎石鏃や錐先の長い石錐が出土しており、八戸市周辺から男性の移住が始まった可能性がある。基本的に、深鉢等の煮炊きの土器は女性が作るものと考えられ（松本2013等）、婚姻関係を通じた女性の移住が先行し、これまでの交流を深める形で女性のみならず男性も入ってきたと考えたい。アスファルトや赤彩漆塗り土器など物と、その背後にいる人のよく動く時代性が背景にある（大木式土器の文化は北東北のみならず、関東地方にも影響を与える）。中期後葉以降、一戸町御所野遺跡で大木８ｂ・９式土器や斧状土製品が出土するようになるなど、八戸市は北上してゆく大木式（系）文化に近く、岩手・宮城県の太平洋岸と在地石材の両極打法による剥離技法が共通する地域であることにも注意したい。下北や津軽方面から搬入された珪質頁岩を主に使用していたと考えられる六ヶ所村では、大木10式併行期に盛んに玉髄質珪質頁岩による両極打法の石器製作が行われる。撥形の石篦も多い。玉髄質珪質頁岩は灰色～黒色の珪質頁岩に比べ、色が明るい。東北南部の太平洋側の石器に多いチャート、メノウと石の感じ（硬さを含め）も似ている。撥形の石篦については、石器の小型化と、それに伴う石鏃・石錐の柄との装着方法の変化と連動して青森県内で発生したと考えたい。石篦を小型化すると、刃部と柄との装着部の間が短くなり、撥形にたどりつく。そして、八戸市松ヶ崎遺跡や三内丸山遺跡にみられる小形の有茎石鏃に、大木式系石器の定着と青森県域との文化伝統の融合を考えたい。社会学には内集団と､外集団という考え方がある。一つの集団ができると､最初は多様であった考え方が一つにまとまってくる。そして、外の集団は協調すべき相手としてよりも競争相手等の外集団として意識される。青森県域で大木式土器圏からの移住者を受け入れて、文化融合等の変化が起こったとき、北海道側からみると、青森県域は外集団化した可能性も考えたい。

最後に、なぜ、南からの男性が北海道側にわたる人が少なかったのかについて考える。筆者は、大木式の男性にとって女性の婚姻関係等で既知の円筒の世界（青森県域）から、一つ海を越えた心理的な遠さ（メンタルマップの距離感）と関係していると考えている。一方では北海道と青森県域とは石斧や儀礼的な道具である青竜刀形石器の流通にみるように交流は中期後葉以降も物を中心に続く。しかし、渡島半島では大安在Ｂ式、ノダップⅡ式、煉瓦台式といった異なる土器を使用するようになる。円筒土器文化圏の一体性が弱まるように見えることについて、筆者は、青森県域に見慣れない人が増えてきたため、北海道側で本州側に対して心理的な距離感がうまれた可能性を考えている。青森県域で大木10式併行期に集落構造が変化し、継続性が弱まる事も人の流入による変化が起こったということで説明できる。そして大木式の影響を直接受けない石狩低地帯では、天神山、柏木川式など円筒系の在地性の強い土器・石器が継続することも渡島半島部で北との結びつきを相対的に強くしたのではないだろうか。北海道七飯町峠下遺跡の天神山式土器の出土や、乙部町緑町２遺跡の黒曜石製石器など北海道央部との結びつきが強まるように見える。

その後、後期前葉になって、津軽海峡の両岸は十腰内文化圏を形成する。おそらくは青森県域で大木系の移住が途切れ、石器の小型化など大木系の石器（をはじめとする文化）の要素を消化した後に、両岸の交流は活発化したのであろう。磨製石斧をはじめとして物の交流は続くうえ、北海道南部の人々は自分たちの出自を本州側と意識し、青森県域の人も先祖が北海道にわたったという認識をもっ

ていたためであろう。

謝辞　本稿は、三内丸山遺跡特別研究推進業の平成25年度円筒土器文化総合研究　集落データベース第１回作成検討会での発表内容をもとにしたものである。筆者の発表に対する反応は一様ではなかったが、有益な助言を受けた。そして、資料見学を含め、たくさんの方からご協力・ご教示をうけたことに感謝いたします。

（注１）岩手県清田台遺跡では、ソフトハンマーによる押圧剝離で小形の無茎鏃が報告されている（角張2003ｂ）。三内丸山遺跡の中期末の小形石鏃は同様の特徴を持つ。

（注２）石倉１遺跡のような例を含めて、北海道式石冠に類似した磨石とする見解もある（小島1999）。小島の分類したⅢｂ類（７図の函館市大船遺跡の磨石が相当する）については同感であるが、溝状の部分を作り出す加工のあるⅡ・Ⅲａ類は調査例の増加により北海道内の出土例が散見されるようになった。

（注３）弘前市神原（２）遺跡第５号住居跡などの例をみると、半円状扁平打製石器は円筒上層ｅ式まで僅かに残る可能性があるが、円筒上層ｄ式以降の出土例は少なくなる。円筒上層ｄ・ｅ式の遺構・遺物が多数出土した青森市三内丸山（６）遺跡でも量的に少ない。そのうえ磨幅の幅が広いものや形が整っていないものなど、遺構共伴品では半円状扁平打製石器と積極的に認定しうるものがほとんどない。青森県内では、榎林式以降の出土例は思いうかばない。

（注４）半円状扁平打製石器がノダップⅡ式まで残ることは、羽賀（1995）がまとめており、大泰司統（2003）は中期後葉以降の出土例をまとめ後期前葉まで残存する可能性が高いとしている。後期前葉の遺跡例は、竪穴住居跡の炉石としての出土であるので、手近で得られた細長い礫としてし認識した可能性もある。しかし、少なくとも中期末まで残存すると考えてもよいのではないだろうか。半円状扁平打製石器の形態や石材の地域性、地域ごとの出現と消滅の時期等については、別稿で詳述したい。

（注５）八戸市周辺は、両極打法による在地石材の石器製作が旧石器時代の田向冷水遺跡の頃から盛んに行われていた。田向冷水遺跡では、搬入品の珪質頁岩製の石刃でさえも、両極打法で割り加工をする。両極打法が動作として体に刻み込まれている人を想定させるくらいである。仙台市下ノ原遺跡をみると碧玉などの在地石材・両極打法の石器と搬入品の珪質頁岩・石刃素材の石器に大別されるようにもみえるが、八戸市周辺では珪質頁岩の石器にも両極打法が使われるなど両者が融合する傾向にある。

引用参考文献

会田容弘1995「東北地方縄文時代晩期の石器の諸問題」『縄文時代晩期貝塚の研究２　中沢目貝塚Ⅱ』253～262
会田容弘2000「縄文時代の頁岩製石刃製作と流通」『山形考古』６－４
青森県埋蔵文化財調査センター　1992「土器のうつりかわりと時代の流れ」『青い森の縄文人とその社会　縄文時代中期・後期編』186頁
阿部昭典2012「縄文時代の斧状土製品の研究」１～15『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第４号
泉拓良・丸山雄二1992「近江の黎明」『古代を考える　近江』吉川弘文館
岩田安之2010「明戸遺跡における円筒下層b～d式土器に伴う石鏃」『明戸遺跡　高屋遺跡』182～183 青森県埋蔵

文化財調査報告書第488集
岩田安之2012「三内丸山遺跡のミニチュア土器に関する予察」『特別史跡三内丸山遺跡　年報―15―』16～25
岩手県立博物館2005「年表」『縄文北緯40°　前・中期の北東北』７頁
大場　正善2007　「日向洞窟遺跡西地区出土の頁岩製槍先形尖頭器における技術学的検討－東北地方における隆起線文土器段階の頁岩製槍先形尖頭器製作の身ぶりからみえるもの－」　『古代文化』　第58巻Ⅳ号　37～60
大泰司統2003「石器」『森町　濁川左岸遺跡　－Ｂ地区―』158～160北海道埋蔵文化財センター調査報告書第190集
岡田康博2002「ムラのうつりかわり」『青森県史　別編　三内丸山遺跡』51～57
岡村道雄2009「集団祭祀と集団の移動」『日本の美術第515号　縄文人の祈りの道具―その形と文様―』77頁
角張淳一2003ａ「竪穴住居跡出土の剥片石器」『和台遺跡』　700～714　飯野町教育委員会
角張淳一2003ｂ「清田台遺跡の石鏃の整理について」『清田台遺跡発掘調査報告書』284～301　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書　第412号
上條信彦2007「石皿と磨石」『縄文時代の考古学５－なりわい　食料生産の技術―　』88～101
北の縄文研究会2013『北の縄文『円筒土器文化の世界』―三内丸山遺跡からの視点―』
工藤竹久1977「北日本の石槍・石鏃について」『北奥古代文化』第９号　40～55
国木田大2012「東日本におけるトチノキ利用の変遷年代と環境変動」『祭祀儀礼と景観の考古学』475～480　國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
黒尾和久1993「層序と調査方法」『はらやま　上巻』21頁　調布市原山遺跡調査会
小島朋夏1999「北海道式石冠の分布とその意義」北海道考古学第35輯　47～60
小島孝修1999「縄文時代中期末の変革期―近江の事例から―」『考古学に学ぶ―遺構と遺物―』65～75
斉藤慶史2006「青森県内における剥片集中遺構について」『新田遺跡Ⅱ』166　青森県埋蔵文化財報告書第410集
斎藤岳2000「三内丸山遺跡の北海道式石冠について」『史跡三内丸山遺跡　年報－３－』45～52
斎藤岳2002「青森県における石器石材の研究について」『青森県考古学』第13号　63～81
齋藤岳2007「三内丸山遺跡の黒曜石の搬入形態について」『特別史跡三内丸山遺跡　年報―10―』８～41
坂本真弓2002「大木系土器の受容傾向―円筒土器と大木系土器の共伴事例から―」『研究紀要』第７号　29～39　青森県埋蔵文化財調査センター
寺崎康史1985「上泊３遺跡出土の石刃状剥片について」北海道埋蔵文化財センター『礼文島幌泊段丘の遺跡群　東上泊・上泊３・上泊４遺跡』408～412　財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書第19集
中森敏晴1996「“定形石皿”論―もうひとつの石皿―」『考古学雑渉　西野元先生退官記念論文集』109～123
沼宮内洋一郎1998「半円状扁平打製石器の機能面について」『桜峯（１）遺跡』193～197　青森市教育委員会
羽賀憲二1995「北海道式石冠」『縄文時代の研究７』140～148
松本建速1992「副葬・供献された石鏃の形態と土器型式からみた文化の接触と変化」『筑波大学先史・考古学研究』第３号53～79
松本建速2004「円筒土器文化圏における土器・土偶の移動に関する研究」『特別史跡三内丸山遺跡　年報―７―』56頁
松本建速2006『蝦夷の考古学』同成社
松本建速2013「東北北部にアイヌ語系地名を残したのは誰か」『考古学研究』60巻１号
森秀之1988「調査のまとめ」『深川市音江２遺跡』44頁　（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書第49集
山本暉久2013「東日本における縄文時代中期大規模環状集落の崩壊要因をめぐって」『縄文時代』第24号117～132
吉川耕太郎2013「東北地方における縄文石刃の製作と流通」『考古学ジャーナル』637号　16～20
六ヶ所村史編纂委員会1997『六ヶ所村史　上巻Ⅰ』　126頁　六ヶ所村史刊行委員会

縄文時代後期初頭土偶の論考
―野場土偶型式内の動態―

成　田　滋　彦（青森県埋蔵文化財調査センター）

はじめに

筆者は、土偶研究会会誌第８号の「縄文時代中期末葉～後期前葉土偶（北海道・東北地方）」（成田2011）において、縄文時代中期末葉～後期前葉の土偶変遷を記し、一本松土偶型式→野場土偶型式→有戸鳥井平土偶型式を提示した。その後、土偶型式内における地域内の様相を整理する必要があるのではと思い本稿で述べていきたい。これらの本土偶型式は最近の論考で縄文時代中期に位置づけられる発表などがあり、野場土偶型式を再検討し、新たに時期及び様相を記載するとともに、土偶の刺青及び土偶の分配についても記載する。また、野場土偶型式と有戸鳥井平土偶型式の間に小山田土偶型式の存在が確認されたので紹介するものである。

１　後期前半の研究史―青森県を中心として―

筆者は青森県土偶研究の先覚者として、江坂輝弥氏の業績及び足跡は大きかったとみている。1960年に江坂輝弥氏（江坂1960）は数少ない後期前葉の土偶の中で八戸市の赤坂遺跡をとりあげ『……頭部及び顔面部の製作が一段と進歩……』したとし、頭部形態の結髪表現とした。その30年後、最花遺跡の出土土偶（図１）を後期初頭とした。最花式の土器が後期初頭であるという理由は、土器型式において賛同できるものではない（注１）。磯崎正彦氏（磯崎1968）は、体部から二等辺三角形の特徴的な表現で円筒土器以来の伝統を引くものと考えている。更に永峯光一氏は『……東北地方北部から北海道南部にまたがる十腰内地域圏（注２）における初期の土偶は、逆三角形の小形半身像、あるいは菱形に近い大形半身像など前・中期以来の板状半身像の系列に属する省略形土偶が主体を占め……』（永峯1977）として中期の系統をひいた土偶であると記載した。この縄文時代中期伝統の影響に関しては、小野美代子氏（小野1984）も同様な意見である。また、岩手県の斎藤尚巳氏（斎藤1985）は、後期土偶をまとめて10項目をあげているが（注３）、後期前葉土偶の記載については、１の（後期前葉は首が前に突き出すという点）と10の（文様構成が乏しいという点）である。葛西励氏（葛西1985）は、十腰内Ⅰ式土偶の細分を試みＡ～Ｅの５段階と細分をおこなった。

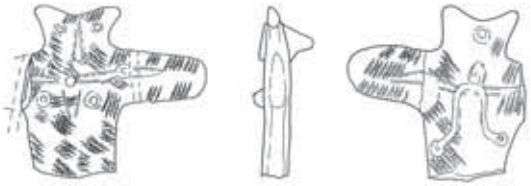

縮尺4：1

図１．最花遺跡出土土偶

最近の報告で注目されるのは、1994年に国立歴史民俗博物館と1999年に勉誠出版が刊行した「土偶とその情報論集」の二編が土偶研究に貢献している。1994年のものは、各県の土偶報告であり東北三県を概観すると、青森県では鈴木克彦氏が中・後期の板状土偶を整形の仕方で区別されるとしており、また一本松遺跡の土偶を後期の最も古い段階に位置付けている（鈴木1994）（注４）。岩手県では熊谷常正氏が『……後期前半は、１種類の土偶のみ作られ、個体差も小さいようである……』とし種類の

少なさを指摘している。(熊谷1994)(注５)、秋田県では十腰内Ⅰ式以前についてはふれていない（富樫・武藤1994)。

1999年の『土偶とその情報論集』では、北海道は長沼孝氏によると土偶の出土例が少なく、松前町の方形区画文及び戸井町の刺突文を施文した角偶がみられる程度である（長沼1999)。なお、長沼氏は北海道の土偶が墓との関連が強い点を1990年から強調している（長沼1990)。筆者は、後期の土偶を十腰内Ⅰ式以前と十腰内Ⅰ式に二分した（成田1999)。鈴木克彦氏は、中・後期の頭部の形態差を記するとともに、中・後期の土偶文様の「の」の字文様に注目し、文様の有無が中・後期の土偶差であると記載している(鈴木1999)。中村良幸氏(中村1999)は、東北地方北半の後期初頭・前葉において、土偶文様のメルクマールが存在する点や、立脚土偶は人体文の影響を受けた点、後期初頭でＡ・Ｂタイプの形態差を指摘するなど興味深い論考である。なお、立脚土偶については、藤沼邦彦氏（藤沼1997）は、東北地方南部の影響で手足がつくとした。

1　大平野　2　堀合工　3　長坂(1)　4　坂元(2)
5　安田(2)　6　蛍沢　7　千歳(13)　8　小山田(1)
9　赤坂　10　野場(5)　11　三内丸山(6)

図２．遺跡位置図

２　縄文時代後期の土器型式―青森県―

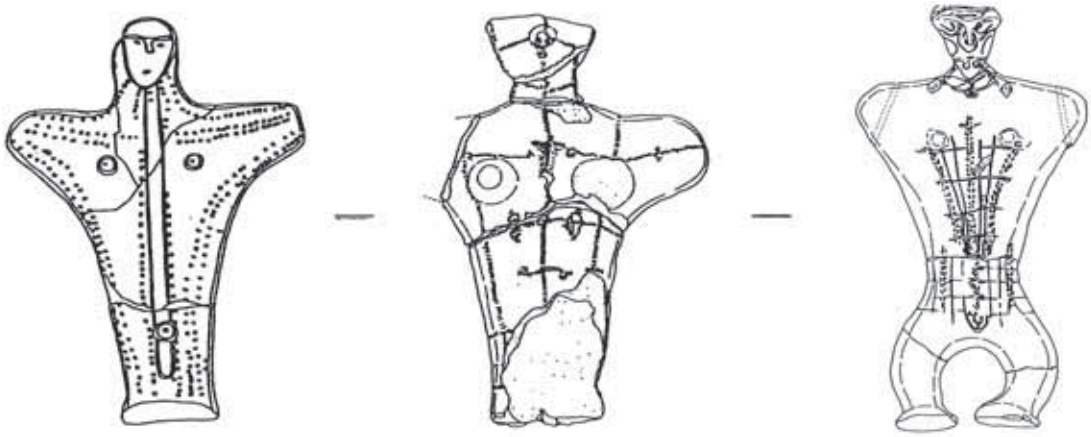
後期前葉の土偶を論考するには、土器型式を提示しなければならない。そのため、後期前葉の土器型式を青森県を中心として概観したい。

1968年に磯崎正彦氏が十腰内遺跡を調査し、十腰内Ⅰ群（注６）として発表した事と、1979年に葛西励氏が蛍沢第Ⅰ・第Ⅱ群とした蛍沢遺跡の二遺跡が土器型式のキーポイントの遺跡と考えられる。この蛍沢遺跡については、多くの研究者が十腰内遺跡の以前に位置付けられていると考えている。つまり、蛍沢遺跡→十腰内遺跡の土器変遷については大筋の変容はみられないものである。

一方、縄文時代中期末葉以降、つまり後期初頭期の土器型式については混沌としている（注７)。その理由の一つとしてあげられるのは、中期末葉のＪ字状文様を後期初頭期に位置付けし、関東地方の称名寺式と併行するという土器型式の考えが最近みられる。筆者は初頭期における岩手県中部の門前式は大木10式土器から変容した土器群であると認識しており、そのモチーフがみられる門前式に併行するものを牛ヶ沢遺跡土器群として位置づけたものである。つまり、牛ヶ沢遺跡→蛍沢遺跡→十腰内遺跡の変遷である。今回は、十腰内遺跡以前の土器群を前十腰内Ⅰ式として把握して土偶型式を検討することとする。

３　野場土偶型式とは（図３）

野場土偶型式について説明したい。筆者は土器型式に併行する形で土偶型式が存在しており、土器



一本松　野場　有戸鳥井平

図３．一本松～有戸鳥井平土偶型式

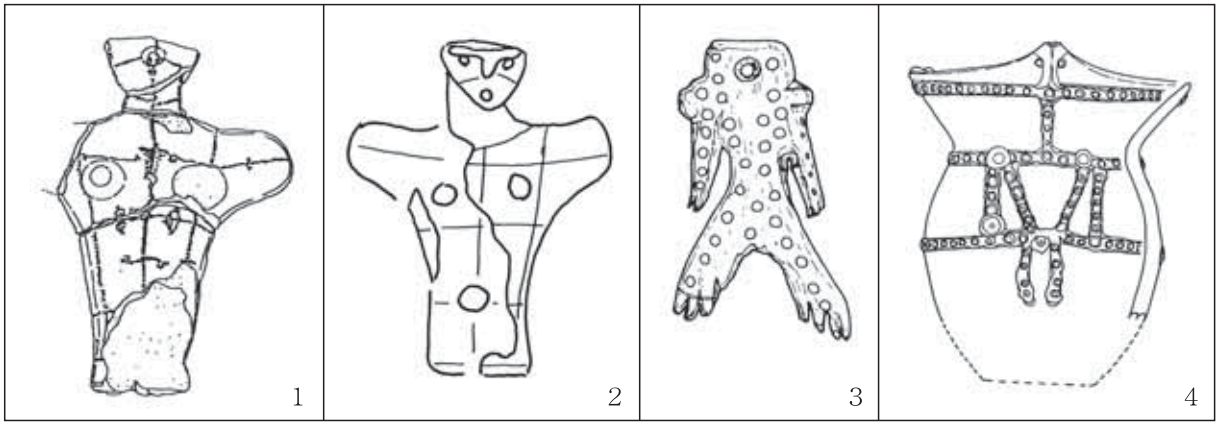
型式同様に土偶型式を設定している。設定にあたっては、頭部から脚部まで残存し土偶全体のプロポーションを把握できる資料、中期末葉では一本松土偶型式、前十腰内工式では青森県階上町の野場（５）遺跡（青森県1993）から出土した土偶が、全容を把握できる資料と理解し野場土偶型式（成田2011）を設定したものである。

最近、小笠原雅行氏（小笠原2012）は『北の縄文　円筒土器文化の世界』の土偶において野場（５）遺跡の土偶を大木10式に位置づけた。その位置づけた根拠が無いので困惑しているが、縄文時代中期末葉は一本松土偶型式であり、形態・文様等から野場土偶型式とは一線を引くものと考えられる。なお、最花式及び大木９式に土偶はないとしているが、顔が三角形で頭部形態が野場土偶型式と類似している土偶が八戸市松ヶ崎遺跡（八戸市1996）の竪穴住居跡から出土し、時期を大木９式としているが、（注８）秋田県鹿角市天戸森遺跡（鹿角市1984）及び青森市三内沢部遺跡（1978）等では、最花式の土器と共伴している事例等から、最花式土偶が存在しないという説は筆者は否定的である。以前この時期を天戸森土偶型式（成田2011）と設定している。

４　野場土偶型式の概要

形態には、脚部を有さないＡ型と脚部を有する立脚型のＢ型の二型が存在する。

Ａ型形態概要（１・２）



Ａ型a種　Ａ型b種　Ｂ型

図４．野場土偶型式形態図

―頭部―

頭部例は少ないが、顔面が逆三角形を呈し、前段階で後頭部が丸く張り出した形状が鋭利に突き出た形状に変化する。

―体部―

体部は両手を広げた十字形のａ種（図４－１）と手をあげた万歳形のｂ種がみられ、手をあげたｂ種（図４－２）は少ない。

―脚部―

下端部が末広を呈するものと先端部が丸みを有するものがみられる。末広タイプが多い。（図４－２）

―文様―

「すの子」状文様を全体に施文し、文様間に「の」字文様を施文するものが主体であり、刺突文は千歳（13）遺跡（図６－９）から出土しているが刺突文は客体的な文様であり、同期以降においては施文されていない。

Ｂ型形態概要（図４－３・４）

本型の立脚は未だ出土していないが、北海道戸井貝塚（戸井町1993）の骨偶（図４－３）及び千歳（13）遺跡（青森県1976）の人体文付土器（図４－４）など、立脚形態を表す表現であり立脚の存在は否定できない。

―文様―

全体に体の側縁部に沿って連続の円形刺突を施文している。

５　まとめ

―形態―

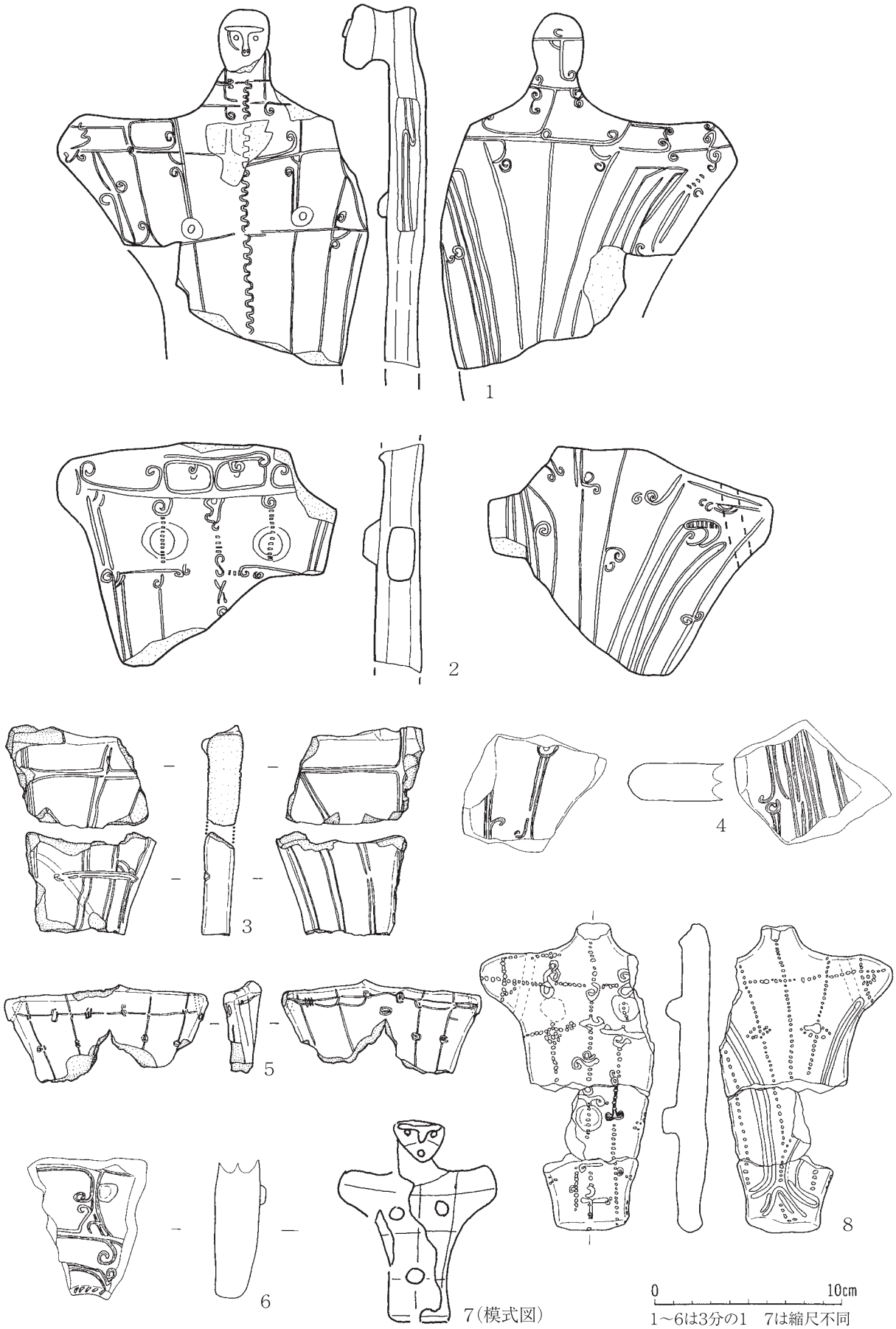
Ａ型の無脚とＢ型の立脚に関してはオタマジャクシ理論（注９）を言われているが、筆者は批判的である。その理由は、Ｂ型の立脚が中期段階で一本松土偶型式の餅ノ沢遺跡（青森県2000）出土の土偶に存在し、また、円筒上層期の段階の三内丸山遺跡にも存在している。円筒上層文化圏内において無脚の十字形が主体であったのに対して、立脚の土偶は数少なくないものの併存していたと考えたい。つまり、無脚→立脚に変化するという説は一般人に受け入れやすい理論であるが、遺跡の共伴関係から吟味すれば、無脚→立脚説には賛同できないものである。

―文様―

本段階の文様構成は、表裏面が同じ文様を施文するＡパターン（図５－５）と、表面が「すのこ」状文様で裏面が弧状文様のＢパターン（図６－３）の二種の文様パターンが存在し、Ｂパターンが主体を占める。前段階の一本松土偶型式では、Ａパターンが主体を占め、後期段階に至ってＡ・Ｂパターンに変容していくと考えられる。

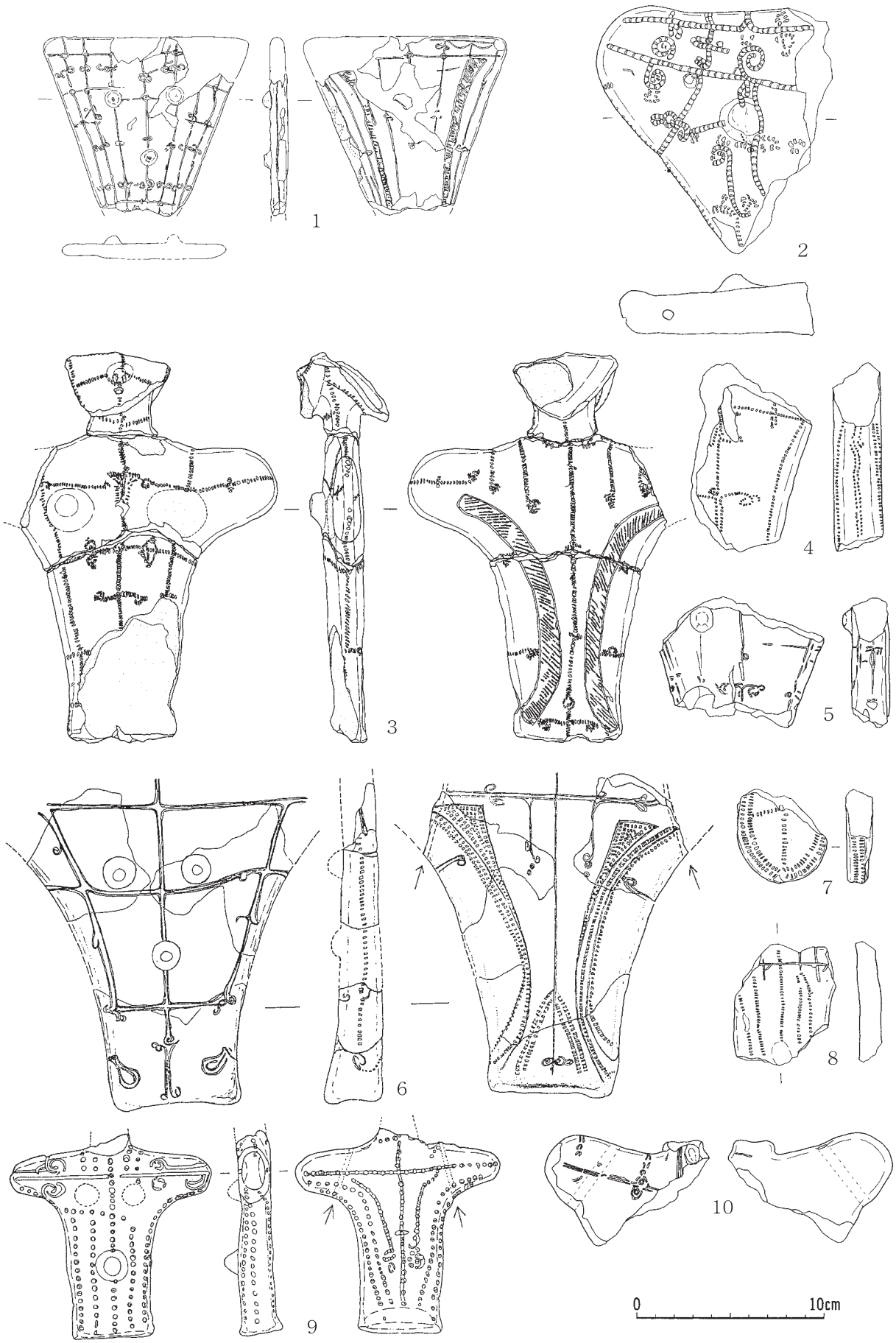
文様施文の縦・横位の「すの子」状文様は、前段階の連続刺突文をなぞると、横位・縦位文様となり、前段階の系統を受けついでいる。また「の」の字文様の前段階で集約した文様（図６－１）が、文様の中間及び起点に施文される。

なお、沈線におけるこの「すの子」状文様は、後期の段階では三段階の変遷を把握できるが、その問題については、新たに項目を設けて記載する。このように縦・横位に交差する文様を全面に施文す



1　大平野　　2　堀合工　　3・5　蛍沢　　4・6　長坂(1)　　7　赤坂　　8　三内丸山(6)

図５．野場土偶型式集成図（１）



1　安田(2)　　2・4・5・7・8・10　坂元(2)　　3　野場(5)　　6・9　千歳(13)

図6．野場土偶型式集成図（2）

る土偶は、当該地域の土偶におけるメルクマール文様である。

―個数と分割の問題―

野場土偶型式は出土個体数が少なかったが、最近の発掘調査で出土個体数が増加している。今回、青森県の調査事例から津軽地域の陸奥湾地域から多く出土している。つまり、前段階の中期において三内丸山遺跡を中心とした土偶多出地域と符合しており、土偶の出土する遺跡は中期段階から地域的に継承されていると考えたい。

青森市坂元（２）遺跡（青森県2011）及び鰺ヶ沢町大平野遺跡（鈴木1978）で大形土偶が存在する。土偶の形態が小形サイズ（手のひらに収まる大きさ）と、大形サイズ（手のひらに収まらないタイプ）の二種が存在する。筆者は2002年に「大形土偶の分割」という論考で記載したがその基本的な考え方は変わっておらず、手のひらサイズの一般の土偶は分割したのかは定かでないが、大形土偶に関しては意識的に分割されたと考えている。大形土偶分割技法が明確になるのは、縄文時代中期末葉の段階であり、円筒上層期では三内丸山遺跡土偶のように二分される大まかな分割で、そこから細部にわたる分割技法へ変化すると考えられるものである。

1　亀ヶ岡　　2　伊勢堂岱　　3　目廻岱B　　4　大湯

図７．刺青土偶分布図

―刺青の問題―

当該期において顔面部の出土は少ないが、（図７－１）十字状の刺突及び（図７－２）に弧状沈線、（図５－７）の「ハ」字状文が顔面にみられる。筆者は顔面に見られる目・鼻・口・まゆ・耳以外の身体的特徴以外の顔面に施文する文様については刺青ではないかと考えている。この刺青は広く民族誌的にみられるものである。刺青以外に火を用いた火傷痕や顔面に塗料を塗るなども考えられるが、現段階では縄文時代のミイラが存在していないため確認は出来ないものの、顔面表現は刺青の可能性が高いと考えたい。なお、江坂輝弥氏（江坂1960）と藤沼邦彦氏（藤沼1997）は土偶の刺青の存在は否定していない。

筆者は顔面に刺青という仮説を立てたが、刺青の方法に一定の規定が存在していたのではないかと思い縄文時代後期前葉の土偶を集落毎に検討することとした。その結果、図７－３のように、口を中心として横及び縦に刺青するものが南は米代川流域、北は津軽半島の北側と一定の広がりを持つこと

が判明した。この同じ文様を持つ集団が当時の婚姻関係によって生じたのかどうかは判断できないが、同一文様を施文する集団があるという現象は指摘できる。なお、刺青は縄文時代中期から始まり晩期に至って隆盛を迎え弥生時代の段階まで存在する。野場土偶型式では、３点の顔面のみであるが、大形土偶に多くみられるなど当該期の限定された人の刺青ではないかと思われるものである（注10）。

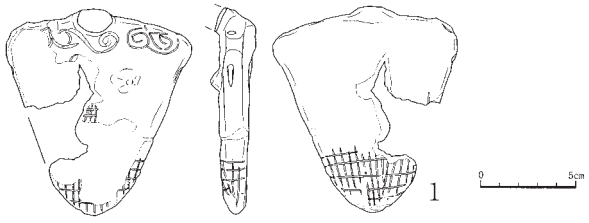


図８．砂子瀬遺跡出土土偶

―土偶の混和材（消えた土偶破片）―

野場土偶型式で、ほぼ完全な形で出土した土偶の多くは破片で出土している。谷口康浩氏（谷口1990）が指摘しているように　『…こわされた後にかなりの量の破片が持ち去られるか、別の地点に捨てられた可能性…』という考えが主流を占めている。それでは、谷口氏がいう他の地点となると、西目屋村内の遺跡を例にすると円筒上層期の集落が水上（２）遺跡のみであり、他といえば遺跡地から北方23㎞に位置するつがる市森田の石神遺跡（江坂1970）であり石神遺跡まで持ち運ばれたのだろうか。以前、筆者は土偶が移動するという考えで、縄文時代後期の近野遺跡と同一丘陵上の南側1.2㎞に位置している三内丸山（６）遺跡の出土土偶と比較し検討を試みた。結果は全く別物であり集落毎に製作され集落内で処理したという結果となった（成田2009）。なお、縄文時代晩期の馬淵川に位置している三戸町泉山遺跡と岩手県雨滝遺跡の土偶も検討したが別物であり、土偶が交流・分配されたのかは疑問を持っている。

しかし、岡田康博氏（岡田2012）は、三内丸山遺跡の土偶を８割は地元で２割は他地域から搬入されたと述べた（注11）。この根拠は三内丸山遺跡の土偶分析を前提としているが、土偶の胎土分析については、土偶自体が貴重な遺物のため分析が少ない。秋田県の縄文時代晩期虫内Ⅰ遺跡（西田1998）で西田泰明氏が1998年に分析を行い。青森県では松本建速氏（松本2004・2005）が縄文時代中期の三内丸山遺跡で21点・石神遺跡７点の胎土分析を行った。その結果は、虫内Ⅰ遺跡では他地域の存在を指摘し、三内丸山遺跡では21点の内４点が他地域であるとし石神遺跡は全て地元であった。この結果のみで判断すれば、土偶の一部は他地域から搬入したと考えられるが、三内丸山遺跡のグラフ内の値から外れる他地域の４点が全て小形土偶であるということを考えると個体差によって粘土を変える事で粘土選択の可能性も考えられる。以前、縄文時代晩期の板柳町土井Ⅰ号遺跡・五所川原市の五月女萢遺跡の土偶を実見した際に精製土偶と粗製土偶の間に混和材に差があると事を確認した。このことは、土偶を同一の粘土すべてで製作するのではなく、土偶によって粘土を選択している可能性もあると考えた。今後は、科学的分析との胎土分析と形態・文様・製作面からみた分析を組み合わせた研究が必要と考えられる。

それでは、こわれた破片はというと、新規の土偶を製作する際に砕いて土偶製作の混和材として用いていたのではと考えられる。混和材については土器内に土器破片を混和材として用いているという記述があった（西田2008）。このことは、土偶においても用いられた可能性が高いのではと思い、西目屋村砂子瀬遺跡の土偶（図８）を実見したときに、断面に長さ0.5㎝・幅0.1㎝の薄い粘土板があった。当該期の混和材は鉱物の石英及び細砂礫を用いるのが主体であるが形態が丸みをもつものであり、こ

の粘土板は薄いものの焼成を受けた際に焼きあがったものであると理解した。このことは、こわされた土偶は新規の土偶を製作する際に混和材として一部を砕き使用していたのではないかと考えられるが今後の課題としたい。

―野場土偶型式の問題　仮称小山田土偶型式―

前記で記載したが、野場土偶型式の次段階は有戸鳥井平土偶型式を設定したが、その中間に小山田土偶型式が存在すると考えられる。これらは、腕部を広げ脚部を有さない十字型土偶の形態であり、文様は、すの子状文様が変化し、横位沈線が短沈線に変化し、縦位方向に渦巻文様が連続して体部及び側縁部に施文される。このことは「の」の字文様の変化と考えられる。良好な資料は三内丸山（６）遺跡（青森県2001・2002）から出土しているが、完全な形を有する小山田遺跡（三沢市1992）から出土した土偶を用いて小山田土偶型式と設定する。従来は野場土偶型式の範疇でとらえてきたが、土器型式の共伴から分離できると考えた。

おわりに

今回、青森県の土偶を中心として野場土偶型式を再考した。特徴をまとめると、形態は無脚であり両手を広げた十字形で、縄文時代中期の円筒土器の伝統を引き継いだものである。つまり、前十腰内工式の野場土偶型式は、前段階の中期末葉期における一本松土偶型式の頭部の後頭部が丸みを有さなくなり変化した以外は、前段階の形態の伝統を引き継ぎ、他の文化圏の影響から生じたとは言い難い。また、野場土偶型式と有戸鳥井平土偶型式の間に十腰内Ⅰ式の古段階に併行する小山田土偶型式を設定した。このことから、土器型式と併行して土偶型式が存在し、土偶も土器と同様に型式毎に文様変化がみられると思われる。

なお、本文を記載するにあたって弘前市教育委員会び平川市教育委員会から土偶の実測（図５－１・２）の機会を得ました。記して感謝いたします。

注

1　2013年12月に慶応義塾大学所蔵で最花遺跡出土の土偶を実見できた。形態等から縄文時代中期後葉期の土偶であると確認した。1960年に江坂輝也氏が中期後葉期に位置づけたのに間違いないと思われる。

2　十腰内地域圏というのは、文化圏なのか土器分布圏なのかは定かでないが、一つの地域が存在していたと指摘したのが興味深い。

3　後期のまとめは、後期土偶の内容をあげているものの、後期全般のおおまかな内容である。

4　鈴木克彦氏は、縄文時代中・後期土偶に対して整形が区別されるという興味深い指摘をおこなったが、相違点に関しては論考していない。

5　熊谷常正氏の後期前半土偶の概要は重要であるが、とりあげた岩手県の遺跡が中部から南部の遺跡であり、北部地域にも適応できるかどうかは判断できない。

6　岩木山麗古代遺跡の発掘調査報告は、650ページにまとめた当時としては画期的な発掘報告である。後期前葉に関しては黄金山遺跡（渡辺1966）の黄金山式（土器１個でありこの型式名を使用するのはためらっている）また大曲遺跡（田村1966）の山田野Ａ～Ｃ７式（分類が全て土器型式）であり、黄金山式と山田野式の使用については慎重にならざるを得ない。

土偶型式
土器型式
小山田土偶型式
一本松
大木10式併行期
野場
前十腰内工式
小山田
十腰内工式(古)
有戸鳥井平
十腰内工式(新)

図９．小山田土偶型式図

7　東北地方北半の後期前葉の土器編年については葛西励氏・鈴木克彦氏・本間宏氏・榎本剛治氏・児玉大成氏・筆者の論考がある。今回の表題とは相違するので、各自の土器型式は提示しない。

8　縄文時代中期の遺構から出土したのは、わずか1点である。今後、中期の遺構に伴うとするのならば再検討するが、現段階では後世の混入と筆者は理解する。

9　オタマジャクシ同様に、手がでて足がでてカエルに変化するという過程を後期前葉の土偶にも相当するという考え方。

10　土偶の刺青に関しては、第11回の土偶研究会において「鯨面土偶」で発表する予定である。

12　８割という根拠は記載していないが、三内丸山遺跡の松本建速氏が分析した土偶21点の内４点（松本2004）であるという数値結果から述べていると思われる。

引用・参考文献

青森県教育委員会（1976）『千歳遺跡（13）発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第27集

青森県教育委員会（1978）『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集

青森県教育委員会（1993）『野場（５）遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第150集

青森県教育委員会（2000）『餅ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第278集

青森県教育委員会（2000）『三内丸山（６）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第279集

青森県教育委員会（2001）『安田（２）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第303集

青森県教育委員会（2001）『三内丸山遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第307集

青森県教育委員会（2002）『三内丸山遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第327集

青森県教育委員会（2011）『坂元（１）遺跡・坂本（２）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第505集

青森県教育委員会（2012）『砂子瀬遺跡Ⅱ-津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書-』青森県埋蔵文化財調査報告書第513集

青森市蛍沢遺跡発掘調査団（1979）『青森市蛍沢遺跡発掘調査報告書』

磯崎正彦（1968）「十腰内遺跡」『岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』弘前市教育委員会

江坂輝也（1960）「土偶」校倉書房

江坂輝也（1970）「石神遺跡」ニューサイエンス社

江坂輝弥（1990）「日本の土偶」六興出版

小笠原雅行（2012）「２土偶」『北の縄文『円筒土器文化の世界』～三内丸山遺跡からの視点』北の縄文研究会

岡田康博（2012）「２土偶」『北の縄文『円筒土器文化の世界』～三内丸山遺跡からの視点』北の縄文研究会

小野美代子（1984）「土偶の知識」東京美術

鹿角市教育委員会（1984）『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財資料26

葛西励（1985）「十腰内Ⅰ式土器文化の研究（１）」『撚糸文』第14号　青森山田高等学校考古学研究

熊谷常正（1992）「岩手県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集　国立歴史民俗博物館

黒石市教育委員会（1999）「長坂（１）遺跡」黒石市埋蔵文化財調査報告第15集

斎藤尚巳（1985）「北上川流域の土偶について―主な遺跡の出土から―」『日高見国』菊池啓治朗学兄還暦記念編集

鈴木克彦（1978）「青森県の土偶」故音喜多富寿先生追悼記念出版

鈴木克彦（1992）「青森県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集　国立歴史民俗博物館

鈴木克彦（1999a）「大木系（土器）文化の土偶の研究―土偶の研究（３）―」『土偶とその情報研究論集』（３）勉誠出版

鈴木克彦（1999b）「十腰内文化の土偶の研究―土偶の研究（４）―」『土偶とその情報研究論集』（３）勉誠出版

谷口康浩（1990）「土偶のこわれ方」『季刊考古学』第30号　雄山閣出版

田村誠一（1966）「大曲Ⅰ号遺跡」『岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』弘前市教育委員会

戸井町教育委員会（1993）「戸井貝塚Ⅲ」

中村良幸（1999）「東北地方北部の後期前半土偶―板状形からの脱却―」『土偶とその情報研究論集』（３）勉誠出版

長沼孝（1990）「北海道の土偶」『季刊考古学』30号　雄山閣出版

長沼孝（1999）「北海道の土偶」『土偶とその情報研究論集』（３）勉誠出版

永峯光一（1977）「呪的形象としての土偶」『日本原始美術大系』２　講談社

成田滋彦（1999）「目立たない土偶―第Ⅰ章」『土偶とその情報研究論集』（３）勉誠出版

成田滋彦（2002）「大形土偶の分割について」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古稀記念を祝う会

成田滋彦（2009）「青森市近野遺跡・野辺地町槻ノ木（１）遺跡の未報告土偶・土製品―副題土偶は分配されたのか―」『研究紀要』第14号　青森県埋蔵文化財調査センター

成田滋彦（2011）「北海道・東北北部における土偶型式―縄文時代中期後葉～末葉―」『研究紀要』第16号　青森県埋蔵文化財調査センター

成田滋彦（2011）「縄文時代中期末葉～後期前葉の土偶変遷―北海道・東北北部地域―」『土偶研究会』第８回　土偶研究会

西田泰民（1998）「第６節　虫内Ⅰ遺跡出土縄文土器・土製品の胎土」『虫内Ⅰ遺跡』秋田県文化財調査報告書第274集　秋田県教育委員会

西田泰民（2008）「混和材」『総覧　縄文土器』総覧縄文土器刊行会

八戸市教育委員会（1996）「松ヶ崎遺跡第２次Ｃ地点」八戸市埋蔵文化財調査報告第65集

藤沼邦彦（1997）「縄文の土偶」講談社

松本建速（2004）「三内丸山遺跡粘土採掘坑粘土と遺跡出土土器の成分分析」『特別史跡三内丸山遺跡年報』6　青森県教育委員会

松本建速（2005）「円筒土器文化圏における土器・土偶の移動に関する研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報』７　青森県教育委員会

三沢市教育委員会（1992）「小田内沼（１）・（４）遺跡」三沢市埋蔵文化財調査報告書第10集

渡辺兼庸（1966）「黄金山遺跡」『岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』弘前市教育委員会

考古資料に関する記憶の継承について

木　村　淳　一（青森市教育委員会）

1　はじめに

埋蔵文化財包蔵地として登録された遺跡については、文化財保護法に基づく手続によって、必要が生じた場合、記録保存を前提とした発掘調査が実施され、記録保存と貴重な文化財資料の新たな知見を得ることとなる。

調査に従事する埋蔵文化財担当職員について、青森県では体制整備途上段階から調査に従事した第一世代の人間がここ数年で退職を迎え、青森県の考古学を長く取りまとめてきた村越潔氏が2011年に亡くなるなど、一つの区切りを迎えた状態である。

筆者は、先生がご存命の2010年の冬に青森県考古学会の新幹線開業に関連した新幹線沿線の遺跡について発表する機会があり、発掘調査された遺跡の他に、沿線では埋蔵文化財包蔵地として登録されないまま、古い文献では記録が残されている事例をいくつか知り得た。

現在の埋蔵文化財保護業務に従事するあるいは大学などで勤務する研究者・担当者の出身地は、青森県外であるケースが多く、地元大学で学んだ学生がそのまま就職というケースは少ない。その意味で、元々の地理的環境や歴史的環境になじみのない人間が多いのも事実である。対象とする埋蔵文化財包蔵地に関し、地籍図等の情報を入手することがあるにせよ、検索や閲覧が難しい場合、古い郷土誌（史）料や口承の情報等に接する機会は極端に少ないことが想定される。また、近年編纂や刊行が進められている県史や市町村史などの作業のうち、考古資料については、現在の遺跡の発掘調査の結果で得られた知見を優先し、古い文献に記載された情報の洗い出しや資料のデータベース化の作業は行われていないのが現状である。

青森県考古学会が30周年を迎えた際、記念論集の刊行とともに『青森県考古学関係文献目録』として文献リストをまとめ刊行している（青森県考古学会2002）。まとめられた内容は、著者名・タイトル・刊行年等の情報については網羅されているが、記載内容についての詳細な情報は含まれておらず、デジタル化やデジタルデータの公開はなされていない。そのため検索ワードによる検索もできない状態である。さらに、タイトル中に特定のテーマに対するキーワードが含まれていない場合（本稿もある意味同様のケースであるが）、目録上で探し出すことすら難しい。場合によっては、現在の埋蔵文化財包蔵地では登録されていない貴重な情報であるのに、忘れ去られてその事実がないまま、新たな考古学的知見として考古資料が積み重なる事例すらある。世代が代わるとこのような目録があった情報でさえ、場合によっては失われてしまうことが想定される。ましてや、目録上に残らない文献などは、リスト化さえ難しい状況になることが予想される。

資料を取り扱った人の記憶は活字化されないと第三者が知りうる機会がなく、時間の経過とともに忘れ去られる。情報が継承されないままであるとその知り得た事実が闇に埋もれることとなる。

本稿では資料化されながらも時間の経過とともに忘れ去られた遺跡に関して二例とりあげ、考古資料の記憶の継承について検討することとする。

2　事例紹介

①青森市高田地区のマウンド（井上久1957「先史時代の青森市」『青森市の歴史』青森市教育委員会）

昭和32年青森市教育委員会刊行の市内の歴史に関する概説書P.10の「四、チャシ・館・城・古墳」という項目の中で「荒川・高田地区に古墳があるといわれがあったが、高田の俗称ゴリンモリから人骨と古銭が発見し、古銭は開元（二枚）・紹聖・洪武・永楽で戦国・桃山以後にこの地方では用いられたものであろう」という記述がみられ、不鮮明ながらもマウンドや人骨の写真と古銭の拓影図が掲載されている（図２・３）。この地点については埋蔵文化財保護の体制整備前に圃場整備が実施され、現在では平坦な土地に水田が広がり、農道や新幹線の路線が整備されている。江戸時代の紀行家菅江真澄が残した「すみか（栖家）の山」中で高田邑（村）に九十九森という土盛が田の面に並んでいるという話が掲載されている（図４参照）。

現在の高田地区の村落の位置など踏まえると、人骨の発見されたマウンドの地点より南側の場所で菅江真澄が記録した可能性は残るが、江戸時代の時点でも周辺にマウンドが築かれた風景が点在していたことは間違いないものと思われる。ただ、その範囲は圃場整備により破壊され不明である（註1）。

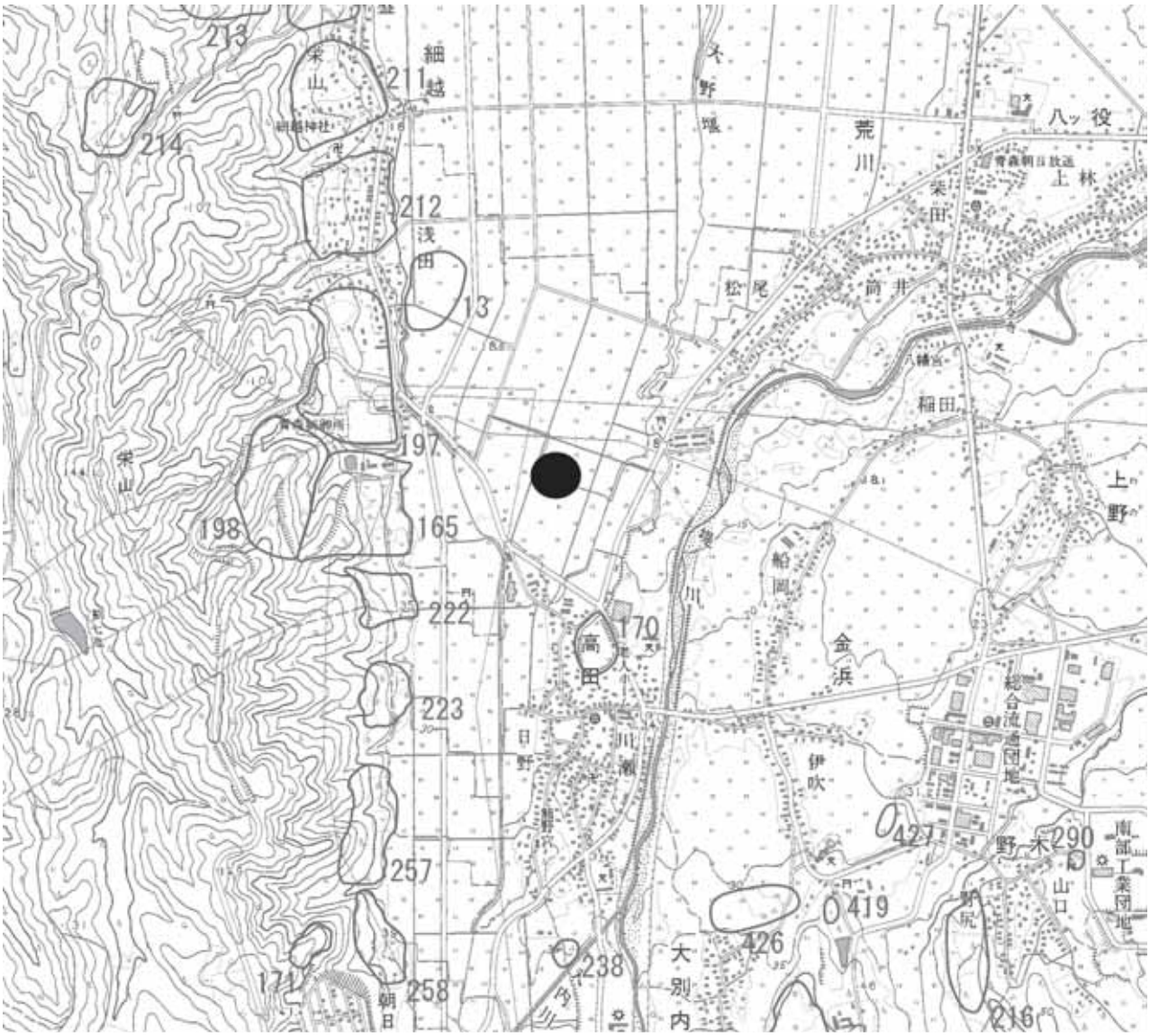


図１　青森市高田地区俗称ゴリンモリ位置図（●印）

井上 1957 参照、地図は青森県遺跡地図（http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/isekitizu.html）の「60 青森西部」に一部加工・加筆

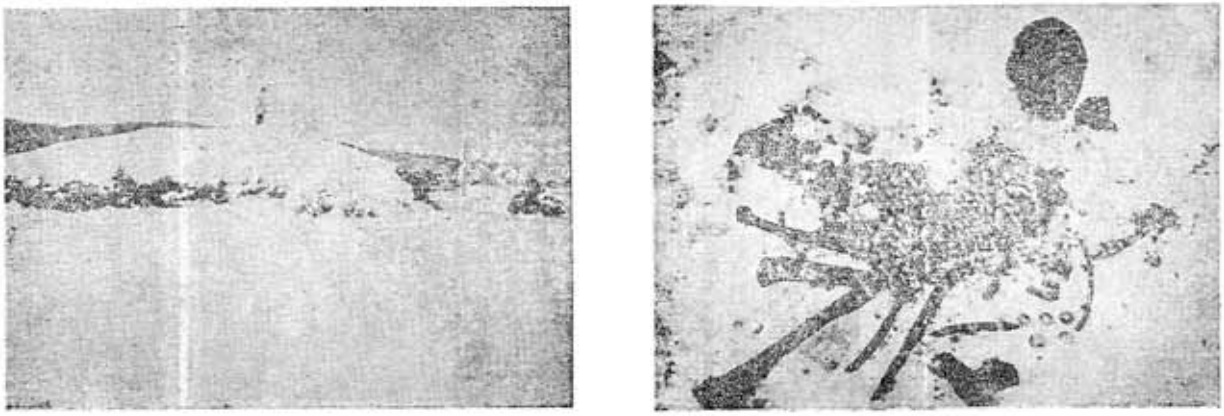
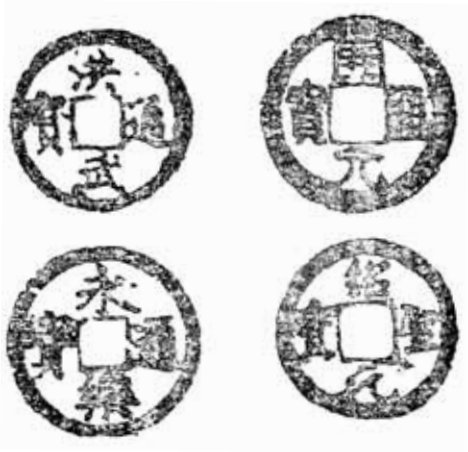


図２　青森市高田地区俗称ゴリンモリマウンド状況（左）・人骨検出状況（右）
井上 1957 から転載



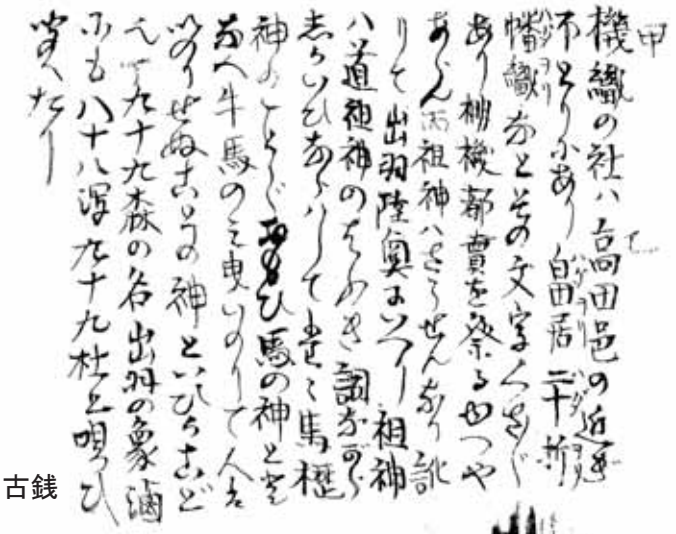


図３　青森市高田地区俗称ゴリンモリ出土古銭
井上 1957 から転載

図４　青森市高田地区の江戸時代のマウンドの状況　秋田県博物館菅江真澄資料センター 2002 から転載

②平内町に所在する塚（天間勝也・鈴木克彦1977「青森県平内町に所在する塚について（一）」『考古風土記』第二号）

昭和52年に刊行された『考古風土記』第二号に掲載された踏査記録と採集遺物の紹介。「通称白狐塚(註2)と呼ばれる塚は三角点設置の際に一部削平を受けたものと推定され、塚上には川原石や割石に覆われている。採集した遺物は９点で個体としては２～３個体になる中世陶器である」という記載がある。タイトル中に（一）という番号が付され、塚の実測図等は次号という記載がされているが、以降の号で刊行された形跡が見当たらない。

出土した資料について、平泉町八重樫忠郎氏のご教示によると渥美焼の可能性が指摘され、経塚の可能性が高いとのことであった。平成25年９月に筆者と報告者の天間氏、八重樫氏等の研究者と現地踏査をする機会を得た。踏査の結果、土盛があり、記述どおり川原石が散見された。出土資料も渥美焼以外に常滑焼、宮城県水沼窯の可能性のある資料も確認され、経塚の可能性が高く、北海道厚真町で出土した常滑焼の壺に対する陸奥湾沿岸の事例としての重要性が指摘される（註3)。

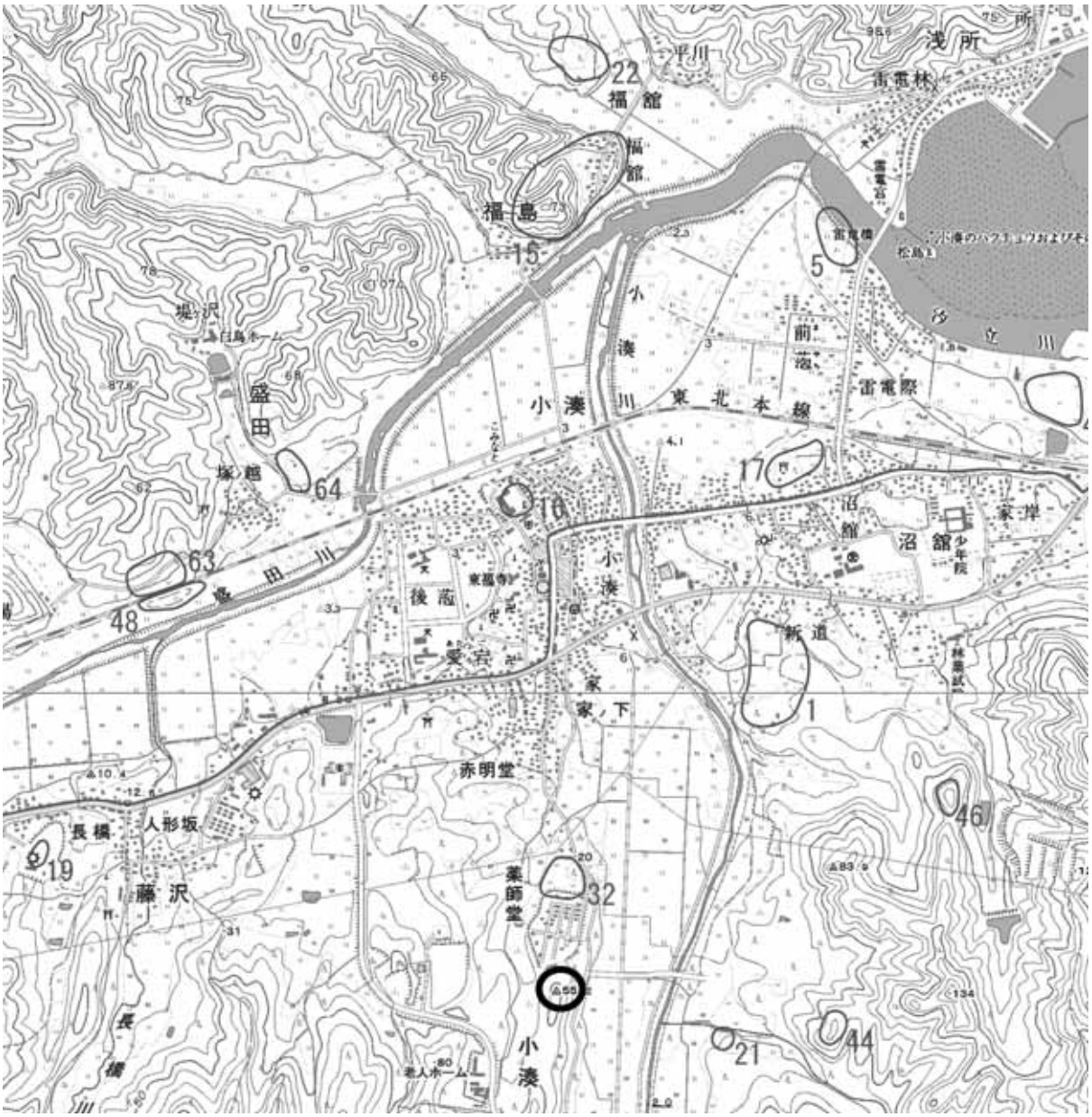


図５　平内町白狐塚位置図（〇印）

天間・鈴木 1977 参照、地図は青森県遺跡地図（http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/isekitizu.html）の「40 小湊」・「50 東岳」を合成し、一部加工・加筆

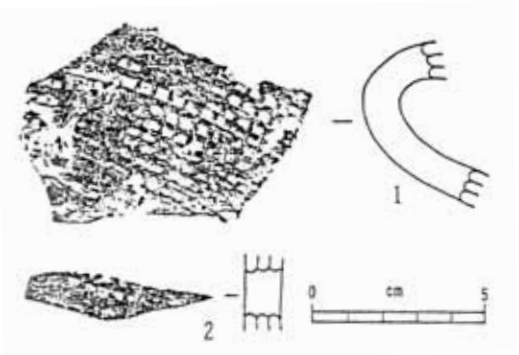


図６　平内町白狐塚出土陶器 天間・鈴木 1977 から転載

３　若干の検討

今回取り上げた二例は、古参の方からみると既知の話と済まされる話なのかもしれない。しかし、いずれも2013年10月１日現在、埋蔵文化財保護上の埋蔵文化財包蔵地としては登録されておらず、法律上では保護対象とはなり得ていない（註４）。このような事態の背景には登録対象から漏れた後、古い文献で、タイトルが特定の事例に対するものではないため、検索ワードがヒットせず、時間の経過とともに情報を元々知り得ている人以外は探し出すことが難しいことが考えられる。実際、近年の研究上で類例として触れられた事例は見当たらない。しかしながら、今回取り上げた情報はいずれも位置図が記載され、現在でも位置特定が可能な最低限の資料的情報が充足していた。その為、研究状況の進展に伴う再検討可能な状況下で、再び検討対象となる大変有益な考古学的資料情報となり得ている。このような情報は他にも存在し、再検討されうる資料化の作業は、自明ではあるが必要であろう。

世代の断絶や、職業としての埋蔵文化財包蔵地調査として取り扱う視座は、直面する遺跡と現在の研究状況に即した資料化に重きを置かれ、現在の調査水準で必要とされる情報の記録に努める作業が行われている。報告書や台帳に記載された保存情報以外に、調査を直接観察した人間の観察所見や聞き取りなどの関連情報も時間とともに風化し、忘れ去られる要因となる。記憶は時間とともにあやふやになり、都合良く歪められる要素もあり、情報の信憑性も薄れる可能性が高い。その意味で記録すべき時に必要な情報をしっかり記録することの大事さを思い知らされるものである。

御堂島正氏は、考古資料について「考古的脈絡に存在する人工品は、考古学的活動によって発見される。考古学的活動とは発掘調査、分布調査、伝世品の調査などで、文字通り埋没状態のものばかりとは限らない。しかし「発見」されるためにはいくつかの関門がある。すなわち、存在していても技術的に検出できないもの、調査者の意識に上っていないものや重要でないと判断されたものは排除される。換言すれば、調査者がもっている理論と方法によって資料が限定されるということができる。さらに意識的に調査されたものであってもサンプリングエラーのために脱落するものがでる。こうして発見されたものが考古資料として認識されることになる。考古資料は一般的には時間の経過とともに情報量が減じてゆくが、必ずしも時間の深さのみが情報量の多寡を左右するものではない。」と指摘している（御堂島1991，P.656下段10－20行目）。氏の指摘どおり、考古資料として取り扱われる資料は取り扱う人間の認知によって左右される情報があり、その程度は一様ではなく、捨象された事項がそれ相応に存在することは否めないと考える。

近年は、インターネットなどのネットワークによる大規模な情報共有が身近になり、古今の情報やその遷移過程を大量に蓄積し、容易にアクセス・検索することも可能となった。全てを事細かに残す必要性はないが、時間の経過とともに必ず訪れるであろう価値観の転換や解釈の変容に伴い、資料の再検討が可能な情報化や古いデータの更新に努めることは必要である。また、情報共有のためにも共通の様式の整備ということが必須となる。ただ、単なる機械的な情報は無味なものになり、その時々得られた知見に関するメモや雑記などのアナログ情報でも時として有効な情報となる可能性がある。

そのような意味で幅のある情報を残す必要がある。

４　おわりに

事例紹介中心の内容であったが、埋蔵文化財包蔵地に登録されていない遺跡の情報については、他にも多数存在する。このまま県内埋蔵文化財担当機関、県史・市町村史担当部局あるいは大学機関等で資料の洗い直しをしなければ膨大な新たな資料に埋もれ、遠く忘れ去られてしまうであろう。本県では埋蔵文化財資料のリポジトリに関する取り組みも遅れ（註５）、地元に根ざした考古学という点では形ばかりの取り組み以上の整備は成されていないようにも思える。古い時代の聞き取り調査の情報や、多くを残し第一線を退いた第一世代の記憶についての情報化など従前ではあまり取り組まれてこなかった情報のデータベース化についても今後検討すべき内容であると考える。埋蔵文化財の保護は単に保存・発掘調査・調査研究・啓蒙・普及という内容のみでなく、情報を次世代につなぐ意味での情報整理・情報化という作業も必須であり、直面する問題や体制面の差があるにせよ、意見交換や事例検討が必要であると考える。

註

註１：なお、筆者は高田地区を踏査したところ高田地区の集落内に現存する熊野宮内で塚状の盛り上がりを複数確認した。また、朝日山（４）遺跡（青森県遺跡台帳番号0201-222）の東側に松ノ木神社が残存し、その部分も塚状になっている。『すみかの山』には九十九森の記事中「機織の杜」という名が出ており、中に天御中主神、左にたなばたひめ、右にいざなぎの神を祀っているという記述があり、更にこの杜の西北側の丘にも稚産霊神保食神を祀った「祖神堂」とよぶ祠があるという記述がある。「機織の杜」相当する神社は全て現存しておらず、圃場整備で地形が改変されているが、『すみかの山』の記載内容から高田城址と考えられる「館・中野」より手前（北側）の地点であると考えられるため、高田城址より南側に所在する熊野宮周辺の話ではなく、　北側の細越地区側からの地点である俗称「ゴリンノモリ」～松ノ木神社周辺のエリア周辺にかけての話と想定される。昭和50年前後の青森県教育委員会刊行の発掘調査報告書（青森県教育委員会1974『近野遺跡（１）発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第12集の３頁掲載の位置図）で高田地区の高田城址の北西側には神社の記号が二ヶ所存在する。西側のものが松ノ木神社に相当し、高田城址寄りの神社が現存していないことが確認できる。

註２：天間・鈴木1977によると通称「白虎塚」とされているが、今回の踏査を契機に平内町教育委員会生涯学習課に確認していただいたところ寺島編（福地著）2009によると「白狐塚」が正式名称とのことで、埋蔵文化財包蔵地としても註４のとおり「白狐塚遺跡」で登録された。本稿でも白狐塚として取扱う。

註３：宮城県水沼窯製品の可能性は前弘前大学教授藤沼邦彦氏の鑑定による。また、北海道厚真町宇隆１遺跡から口縁部を打ち欠いた常滑壺が出土しており、12世紀第３四半期の資料とされている。http://www.tomamin.co.jp/2011t/t11030301.html等

註４：白狐塚については、踏査の結果を受け、県文化財保護課・平内町教育委員会生涯学習課に報告し、埋蔵文化財包蔵地［名称：白狐塚（びゃっこづか）遺跡青森県遺跡台帳番号301-067］として平成25年11月６日に登録された。青森市高田地区は圃場整備により破壊され、残念ながら包蔵地登録は難しい。

註５：そのような中、島根大学附属図書館が主導する全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクトは平成25年10月９日付け（青森県教委からの通知：平成25年10月21日付け）で、全国の都道府県・市町村単位での参加を呼びかける依頼を行った。青森市教育委員会ではこれまで市ホームページ上で部分的に公開していたが、平成25年10月24日付けで参加した。全国遺跡資料リポジトリ（広域版）http://rar.nii.ac.jp/上で公開されている。

引用参考文献

青森県考古学会2002『青森県考古学会３０周年記念青森県考古学関係文献目録』
秋田県立博物館菅江真澄資料センター2002『影印本　栖家の山（写本）』
井上久1957「先史時代の青森市」『青森市の歴史』青森市教育委員会pp.1-15
寺島満穂編（福地勤 著）2009『平内町の縄文時代』
天間勝也・鈴木克彦1977「青森県平内町に所在する塚について（一）」『考古風土記』第二号pp.66-67
福田友之 2008『私の考古学ノート－北の大地と遺跡と海にひかれて－』弘前大学教育学部考古学研究室ＯＢ会
御堂島正1991「考古資料の形成過程と自然現象」『古代探叢Ⅲ－早稲田大学考古学会創立40周年論集－』pp.651-668

末筆ながら本稿作成に際し次の方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である（順不同・敬称略）。

天間勝也・寺島満穂・遠藤正夫・工藤清泰・藤沼邦彦・八重樫忠郎・羽柴直人・小松隆史・岩田安之・業天唯正・蝦名淳次・佐々木悟

弘前市相馬地区出土の経石について

今　野　沙貴子（弘前市公園緑地課弘前城整備活用推進室）

1　はじめに

平成25年（2013）３月25日、弘前市大字五所字野沢41－１に弘前市相馬庁舎（愛称：相馬やすらぎ館）が開庁した。この庁舎は「弘前市相馬総合支所」・「中央公民館相馬館」・「御所温泉」の３つの機能を併せ持った複合施設であり、それまで中央公民館相馬館として利用されてきた施設（弘前市五所字野沢44－３所在）は長年の役目を終えることとなった。施設の玄関ロビーには考古遺物が展示されていたが（写真１）、閉鎖に伴い撤収する必要が生じたため、平成25年３月13日、弘前市教育委員会文化財保護課により撤収作業が行われた。遺物は現在､弘前市樋の口分庁舎の倉庫内に保管されている。

旧中央公民館相馬館におけるロビー展示は平成12～14年（2000～2002）頃、当時の相馬村教育委員会によって開始された。展示内容としては、旧相馬村（相馬地区）の湯口長根遺跡（平成10年試掘調査）・一ノ下り山遺跡（平成13年本発掘調査）出土品が大部分を占めていたが、それら以外にも相馬地区出土と思われる資料が少量ではあるが見受けられた。その中に、16点の経石が含まれている（写真２）。弘前市教育委員会では、展示を終了した平成25年３月時点において、本経石に関する情報を展示キャプションの記載内容以外に把握していなかったが（写真３）、その後の聞き取り調査により、本経石が相馬地区出土のものであるという確証を得ることができた。今までに弘前市内において把握されていた近世の経石出土地は国吉経塚遺跡（弘前市大字国吉字村元）・新法師経塚遺跡（弘前市大字新法師字泉）の２ヵ所だけであり、本経石は市内における新たな近世経塚出土品として注目される。

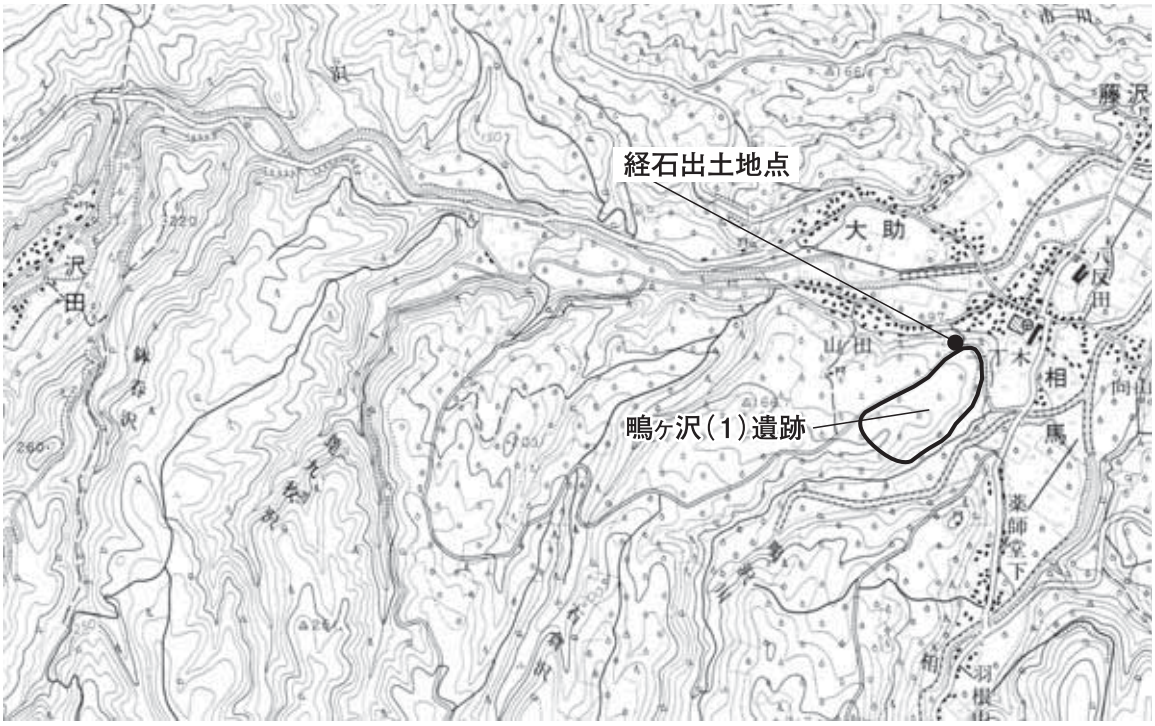


図１　経石出土地点位置図（国土地理院発行　陸奥田代　S=１／25,000）

本稿では、まずこれらの経石がいつ、どこで出土し、展示されるまでに至ったのかの経緯を整理する。この内容については、平成25年６月３日に行った弘前市相馬総合支所総務課・三上久光氏からの聞き取り調査が基礎となっている。次に、今後の調査・研究に資することを目的として、青森県内で確認されている類似の遺跡の集成を示す。今回集成をまとめるに当たっては、国立歴史民俗博物館「経塚データベース」作成のため、平成15年度に関根達人氏・藤田俊雄氏・森淳氏・中田書矢氏らを中心としてまとめられた青森県の成果を活用した。また、本稿の写真図版作成にあたっては、石郷岡幹人氏の協力を受けたことを明記しておく。

２　相馬地区の地理的・歴史的環境

弘前市相馬地区は、津軽平野の南西部に位置する。平成18年（2006）２月27日、弘前市・岩木町と合併するまでの自治体名は、「中津軽郡相馬村」であった。地区の87%以上を山林が占め、丘陵地帯にはりんご園が、地区中央部を流れる相馬川流域の平坦部には水田と集落が広がる農村地帯であり、およそ3,900人の人口を有している。

地区には多くの伝承が残っており、古くは大同２年（807）の坂上田村麻呂の東征伝説がある。田村麻呂に討たれた相馬山の蝦夷の首長を葬ったという石堂塚の伝説、田村麻呂が不動尊を安置したと言われる大助の愛宕神社跡をはじめ、後述する上皇宮も元々は田村麻呂の勧請と伝えられる。

持寄城跡は、鎌倉幕府の滅亡で津軽に逃れた北条氏の残党が最後に立てこもった場所とされる。相馬地区藤沢には、この持寄城跡の比定地があり、かつて主郭から炭化米が出土している。

相馬地区紙漉沢は、南北朝期の長慶天皇の終焉地と伝わり、昭和19年（1944）に京都に御陵があると決定されるまで、陵墓参考地とされていた。それに因み、集落西端の山裾に現在も残る上皇宮の祭神は、長慶天皇とされている（相馬村誌編集委員会1982a・月足1982・青森県高等学校地方史研究会2007）。

後述する経石出土地点は、近世の「相馬村」に該当する。「相馬村」は近世には開田されていたが、冷水や水害の繰り返しで米の作況が悪く、炭焼などの山仕事を組み込んだ生活形態が浸透していた。また、弘前城下より街道が通じており、「新撰陸奥国誌」によると明治元年（1868）には88の家数があったとされる（月足1982）。本稿で扱う経石は、この近世「相馬村」に住んでいた人々の信仰を現代に伝えている可能性がある。

３　経石出土から展示までの経緯

（１）経石発見の経緯

経石は昭和60年（1985）頃、現在の弘前市大字相馬字竜ヶ平・鴫ヶ沢付近から出土した（図１・写真４－６）。県営事業で「農免農道竜ヶ平線」を整備する際、道路拡幅のため山の斜面を削る工事中の出土という、偶然の発見であった。経石出土地点南側の斜面上には、鴫ヶ沢（１）遺跡が広がる。

工事業者より経石出土の連絡を受けた相馬村教育委員会は、直ちに現地へ向かい、経石出土状況を確認の上、カラーフィルムを用いて記録写真を撮影した。その際、経石の墨書は鮮明に残っていたということである。なお、この時の記録写真は、現在所在不明となっている。

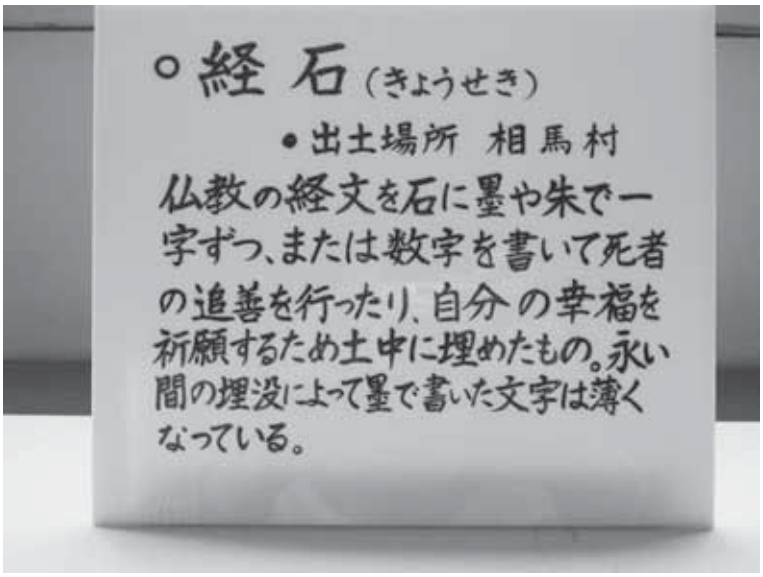
経石を検出した土層は、礫を含まない砂質土だったとのことで、地山層での検出と考えられる。道

［写真１］
旧中央公民館相馬館ロビー展示

ありし日の風景。展示遺物は既に撤収され、弘前市樋の口分庁舎倉庫内に保管されている。

［写真２］
経石展示状況

写真のとおり、１６点の経石が展示されていた。このうち、墨書を確認できるものは４点。



［写真３］
経石展示キャプション

旧相馬村内の出土であることが明記されている。

路拡幅のための掘削範囲は斜面部分のみであったとのことであるが、急斜面に経塚が造営されたとは考えにくい。本来は斜面上部の平坦面端部（鴫ヶ沢（１）遺跡の北端）に経塚が造られていたものの、最初の道路建設工事の時点で上部を壊されていたと考える方が自然であろう。壊されずに残っていた遺構の下部が、昭和60年頃の拡幅工事の際に発見されたものと推測される。

一般的に、近世の礫石経塚は「経碑」と呼ばれる石碑・石塔を伴うことが多いが、本遺跡においてはそれらしい石碑・石塔の存在は確認されていない。経石にまつわる伝承なども、地元には残っていないようである。

経石は工事業者によりすべて回収・洗浄され、後日相馬村教育委員会に届けられた。経石の量は膨大で、大型土のう袋（いわゆるトンパック）３つ分もあったという。この時、経石を確認した村教委担当者は、経石出土直後よりも墨書がだいぶ薄くなっていることに気付いたという。洗浄時に墨書が落ちてしまった可能性もあり、この種の遺物を取り扱う際には注意が必要であることを示唆するエピソードである。

回収された経石は、相馬村の民俗資料保管庫（現在の相馬ふれあい館）に収蔵されていたが、公民館に展示されていた16点を除き、現在では所在不明になっている。出土状況の記録写真や遺物の大部分を紛失している現状は残念であるが、本遺跡は相馬地区内で確認されている唯一の礫石経塚であり、その発見の意義は非常に大きいと言える。

（２）鴫ヶ沢（１）遺跡

鴫ヶ沢（１）遺跡は、標高120～150mの丘陵上に所在する。縄文時代（前期・後期）と平安時代の遺物を採集できる埋蔵文化財包蔵地であり、現況はりんご園・畑地となっている。包蔵地として新規発見・登録されたは昭和36年（1961）のことであり、『相馬村誌』では以下のように紹介されている。「鴫ヶ沢遺跡（１）（大字相馬字鴫ヶ沢）薬師長根と竜ヶ平の尾根の間　縄文後期（石皿、磨石）　沢に沿った道路改修の際多くの遺物を出している。」（相馬村誌編集委員会1982b）

また、それ以降の開発協議・立会・パトロール等の記録は、以下のとおりである。

平成18年（2006）　北林八洲晴調査員による遺跡分布調査において、縄文時代前期の土器片及び土師器を少量確認したことから、時代に縄文時代前期及び平安時代を追加する。

平成21年（2009）　土木工事等のための発掘に関する通知書（配水管布設替工事）。

上述のとおり、本稿で扱っている経石は本来、本遺跡の範囲内に埋納されていた可能性が高い。本遺跡に、近世の信仰遺跡としての性質を追加してもよいものと思われる。経石出土地点からは、北西方向に岩木山をきれいに望めるだけでなく、東側に弘前の盆地も見渡すことができた。近世の礫石経塚の立地条件を示す、良好な事例であろう。

（３）展示されていた経石

既述のように、旧中央公民館相馬館でのロビー展示は、平成12～14年（2000～2002）頃から開始された。湯口長根遺跡・一ノ下り山遺跡出土品以外の遺物は、すべて地元の方々が旧相馬村内で採集したものである。元々は相馬中学校図書室に教材として展示・保管されていたが、校舎新築の際、中学校から村教育委員会が譲り受けた。以降、より広く村民に出土品を公開するため、公民館での展示を

［写真４］
経石出土地点遠景（南東から）

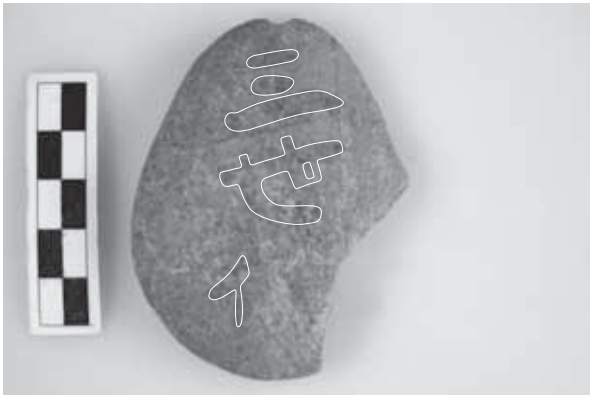
写真左側に写る小高い丘陵上が、鴫ヶ沢（１）遺跡。

［写真５］
経石出土地点近景（南から）

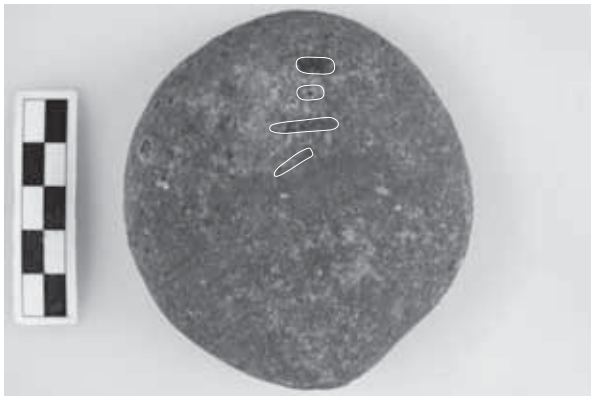
道路拡張のため、写真左側の法面を掘削した際に経石が出土している。経石出土地点からは、岩木山がよく見える。

［写真６］
経石出土地点近景（南西から）

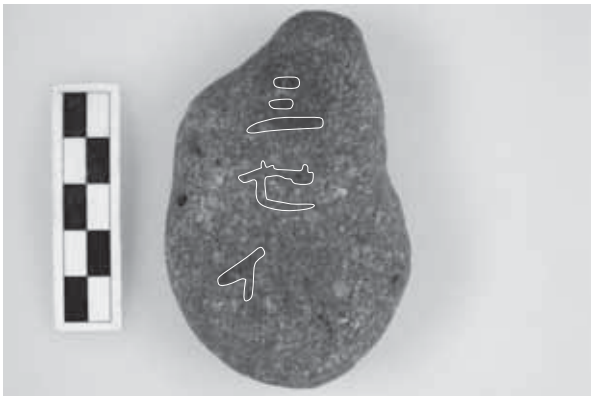
道路拡張のため、写真右側の法面を掘削した際に経石が出土している。法面の上には、鴫ヶ沢（１）遺跡が広がる。写真左側奥に写るのは、弘前の市街地。



［写真７］墨書のある経石①



［写真８］墨書のある経石②



［写真９］墨書のある経石③

［写真10］墨書のある経石④

始めたとされる。

展示されていた16点の経石は、民俗資料保管庫に収蔵していたトンパックの中から選び出してきたものと考えられるが、既に展示を担当した職員が退職しており、詳細は不明である。経石はすべて扁平な川原石であり、最も小さいもので長軸6.2×幅4.7×最大厚1.5㎝、大型のもので長軸11.6×幅8.4×最大厚3.1㎝、長軸12.6×幅5.5×最大厚2.7㎝ほどである。16点のうち、明確に墨書を確認できるものが４点、わずかに墨書らしき痕跡の残るものが１点、全く墨書を確認できないものが11点ある。以下に、墨書を確認できる４点について報告する。

【写真７】墨書：「三世□」。三世佛か？　法量：長軸7.2×幅5.6×最大厚1.2㎝。

【写真８】墨書：「三□」。法量：長軸8.1×幅7.5×最大厚2.6㎝。

【写真９】墨書：「三世□」。三世佛か？　法量：長軸7.9×幅5.1×最大厚1.5㎝。

【写真10】墨書：「三□」。三世か？　法量：長軸9.0×幅7.0×最大厚1.2㎝。

４点すべてにおいて、墨書は片面のみに確認できた。墨書の内容は、すべて「三」で始まる複数文字である。展示担当者が、意図的にそのような経石を選び出したのか、それとも回収した経石のすべての墨書が同じ内容であったのか、興味深いところである。

４　青森県の礫石経塚集成

最後に結びとして、青森県内で確認されている礫石経塚を示す（表１）。現時点で、津軽地方に34カ所、南部地方に55カ所を確認した。以下に凡例を記す。

（１）集成には、経石の出土が未確認の参考地も含んでいる。また、全国には廻国供養塔下に経石が埋納される事例も散見されることから（今野2010）、近世の廻国供養塔も集成に含めている。

（２）石碑銘文については、基本的に石碑正面のものを掲載した。正面銘文の他に側面・裏面の銘文も掲載した場合、あるいは銘文の一部を抜粋しているような場合には、「　」を付けて記してある。

（３）今回の集成における引用・参考文献については、紙面の都合上今回は割愛した。文献なども含めたより詳細な情報の公開は、次の機会に委ねることとしたい。

【引用・参考文献（青森県の礫石経塚一覧に用いた分は割愛）】

青森県高等学校地方史研究会2007『青森県の歴史散歩』株式会社山川出版社　pp．44－45

今野沙貴子2010「鹿角市長福寺経塚―埋納品のある近世廻国供養塔の一事例―」『秋田考古学』第54号 pp．61－68

今野沙貴子2013「鹿角市本光院の経塚」『秋田考古学』第57号　pp．71－78

相馬村誌編集委員会1982a「村のおいたち」『相馬村誌』相馬村　pp．3－5

相馬村誌編集委員会1982b「相馬村埋蔵文化財包蔵地」『相馬村誌』相馬村　pp．21－26

相馬村教育委員会1999『湯口長根遺跡』相馬村文化財調査報告書第１集

相馬村教育委員会2002『一ノ下り山遺跡』相馬村文化財調査報告書第２集

月足正朗1982「相馬村」『青森県の地名』株式会社平凡社　pp．450－454

表１　青森県の礫石経塚一覧(参考地含む)

(１)津軽地方

№	遺跡名または所在地	紀年銘・時期	石碑あるいは経石銘文	備考
1	新法師経塚遺跡 (弘前市大字新法師字泉)	近世		約４㎡の川原石の小丘。消滅後も、その西南を通る旧道で経石が拾えた。
2	国吉経塚遺跡 (弘前市大字国吉字村元)	近世		白山権現神社裏手の畑に、大量の一字一石経が埋没していたとされる。
3	鴫ヶ沢(1)遺跡 (弘前市大字相馬字鴫ヶ沢)	近世		1985年(昭和60)頃、道路拡幅工事の際に大量の経石が出土した。そのうちの16点は、現在弘前市教育委員会で管理されている。
4	山観経塚 (弘前市西茂森町２丁目)	嘉永3(1850)		曹洞宗観音山普門院境内に所在。願主は「観音講中19名」、勧進僧は「普門院　庵主　大然」。自然石の納経塔。
5	南貞庵 (弘前市大字高杉字山下)	寛政12(1800)	奉納大乗妙典六十六部 日本廻国	廻国供養塔。佐渡・宮浦の人が建立。
6	弘前市　東目屋地区			廻国供養塔。
7	巌鬼山 (弘前市)	近世		岡山県笠岡市・木山公二氏所蔵「大乗妙典納経帳」(元文３・1738)に、津軽郡の巌鬼山で納経している記録がある。「岩木山三所大権現本地仏、石頭山」。続いて、下北・恐山でも納経している。
8	荒神山遺跡第50・51マウンド (弘前市大字八幡字長沢)	16世紀		1968年(昭和43)試掘。一字一石経、政和通宝、元祐通宝が出土。中世墓である可能が高い。
9	弘前市大字紙漉沢字山越	宝暦7(1757)	奉納大乗妙典六十六部 日本廻國供養	廻国供養塔。
10	荒田遺跡 (平川市荒田字下駒田)			一字一石経が出土。
11	福田遺跡 (平川市広船福田)	中近世		一字一石経が出土。
12	京塚 (南津軽郡田舎館村)			『新撰陸奥国志』巻十五に記述あり。
13	西光院 (青森市浪岡大字北中野)		奉納大乗妙典六十六部 日本廻國	廻国供養塔。「津軽浪岡」の３名が建立。角柱型の石塔で、下部に蓮華台、上部に笠を持つ。
14	青森市浪岡女鹿沢	嘉永4(1851)	玉林明光居士廻国御同 行衆中	廻国供養塔。松枝の共同墓地に所在。「備前国出俗名寅吉」という人名あり。
15	浄土宗観音寺 (青森市久栗坂字浜田)	寛政10(1798)	日本回国供養塔	廻国供養塔。
16	青森市上野	享保17(1732)	奉納日本廻国六十六部 諸願成就皆令満足	廻国供養塔。墓地に所在。「奥州津軽上野村弥兵衛」という人名がある。
17	つがる市木造館岡			廻国供養塔。
18	納経塚 (青森市高田)	嘉永6(1853)	奉納観世音菩薩納経塚 右往還　左入内道	道の分岐点に所在。傍らに松もあり、道標の役割も果たしている。石碑背面に「野沢村領主新山久助」の名がある。伝説によると、この石碑はかつて旧豆坂道の地蔵堂傍にあったが、後に現在地に移された。納経塚になったのは現在地に移ってからで、津軽二十四番札所入内観音に関係するものとされる。
19	三内霊園(旧蓮華寺)元禄飢饉供養塔 (青森市三内霊園)	宝永4(1707)	「妙法蓮華経□餓死諸」「露満除熱得清涼」 「飢国来恩遇大王□」	元々は、日蓮宗廣布山蓮華寺墓地内にあった。左側面に「□全部金文一石一字書写之奉納斯墳墓」という刻字あり。施主は「豊田宗治」、勧進僧は蓮華寺８世日考。豊田氏は有力商家で、幕末には蓮華寺総代を務めている。
20	法峠寺経塚 (黒石市高館字甲高原)	近世	奉書　写一字一石　妙 経全部納	
21	毛内墓地 (黒石市　川岸地区)	明治28(1895)	妙経全部　一字一石塔	
22	竹鼻の廻国納経塔 (黒石市大字竹鼻)	正徳4(1714)	奉納中供養六十六部	竹鼻八幡宮に所在。竹鼻村の乗田安兵衛夫妻が建立。関東地方の９名の名前も刻まれている。
23	西馬場尻共同墓地天明飢饉供養塔 (黒石市西馬場尻字稲村)	文化3(1806)	「凶歳餓死疫癘死亡」 「奉納大乗妙典日本廻国」	共同墓地内に所在。石塔は自然石で、廻国供養を示す銘文は右側面にある。飢饉供養と廻国供養を兼ねた事例。飢饉供養塔の造立者は「種市久六」。廻国供養には、「信州佐久郡入沢村」の「行者　大助」が関係している。
24	日光院墓地前天明飢饉供養塔 (東津軽郡平内町小湊字赤明堂)	天明7(1787)	「奉書写大乗妙典全部 一字一石供養塔」「為 餓死并日本国中有縁無 縁」「三界万霊草木国 土悉皆成佛」	日光院墓地前、旧奥州街道沿いに所在。勧進僧は、「東福十一代」(曹洞宗東方山東福寺十一代住職)。
25	曹洞宗正法院 (東津軽郡蓬田村阿弥陀川)	安永6(1777)	奉納大乗妙典日本廻国 供養塔	廻国供養塔。「白岩蓮池大姉　願主蓬田村武井・・・」という人名がある。
26	川崎遺跡 (西津軽郡鰺ヶ沢町館前町)	近世？		独立丘陵上に立地。「姫子塚」と呼ばれる。一字一石経が出土。
27	無量庵経塚 (西津軽郡鰺ヶ沢町田中町)	享保年間 (1716-36)	大乗妙典一字一石禮三 我等与衆生智共成佛道	曹洞宗通幻派無量庵境内の墓地に所在。
28	宝泉寺経塚 (西津軽郡深浦町岡町)	明和4-天明8 (1767-88)		曹洞宗寺院・宝泉寺境内に所在。約７万点の経石が出土した。願主は、深浦の大髙杏因定司。
29	経の松経塚 (西津軽郡深浦町影之町)			クロマツの大樹を「経の松」と呼んでいる。
30	甲子塚 (北津軽郡中泊町大字中里字 亀山)	享保11(1726)	「一天四海皆帰命奉 書」「薄市弘法寺五世」	1956年(昭和31)発見。弘法寺境内より、経石6,996点と寛永通宝27点、元豊通宝１点出土。左の銘文は、出土した経石に墨書されていたもの。
31	中里薬師堂経塚 (北津軽郡中泊町中里字平山)			中里薬師堂近くの円墳状の盛土から経石出土。薬師堂の創建は、貞享元年(1684)以前と考えられる。
32	弘誓寺経塚 (北津軽郡中泊町尾別)			天台宗胡桃谷山解脱院弘誓寺境内に所在。数点の経石と、それが納められていた外容器を弘誓寺で所蔵している。
33	香取神社 (五所川原市持子沢字笠野前)	天保12(1841)	奉納大乗妙典	廻国供養塔。「石寄進宮館村対馬庄左エ門　願主行者弥五右衛門　世話人山田惣次郎」の人名あり。
34	曹洞宗長円寺境内 (五所川原市飯詰字福泉)		奉納大乗妙典六十六部 日本廻・・・	廻国供養塔。

(２)南部地方

№	遺跡名または所在地	紀年銘・時期	石碑銘文	備考
1	櫛引八幡宮経塚 (八戸市八幡字八幡丁)	文久2(1862)	奉納　大乗妙典六十六部　中供養	廻国供養塔。櫛引八幡宮西参道三叉路(櫛引八幡宮への参道入口)に所在。
2	延命山善照院 (八戸市田面木)		奉納　大乗妙典　天下和順日月清明　日本六十六部回国塔	廻国供養塔。自然石の供養塔。
3	光龍寺 (八戸市大字田面木)		奉納　大乗妙典　天下和順日月清明　日本六十六部回国塔	廻国供養塔。自然石の供養塔。
4	上田面木の石碑群 (八戸市田面木字上田面木)		六十六部日本回国	廻国供養塔。文化8年(1811)の庚申塔、安政3年(1856)の金毘羅大権現碑などとともに保存されている。
5	対泉院経塚 (八戸市新井田字寺ノ上)		○南無阿弥陀仏　日本廻国供養塚	廻国供養塔。貴福山対泉院参道脇に所在。「宿本営所松橋六兵衛阿林相関居士　尾州名古屋願主和吉」という人名が刻されている。
6	無縁塚 (八戸市根城４丁目)		六十六部供養塔	「無縁塚」「雨走の仕置場」などと呼ばれる刑場跡に所在。寛延3年(1750)の飢饉餓死者供養塔等、石碑数基とともに保存されている。
7	笹ノ沢頭経塚遺跡 (八戸市坂牛字笹ノ沢頭)	近世		明瞭にマウンドがあるわけではなく、その他の施設の有無も不明。地面を１mほど掘り下げた際、偶然発見。一字一石経56点、川原石多数、寛永通宝１点が出土している。櫛引八幡宮の前にあった六坊の僧が、写経した石をこの場所に埋めたという伝説がある。
8	石動木経塚 (八戸市新井田字石動木)	文化15(1818)	奉書写宝篋印陀羅尼経卅三巻大般若理趣分経壱百巻大乗妙法蓮経壱部石経供養塔	石動神社前に所在。世話人は「石動村傳治良」。願主として「石動村中」「松山村中」「重地村中」「後庵村中」「両門前」らが、「諸人馬」を「寄進」している。
9	南宗寺経塚１号 (八戸市長者１丁目)	宝永4(1707)		八戸藩士・接待宗碩が68歳の時に建立した経塚。月渓山南宗寺には宗碩の墓所があり、経塚はその裏にある。経碑には、宝永4年(1707)に前妻を弔うため墓に経石を納めたこと、本経碑を宗碩自身と前妻の墓碑として享保4年(1719)に建てたこと等が記されている。
10	南宗寺経塚２号 (八戸市長者１丁目)	天保6(1835)	寶楼閣陀羅尼経一字一石供養塔	月渓山南宗寺境内に所在。
11	南宗寺経塚３号 (八戸市長者１丁目)	明治4(1871)	大乗妙典一石一字供養塔	月渓山南宗寺境内に所在。
12	根城跡SX40方形周溝 (八戸市大字根城字根城)	享保3(1718)	「大乗法華経一葉一字」「卅八之其一」	接待宗碩79歳の時の経塚。根城本丸に、木の葉に写経した一葉一字の経塚を建立。本丸西端に「一葉一字」の文字がある石塔所在。根城廃城後、明治初年(1868)まで「根城八幡宮」が位置した地点でもある。
13	廣澤寺経塚 (青森県八戸市類家２丁目)	享保3(1718)	「大乗妙典一字一石」「卅九之其一」	接待宗碩79歳の時、亡くなる前年に建立した経塚。本経塚が、現存する宗碩の経塚の中で最新のものである。銘文の「卅九之其一」は、宗碩が造営した経塚の総数(39基)を表している可能性がある。月峯山廣澤寺山門前に所在。
14	櫛引遺跡 (八戸市櫛引)			櫛引城跡北側の今館に石塔が建てられており、経塚といわれている。
15	禅源寺経塚１号 (八戸市長者１丁目)	享保18(1733)	「○大乗妙典一石一字」「三界萬霊一切含識」	臥龍山禅源寺参道脇に所在。施主は「宗七兵衛尉」、勧進僧は「臥龍山禅源寺現住大江」。
16	禅源寺経塚２号 (八戸市長者１丁目)	延享元(1744)	「金剛般若波羅多密経」「一石一字漸寫依功」	臥龍山禅源寺参道脇に所在。願主は「大江」。
17	心月院経塚１号 (八戸市吹上１丁目)	寛政4(1792)	大乗妙典一石一字三禮	松峯山心月院の墓地内に所在。石塔の左側面に「為惠視院殿香洲智蓮大姉」とあり、死者の供養のために建立されたものと分かる。
18	心月院経塚２号 (八戸市吹上１丁目)	天保6(1835)	寶楼閣陀羅尼経一字一石供養塔	松峯山心月院の山門脇に所在。
19	涼雲寺経塚 (八戸市坂牛字坂牛)	寛保元(1741)	金剛般若波羅密多経一軸　一石一字□□□□功　□量□□□共圓遍	福聚山涼雲寺境内に所在。願主は「八戸十三日町与五兵衛　山田氏権七郎」、勧進僧は「臥龍山禅源寺現住大江東義」。
20	十和田市大字深持字森・柳原	文政13(1830)	日本廻國納経供養塔	四国・薬王寺の大空が、全国を巡礼後に十和田板ノ沢集落に住み、廻国供養塔を建立した。巡礼は文政3～12年(1820-29)に行われ、その際の「廻国納経帳」を供養塔に納めている。
21	岩井永寿院経塚 (十和田市滝沢字館)	近世		岩井永寿院跡の宅地より、一字一石経が出土。現在は、隣接する法性寺境内に移設されている。
22	下平(１)遺跡 (十和田市赤沼字下平)	近世		新山神社境内の一字一石経塚。上に赤沼備中の墓石がある。
23	泉田経塚 (十和田市伝法寺泉田)	近世		宅地造成の際発見。一字一石経。
24	三日市経塚 (十和田市沢田字三日市)	近世		國明観音堂境内に所在。
25	陽広寺経塚 (三戸郡南部町剣吉上町)	正徳元(1711)	大乗妙典一字一石	石田山陽広寺本堂脇に所在。接待宗碩72歳の時の経塚。新しい戒名をもらった江戸出身の太兵衛のために、記念として造営された。
26	永福寺経塚 (三戸郡南部町沖田面字早稲田)	中世？		南部氏の居館跡である聖寿寺館跡に隣接して所在。礫を積み上げた塚で、経塚と伝えられている。
27	下モ平経塚 (三戸郡南部町沖田面字下モ平)			かつて畑の中から経石が多数出土した。
28	法光寺経塚１号 (三戸郡南部町法光寺字法光寺)	寛保元(1741)	「六道□化地蔵□」「一字一石　大乗金剛般若経　書寫轉讀」	白華山法光寺の参道脇に所在。
29	法光寺経塚２号 (三戸郡南部町法光寺字法光寺)	元治2(1865)	大乗妙典六十六部供養塔	廻国供養塔。白華山法光寺境内に所在。「願主　常之助　文□□」「世話人　長郎」「後見　長吉」という人名あり。

30	小舟渡海岸の経塚１号 (三戸郡階上町大字道仏字鹿倉)	宝永3(1706)	大乗妙典一石一字宗碩 居士書安置此	接待宗碩67歳の時の経塚。現在確認できる宗碩の経塚の中で最古のもの。海の災害供養・死者供養のために造営。また、本経塚の向かいに小舟渡集落共同墓地があり、そこに眠る人々を供養する意図も考えられる。経石の出土確認。
31	小舟渡海岸の経塚２号 (三戸郡階上町大字道仏字鹿倉)	宝永3(1706)	○大乗妙典一石一字関 叟宗碩謹而成之	接待宗碩67歳の時の経塚。現在確認できる宗碩の経塚の中で最古のもの。
32	寺下の経塚 (三戸郡階上町大字赤保内字寺下)	宝永7(1710)	○大乗妙典一石一字接 待□□宗碩成之	寺下潮山神社境内脇に所在。接待宗碩71歳の時の経塚。元々は寺下観音堂があった場所。経石の出土が確認されている。
33	大蛇海岸の経塚 (三戸郡階上町大字道仏字大蛇)	正徳3(1713)	大乗妙典一石一字	接待宗碩74歳の時の経塚。海難事故を防ぐため、経典を海底に安置し経塚を造営、千拝した。
34	法師窪 (三戸郡階上町道仏)		○大乗妙典一葉一字関 叟宗碩居士□　安置處 寶紙或石共□十二□□ □□	接待宗碩の経塚。石碑が土中に埋まっているため、未確認の銘文がある。かつては石碑の半分くらいが土中に埋まっており、それが掘り出されて現在地に置かれた経緯がある。木村家が石碑を管理している。
35	観音平の石碑群 (三戸郡階上町)		「奉漸妙法蓮華経　一 字一石」「功誉寿徳」	赤石大明神境内に所在。
36	三戸郡三戸町斗内字田屋ノ下	天保3(1832)	六十六部日本回国供養 塔	「出羽三山」「十和田山」「金毘羅山」「田方山□」等の石碑とともに保存されている。斗内の村端、旧鹿角街道沿いに所在。
37	上北郡六ヶ所村平沼	文政7(1824)	大乗妙典廻国供養	廻国供養塔。肥後国芦北郡の中村おつるが建立。
38	山屋(１)遺跡 (上北郡七戸町字山屋)	近世		小石を敷きつめた上に碑が建てられている。碑文は判読できない。敷石は、「×」印を刻した扁平な小石。
39	山館遺跡 (上北郡七戸町字山館)	近世		一字一石経の経塚。1977年(昭和52)、和田川防災ダム建設に伴い、町教育委員会が発掘調査。経塚の半分程度は調査前に既に失われていたが、調査の結果5,300点以上の経石が出土したとされる。ただ、出土した経石の大部分は無文礫だった。経石とともに寛永通宝(新寛永)が出土している。
40	青岩寺境内石塔群 (上北郡七戸町字町)	安永3(1774)	日本回国納経供養塔	廻国供養塔。「願主愚然敬白」「為観有禅定門　妙幽禅定門　雪桂禅定門」という、人名に関わる銘文がある。
41	犬落瀬遺跡 (上北郡六戸町大字犬落瀬字若宮)	近世		曹洞宗寺院・光昌寺の本堂裏に所在。一字一石経が出土。光昌寺の創建は万治元年(1658)。
42	福聚院経塚 (上北郡五戸町上大町)	近世？		戦時中、観音堂(西沢山福聚院)境内で防空壕を掘った際に、多数の経石が出土した。その後、経石は再び埋め戻された。
43	大安寺経塚１号経塚 (むつ市大畑町本町)	万治3(1660)		曹洞宗大安寺のある丘陵、薬師堂の東斜面で発見。２基の経塚のうちの１基。急傾斜地崩壊防止工事に伴い、1984年(昭和59)に発掘調査。中型の甕に経石と寛永通宝が納められていた。マウンドの有無は不明。
44	大安寺経塚２号経塚 (むつ市大畑町本町)	寛文9(1669)		曹洞宗大安寺のある丘陵、薬師堂の東斜面で発見。２基の経塚のうちの１基。急傾斜地崩壊防止工事に伴い、1984年(昭和59)に発掘調査。土坑に経石が直接埋納されていた。マウンドの有無は不明。
45	本門寺天明飢饉供養塔 (むつ市大畑町字東町)	寛政10(1798)	南無妙法連華経　一石 一字餓死供養塔	本門寺山門右側に所在。日省和尚が、餓死者の供養並びに開山の百年忌を営むために建立。元々は、大畑町野頃にあった。現在地には、明治時代に移転。
46	孫次郎間糖森の共同墓地 (むつ市大畑町)	文化14(1817)	奉巡拝三部経一字一石	三国屋利左ェ門他４名の名が刻まれている。
47	孫次郎間糖森の共同墓地 (むつ市大畑町)	文政3(1820)	法華経一字一石供養塔	願主三国屋利左ェ門、□井誉清国比丘。亡くなった人々や先祖の供養のために建立されたものと考えられる。
48	黒森山 (むつ市大畑町)	寛文9(1669)		寛文９年(1669)９月、大沢の池田亀麻呂が、奥ノ院黒森山の観世音へ大乗妙典一石一字を納めた。
49	恐山菩提寺 (むつ市田名部)	寛政2(1790)	大日本回国中供養塔	廻国供養塔。「田名部世話人　熊谷又兵衛政賀　菊池重右衛門政幸」の人名あり。
50	恐山 (むつ市田名部)			岡山県笠岡市・木山公二氏所蔵「大乗妙典納経帳」(元文３・1738)に、恐山で納経している記録がある。
51	独峯山経塚 (むつ市川内町川内)	享保18(1733)		独峯山(標高177m)頂に所在。
52	観音平経塚 (むつ市川内町川内)	近世？		
53	浄土宗流水庵 (むつ市川内町蛎崎字寺ノ前)	明和元(1764)		日本回国願主による大乗妙典供養塔。
54	長福寺経塚 (下北郡佐井村)	近世		
55	自由寺経塚 (下北郡風間浦村下風呂)	近世	大乗妙典一字一石・・・	曹洞宗下風呂山自由寺境内に所在。自由寺の創建は、宝暦３年(1753)。

青森県埋蔵文化財調査センター　研究紀要　第19号

発行年月日　2014年(平成26年)　３月26日
発　行　者　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042　青森県青森市大字新城字天田内152-15
TEL(017)788-5701　FAX(017)788-5702
印　　刷　協同印刷工業株式会社
〒035-0041　青森県むつ市金曲一丁目15-８
TEL(0175)22-2231　FAX(0175)22-0435

BULLETIN

OF
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER

No. 19

CONTENTS

Junko Suginomori
Preparations of the Stone Specimens at Aomori Prefectural Archaeological Artifacts Research Center

Takashi Saito
Northern Tohoku and Southern Hokkaido seen from the Change of Stone Tools in the End of the Middle Jomon Period.

Shigehiko Narita
A Sutudy on Dogu (Clay Figurines of the Jomon Period)of the Beginning of the Late Jomon Period:The Aspects of Noba Dogu Type

Junichi Kimura
Inheritance of the Memories on the Archaeological Materials.

Sakiko Konno
A Study on Kyoseki (the Pebbles on which Sutra is written) unearthed from Souma-ku in Hirosaki City.

March 2014
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER

この印刷物は350部作成し、印刷経費は１部当たり1,428円(うち県負担1,428円)です。